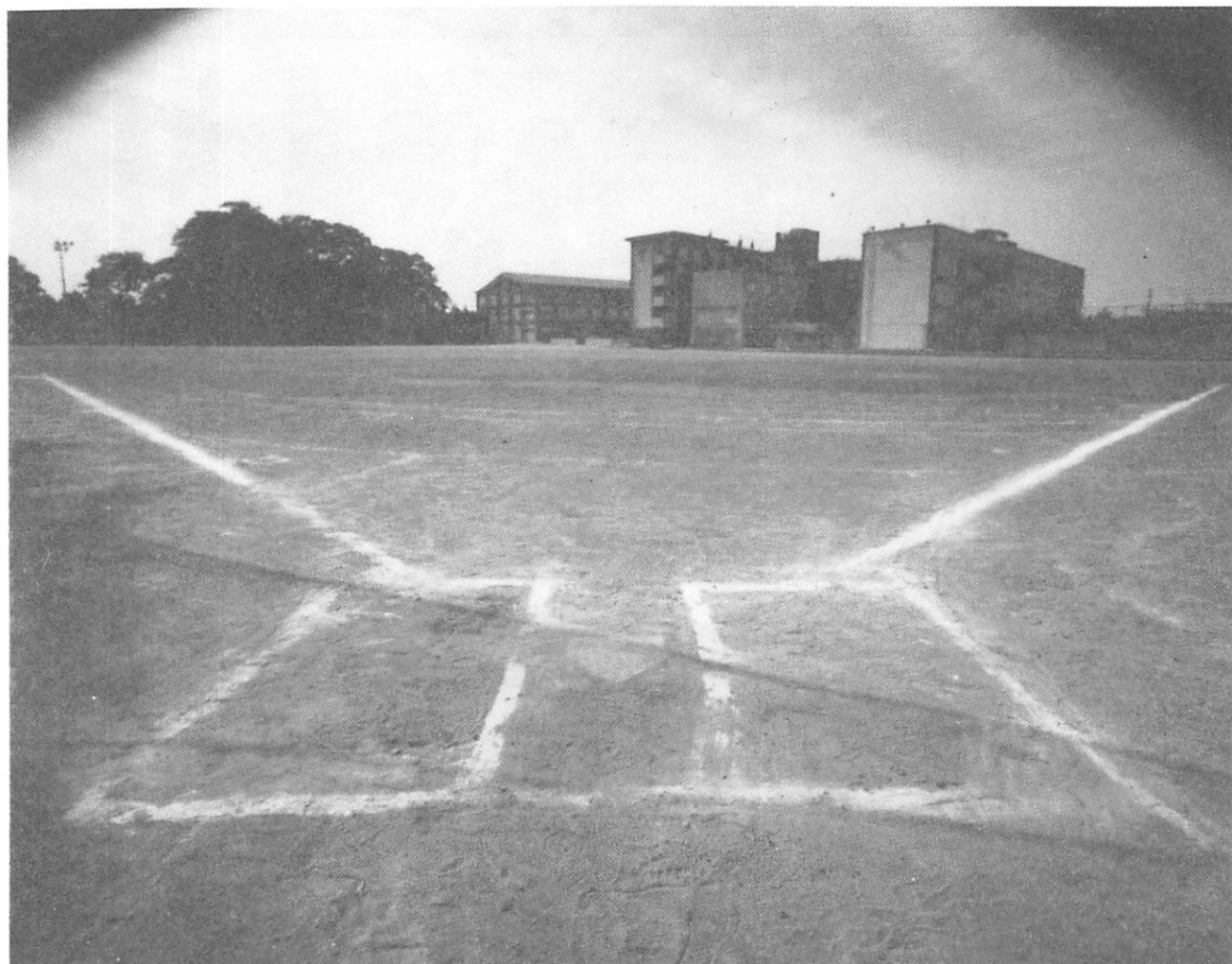




大学紛争の時代 —— 理想の姿求めて

全共闘系学生と機動隊の「攻防戦」のこん跡を留めた姿に紛争のしこりを引きずっているかのような東大の安田講堂。その改修工事が近く始まるとのニュースが報じられた。

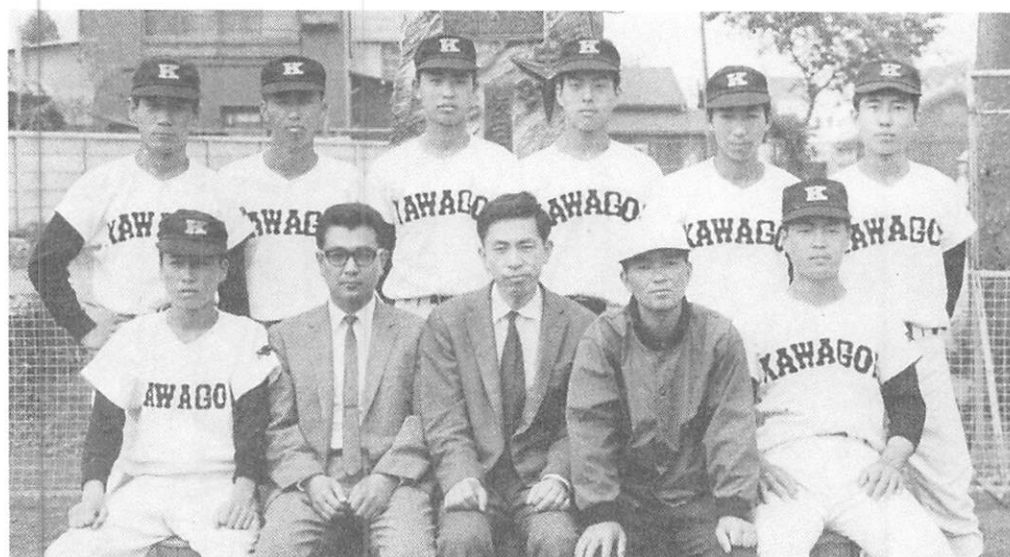
大学とはなんだ、教育とはなんだ、人生いかに生きるべき、自分はいったいなんだ……と、世の中の既成の権威を否定した1960年代

末の学園紛争。この時代に学生生活を送った世代にとっては、自らの人生において、象徴的な出来事だったはず。

20年の歳月は、ヘルメットと投石、バリケード、放水、催涙弾……など、大学の変革を叫んだ当時の学生たちの声が、歴史のなかに埋もれていくような感覚になる。高度成長を続ける日本社会のなかで

旧態然としていた大学社会について、教師が、学生が、社会がそれぞれ自己の存在を通して真剣に考え、議論し、新しい、理想的な姿を求めて思索を越えた行動をした時代であった。現在の安定した社会にあっては、欲望も多様化し、個人の生活が優先される。“自己否定”などといった言葉も遠い彼方へ行ってしまったようだ。

昭和44年卒業 (高21回)



前列左より
宮根監督・皆木
吉田・中島先生・野口先生・
橋本・石本
後列左より
浅見・長谷川・行方・松本・



熊高交歓会後チーム全員で

野球部

皆木越治 野口(進)先生
二年九名 三年八名

現在我々が入っている野球部の目的を端的に言うと「甲子園出場」のみである。しかしそこまでの道程は多難で険しく試合に勝つより先ず自分に勝たなくてはならない。が「野球」を何よりも好きなら幾多の苦難も克服できると私は断言するのである。我々は高度な野球、我々の野球を目差し毎日を明け暮れているのである。これからの社会は個人の實力がものをいうのでありかつ人間性が尊重されるのである。實力とはただ単なる能力から出るのではなく健全な心身に宿る魂から出るのである。残念ながら現在川高生は口ばかり達者で、精神力、体力の伴わないスケールの小さい人間があまりにも多過ぎる。四十三年度の新入生諸君の時代からこれを打破してもらいたい。その手段として野球部を選んでくれるならば私としても幸いである。

(新入部員勧誘文より)

川越球場

▽
—
[9]
93

大宮商 0 0 1 0 0 0 0 0 0 0
川越 0 0 1 0 1 0 0 0 0 0
〔評〕 川越は皆木、浅見の好
健投で大宮商に逆転勝ちした。
大宮商は三岡、志村、小林、渡
山、白鳥が連続安打して先取点を
あげた。しかし、川越もその裏
すぐ反撃、皆木の内野安打で逆転
に成功した。

【大宮商】	打	安	点
⑥遠山	4	3	0
④白鳥	4	1	1
⑤先飯	4	0	0
②伊藤	4	0	0
⑦磯志	3	1	0
⑧小村	3	0	0
	3	2	0
計	32	9	1

【川越高】	打	安	点
⑤大野	4	3	0
⑥大石	4	3	0
⑦皆本	3	1	1
⑧松本	4	1	1
⑨橋本	4	1	0
⑩清本	1	1	0
⑪田宮	0	0	0
⑫浅見	1	0	0
⑬長谷	3	1	0
⑭石川	3	0	0
計	29	9	2

【三塁打】橋本
【二塁打】伊藤勝
【三振】大3 川3
【四死球】大0 川
【失策】大1 川1

川越球場

△
一
同
報

寄	居
1	0
0	0
1	0
0	0
3	0
2	0
×	0
7	0

〔評〕 寄居は川越の先覺者木

のコーナーをつくらせて大活躍し、六回打者四人を出したほかは毎回三者凡退で完結した。川越は斎藤野手の失策４と堀口の翻球難から四球で出塁してはスクイズを重ねて得点、七回コールドで勝った。

一回 川越は川が三ゴロ失、石水の中前打で一、三塁。皆本ゴロで凡退のはや。西郷松本のスクイズで点を取、三回に二点、五回にも二点と、いずれもスクイズを決めて勝負を決めた。

一回、川越は石川が三ゴロ失
石本の中前打で一、三塁。皆本三
ゴロで凡退のあと四番松本のスク
イズで1点を先取。三回に1点、
五回にも2点と、いずれもスクイ
ズを決めて勝負を決めた。

川田力投、川越を完封

熊	川
谷	越
0	0
0	3
0	0
0	3
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	6

【評】熊谷が川田の好投と二、四回の集中で打拂した。熊谷は二回、打者八人で五安打、熊谷は先制の3点をあげた。この回熊谷は川田が投球に倒れたあと古田、山中、根岸、小久保が連安打して二点、次に持田も内野安打して小久保を返し、四回もリードを奪った。調子の波に乗る熊谷は三回にも2安打を放ち、四回には川越の竹本

に1点も返せなかった。

昭和43年 春季大会

1 回戦 川越 7 - 2 鴻巣

2 回戦市立川口 5 - 4 川越

昭和43年 50回大会

優勝興国 参加 2,485校

埼玉代表 大宮工高

埼玉予選

1 回戦 川越 2 - 1 大宮商

2 回戦 川越 7 - 0 寄居

3 回戦 熊谷 6 - 0 川越

川越 故障者続出に頭痛める

甲子園めぐり (2)

かつては甲子園に出場した古豪も、故障者の続出から誤算が重なり、オーダーも固定できないうちという状態。頼みの綱は夏の大会に強いという同校の輝ける

る。春の大会は二回戦、西部地区
区では一回戦で敗退し、戦績は
2勝6敗1分け、(三日現在)
でバツとしない。

料ばかり多いが、選手一人一人の根性で、昨年以上の試合をした。

練習には参加したが、春の大会を前に肩を痛めて投手は断念せざる。このための投手陣に浅見左衛門、石川遊撃手でまかなうことになり、さらに長谷川一恵手がリリーフを勤めることになった。チームの中心である投手が確定しないので、レギュラーが抜けただ守備の面ではガタガタ。攻

位置	氏名	学年	投手	打者
⑥	大野 裕	(2年)	投右	打右
④	石松 兆治	(3年)	投右	打右
⑧	根本 康孝	(3年)	投右	打右
⑦	皆木 越	(3年)	投右	打右
③	長谷川 昇	(3年)	投右	打左
⑨	岡本 悟	(3年)	投左	打左
②	吉田 泉	(3年)	投右	打右
⑤	斉藤 栄	(2年)	投右	打右
①	浅見 魚保	(3年)	投右	打右

42・43年度
チームの思い出

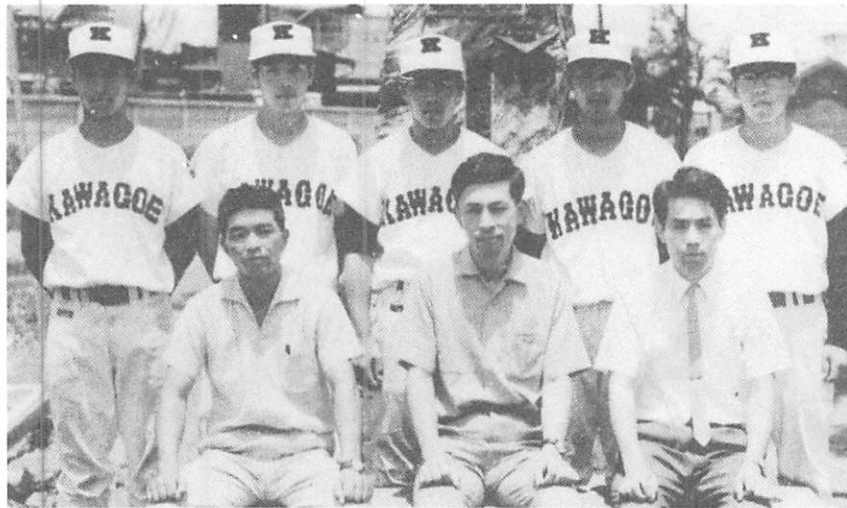
監督宮根七郎

(昭和39年)

で埼玉国体の年であった。はじめはチーム編成が精いっぱい、の状況であったが、夏の大会で存分に活躍した。三回戦では国体強化チーム深商を延長引分・翌日再試合の末破った。前日の試合で捕手の吉田君が不運な負傷で出場不可能になったこと、その欠を補った中村君の健闘、そして炎天下で連投に耐えた皆木君等の姿は強く印象に残っている。

43年は、エース皆木君の病気が十分回復せず、控えの浅見君も骨折後で苦しい大会となった。気力・和については申し分なかったが、努力や練習成果の結実をみなかった。勝負には運不運のあること怪我病気の恐さ等を体験した。

昭和45年卒業 (高22回)



後列左より 齊藤栄左翼手(主将)・大野裕遊撃手(副将)
宮岡隆中堅手・高橋一明一塁手・
清水晴雄右翼手
前列左より 宮根七郎監督・野口進部長・安野昇顧問

〔秋〕

▶昭和43年秋季関東大会地区予選

・1回戦 9月13日 初雁球場

川 越	1 0 0 0 0 1 0 0 0 0	2
玉川工	0 2 0 0 0 0 0 0 0 1	3

(延長10回)

吉川一大野

〔春〕

▶昭和44年春季関東大会県予選

・1回戦 4月13日 県営大宮球場

川 越	0 0 1 0 1 0 1 0 6	9
春日部工	0 0 1 0 0 0 0 0 0	1

(川越、9回に一拳6点)

〔評〕試合を有利に進めた川越は9回疲れの出て来た荒木を攻め、吉川の左前打を足場に暴投、死球、3犠打と高橋の中前適時打で決定的な6点を上げた。春日部工は3回併殺くずれで1点をかえたの

が精一杯だった。(埼玉新聞)

⑧②⑥⑦⑨③⑤①④

宮相大清齊高齊吉浅 計
藤 藤 藤 藤 藤
岡 沢 野 水 橋 川 見
(栄) (文)

打	4	4	4	4	5	5	5	4	2	37
安	2	0	2	0	4	2	0	2	0	12
点	1	0	2	1	0	3	0	0	0	7

2回戦 4月19日 岩槻球場

川 越	2 0 0 1 0 1 0 3	7
松 山	0 0 0 0 0 0 0 0	0

(8回コールド)

川越一方勝ち

〔評〕川越のワンサイドゲーム。川越は松山の内野陣の欠点を巧みにつき、盗塁、エラー、内野安打など多彩。松山にもう1つ工夫のある試合技術が欲しかった。

(埼玉新聞)

⑧②⑥⑨⑦③①⑤④

宮相大齊清高吉齊浅 計
岡 沢 野 藤 水 橋 川 藤 見
(栄) (文)

打	3	4	3	3	4	4	3	4	4	32
安	0	1	2	1	0	2	0	0	1	7
点	2	0	1	0	0	3	0	0	0	6

・準々決勝 4月27日 県営大宮球場

熊谷商	0 1 0 1 3 0 1 0 0	6
川 越	0 0 0 0 0 0 0 0 0	0

吉川一相沢

(二)高橋

▶昭和44年春季西部地区大会

・1回戦 5月9日 初雁球場

川 越	2 0 1 1 0 0 6	10
狭 山	0 0 3 0 0 0 0	3

(7回コールド)

吉川一相沢

(三)齊藤栄 (二)宮岡

・2回戦 5月12日 初雁球場

川 越	0 0 0 2 1 0 0 0 0	3
川越商	0 2 0 0 2 1 0 0 0	5

吉川、齊藤栄、石川一相沢



7月16日 勝利の校歌

〔夏〕

▶昭和44年全国高校野球県予選

・1回戦 7月16日 初雁球場

羽生実	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
川越	2	0	0	0	0	0	2	2	X										

川越、大差でくだす

〔評〕初回に先取点をあげた川越が波にのり、実力以上の大差で羽生実をくだした。7、8回疲労が目立ちはじめた羽生・杉下投手を意外なバントでせめたて、試合巧者の面目を発揮した。羽生実は散発7安打で得点に結びつけられなかった。（埼玉新聞）

④②⑥③⑧⑨⑦①⑤

加相大高宮清吉丸 計

藤沢野橋岡水藤山川

打 4 3 4 4 3 4 4 2 2 30

安 2 0 2 3 1 0 0 0 0 8

点 1 0 0 1 2 0 0 0 1 5

・2回戦 7月17日 初雁球場

川越	1	0	0	0	0	1	0	0	0	2	4
草加	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2

（延長10回）

川越、手堅く勝つ

〔評〕川越は延長にはいった10回高橋の左翼線二塁打で勝ち越し、さらにスクイズで加点した。同校の作戦は手堅く犠打7を記録したことで裏付けている。

草加は9回、敵失で同点に追いついたが川越・吉川投手の球威はないが、高低の変化球にごまかされた。（埼玉新聞）

④②⑥③⑧⑨⑦⑤①

加相大高宮清吉丸 計

藤沢野橋岡水藤山川

打 4 2 4 5 3 3 4 4 4 33

安 2 1 1 3 1 0 0 0 0 8

点 0 0 1 1 1 1 0 0 0 4

・準々決勝 7月23日 県営大宮球場

川越	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
熊谷商	0	0	0	1	0	0	0	1	X		2

熊商、勝ちを拾う

〔評〕川越、吉川、熊商、田島睦両投手とも球威こそなかったが打者の手元で変化するクセ球をあやつって好投した。とくにストレーは低めいっぱいコントロールされたので両校ともなかなか打ちくずせなかった。

同点で迎えた8回、熊商が貴重な決勝点を拾った。先頭江黒が四球で出ると、思いきった二盗で攻め無死二塁から、こんどはバントで走者を進める戦法に出た。松崎は三球目を投手左へ絶妙のバント。吉川投手はダッシュよくこのタマをすくいあげたが、そのあとの三塁送球が悪かった。タマは転々とフェンスまで達する間に、江黒が決勝のホームを踏んだ。

9回、川越最後の反撃も二死一、二塁としたのが精一杯、吉川が三ゴロに倒れて万事休した。

川越が初回、敵失で1点、熊商も4回、安打の反町がバントで二進後、山田の右前適時打で1点と

それぞれ得点したが、以後はチャンスらしいチャンスがなく盛り上がりなかった。熊商の辛勝。

（埼玉新聞）

④②⑥③⑧⑨①⑦⑤

加相大高宮清吉丸 計

藤沢野橋岡水川藤山

打 4 2 3 4 4 3 4 2 3 29

安 1 0 1 1 1 1 1 0 0 6

点 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0

振 0 0 0 0 0 1 1 0 1 3

球 0 1 1 0 0 0 0 0 0 2

「努力」 高橋 一明

まがりなりにも、2年半続けられた、やり通せたことが、一番の思い出といえる。

同期入部者は、たしか10人以上いたと記憶しているが、結局最後まで残ったのは、5人であった。

私も2年になった時、いろいろな理由をつけ、退部を申し出たことがあったが、宮根監督に諭され、続けることになった。

20年近く経った今考えてみても、もしその時辞めていたら、高校時代の思い出として浮んでくるものは、自分自身に負けた敗北者としての3年間でしかなかったように思われる。

素質もセンスも無かった私が、背番号3、4番として、3年生のあの熱い夏の県大会を終えることができた。

「宮根監督」 斉藤 栄

ゴールデンウィークに監督が、「駅は人がいっぱいだったなあ。」とつぶやいたことがあった。監督

だったたまにはどこかに行きたいのだろうと思い奮起した。3年間ですべてのポジションを経験した。ひとつの位置に慣れたころ他

の位置にまわされた。ショックだった。しかし、それが卒業後に生きた。自分も監督となった。迷ったときの相談相手は宮根監督だった。

昭和46年卒業 (高23回)



後列左から 斉藤文夫、吉川茂男、相沢明、高山茂
前列左から 丸山武、野口進部長、宮根七郎監督、浅見弘

① お も い 出 ①

相沢 明

夏の大会1回戦、対川商、4回表1死2、3塁。バッターボックスに向かう途中、大宮球場のバックネットの後ろにいる角田先輩と兄の「思い切っていけ」という声が今でも思い出される。2点タイムリーの2塁打、その後3塁走者でのスクイズ失敗、3本塁間に挟まれ思い切って捕手目がけ激突、下前歯4本顎の骨から骨折、異常に腫れ上がった顔でマスクを被り、災天下、ジュースだけの食事で対上尾戦を戦う。通常では絶対にできまいと思われる体験と、それが行へた夏の大会の雰囲気が今だに忘れられない。

高山 茂

最後の夏の大会で上尾の豪腕投手薮島から3塁打を打ち、3塁ベ

ース上でガッツポーズをした姿は、今でもはっきり覚えている。それまで目立った活躍がなかった自分は、最後のこの大会で、川商戦上尾戦と最高の活躍ができ、今までの苦労が報われた思いであった。6人の仲間と、暑い中、寒い中を共に頑張り、何度かの危機を乗り越え、川高野球部の伝統を受け継げたことは、大いに自慢できる。

思えば、片道2時間近くをかけて、遠距離通学に堪え、よくやり通したと思う。無心に白球を追いつ続けたこの3年間こそ、私の凝縮された青春であった。

吉川 茂男

70年の歴史の1ページに加わる事を幸せに思う。がむしゃらに過ごした3年間だったが、最良の時であったろう。今でも時折、無意識にシャドウピッチングをして、

フォームの点検をしてしまう。青春が体にしみ込んでいるようだ。

浅見 弘

野球部3年間を今振り返ってみて、「良く続いたものだ」と言うのが率直な感想で、通学に1時間半以上かかり、毎日家には寝に帰るだけと言う生活でした。今では職業と野球とは密接に結びつき、特に労を惜しまず御指導下さった宮根先生に感謝しております。

丸山 武

私達同期の仲間は、入部したての頃には、十数名いたが、二年生の時には、6名と少なくなってしまいました。練習試合の時に先輩の力を借りたことを覚えています。

私は家が遠いため、朝は早く家を出て、練習が終って帰宅をする時間は、いつもおそかった。挫折しそうな時もありましたが、良き球友たちと、三年間最後まで頑張ることができました。

すべてが青春時代の良い思い出であり、川高野球部OBの一員になれた事を光栄に思います。

斉藤 文夫

先日、地域のソフトボール大会に参加致しました。その時の1つ1つのプレーが、高校時代、白球を追っていた時の思い出と重なり合って、楽しい一時を持つことができました。今の幸せな楽しい生活も、苦しかった練習を耐えて、乗り越えられた勝利感の上に成り立っているものと、きびしい訓練を受けられたことに、宮根監督、先輩、後輩に、とても感謝しております。益々の部の発展を心よりお祈り申し上げます。



●主将として 相沢 明

いままで練習してきたすべてのものを出し尽してぶつかっていく。一試合一試合を大切に、最後の機会を有意義なものにしたい。ナイン全体の気持ちも日増しに盛り上

⑩ 昭和45年夏季大会 1 回戦

川越【戦力】綿密なプレーが身上の守りのチーム。対戦相手をよく研究して試合にのぞむ。

【中心選手】島田、浅見、相沢、高山○俊足をいかして盗塁、ヒットエンドランと“かきまわし屋”だ。【夏型】伝統的に夏の大会に強い。

ってきているし、打力も向上したので、いい線までいけると全員が自信を深めている。やる気は十分。あとは調子をととのえるだけ。高校生らしく全力をつくし悔のない試合をやりま

大宮球場

相沢、先制2塁打

川越高
が快勝

【評】川越は4回表、失策。野選で無死1、2塁。高山の犠打で1死2、3塁の好機をつかみ、4番相沢が見事期待にこたえてライト左を破る2塁打で走者を一掃。先取点を

⑩ 昭和45年夏季大会 2 回戦

上げた。8回にも3本の長短打と四球でダメ押しの2点を加え、試合を決めた。しかし後半、吉川の要所をしめるピッチングに押さえられていた川越商も6回荒井の2

大宮球場

川越、9回の反撃ならず

【評】上尾は薮島が6回までノーヒットで押える。打っても2回に6本の長短打を打ちまくって4点。好調そのもの。川越は吉川が中盤から立直って上尾の打撃を食止め

反撃の機会を待った。7、8回。ようやく薮島が乱れ始める。チャンスだ。最終回、高山、相沢が連続安打。吉川が四球を選び2死満塁。大野はついに四球で押し出

【川越】	打安点
⑥ 嶋田	3 1 0
④ 浅見	4 0 0
⑧ 高山	3 1 1
② 相沢	4 1 2
③ 大野	4 0 0
① 吉川	4 0 0
⑦ 篠原	4 1 0
⑤ 丸山	2 1 0
⑨ 斎藤	2 1 0
振球機盗残	
3 2 3 3 4	30 6 3

【川越商】	打安点
③ 荒井	3 1 0
② 長谷川	2 0 0
H 林	1 0 0
④ 天沼	3 0 0
H 小沼	1 0 0
⑧ 小原	4 0 0
⑨ 島田	3 0 0
⑦ 斎藤	3 1 0
① 平野	3 1 0
⑥ 志山	3 1 0
⑤ 中	3 0 0
振球機盗残	
3 1 1 1 4	29 4 0

【川越】	打安点
⑥ 嶋田	4 0 0
④ 浅見	3 0 0
⑧ 高山	4 2 0
② 相沢	4 1 0
③ 大野	4 0 0
① 吉川	2 0 0
⑦ 篠原	3 1 1
⑤ 丸山	4 0 0
⑨ 斎藤	2 0 0
振球機盗残	
8 5 0 0 7	30 4 1

【上尾】	打安点
⑨ 本多	5 1 0
⑧ 若山	4 1 2
② 藤田	4 0 0
⑥ 河野	4 2 0
⑤ 野原	4 2 0
④ 福島	4 1 1
① 薮島	4 1 1
③ 岡本	4 2 0
⑦ 金子	3 0 0
振球機盗残	
1 1 0 0 9	36 10 4

ポジション	部員名	学年	出身中学校名
⑥	嶋田 斎	1	飯能一中
④	浅見 弘	3	梅園中
主②	相沢 明	3	高階中
③	大野 尊史	2	川越富士見中
⑧	高山 茂	3	金子中
①	吉川 茂男	3	武蔵中
⑨	斎藤 文夫	3	住吉中
⑦	篠原 久典	2	川越一中
⑤	丸山 武	3	武蔵中
補	撞井 邦弘	2	足立中
々	光地 照雄	1	住吉中
々	島田 昌芳	1	川越一中
々	木島 宣之	1	初雁中
々	粕谷 孝志	1	城南中
々	深川 正雄	1	新座中
々	細川 一正	1	川角中
々	船橋 博俊	1	初雁中

川越高	0 0 0 2 0 0 0 2 0	4
川越商	0 0 0 0 0 0 0 0 0	0

▷2塁打 相沢、丸山(高)
荒井(商)

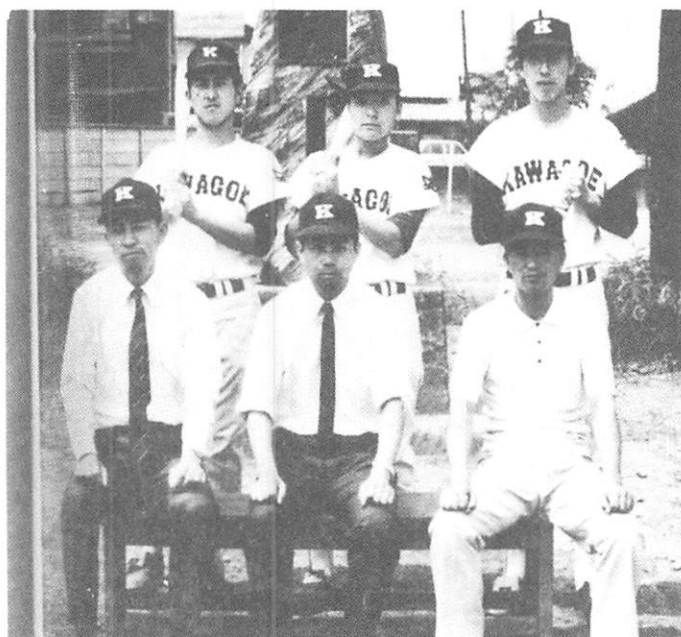
塁打で好機をつかんだかに見えたが、スリーバンド失敗。荒井もピッチャーのけん制に支えられる不手際からチャンスをつぶした。

川越高	0 0 0 0 0 0 0 0 1	1
上尾	0 4 0 0 0 0 0 0 X	4

▷3塁打 高山(川)
▷2塁打 河田(上)

ホームを踏む高山の顔が喜びにあふれ、ベンチもわいたが、あとが連続ずついに逆転できなかった。強敵上尾を向うに回して川越もがらばった。

昭和47年卒業（高24回）



想　　い　　出

後輩に感謝！

撞井 邦弘

昭和47年卒で、3年間野球をやり通したのは私を含めて3名です。したがって1年下の後輩たちとも同期のような気持ちで野球部生活を送りました。その後輩たちが、僕らが抜けてすぐの秋の県大会で決勝まで勝ち進んだ時は、正直言って驚きましたが、必死で応援したものです。

我々の最後の夏の大会も、その後輩たちのお陰で2試合勝つことができ、ベスト9に残りました。（ベスト8を決める最後の試合で負けたのでベスト9、正しくはベ

スト16）何しろ投手を除く内野陣はすべて2年生、彼らの図々しさ？のお陰でよい思い出ができた、今でも感謝しています。

我々47年卒も、はじめから3名だったわけではなく、1人減り、2人減りし気が付いてみると3名になっていたというわけで、辞めていった仲間には素質のある者が多くいましたし、当時は、だんだん人数が減るたびに、「野球の上手な順に辞めていくなあ」と話したりしたものです。実際に私は、そのお陰で試合にも出場できたわけで、今ではその辞めていった連中に感謝しなければいけないと思っています。

怠け者の自分にとって夢中になって野球に取り組んだ高校3年間の生活は、後にも先にも経

験できない貴重なもので今の自分の大きな支えとなっています。

最後に、我々が果たせなかった夢、「甲子園出場」を是非とも、近い将来に果たしてくれることを切望してペンを置きます。

憧れの的、川高野球部

篠原 久典

川越高校が昭和34年の甲子園夏の大会に出場して以来、『川高野球部』は僕にとって憧れの的でした。当時は今と違って、少年達にとってスポーツと言えば野球であり、野球が上手であることが少年達の誇りでした。ですから当然の事のように高校野球を川越高校でやりたい、と思いました。『川高野球部』で野球をやるのが夢でした。野球部には中学を卒業した春休みから参加しました。

野球部に入ってみると、中学野球と全く違う硬式野球の楽しさと厳しさを体験しました。そして硬式野球以外は野球ではない、と思い込んだものです。進学校の野球部共通の悩みで、初め15、6人いた同期生で、結局3年間やり通した仲間はたった3人になってしまいました。一年上の上級生も6人で、下級生が入部する迄は1チームの人数9人ぎりぎりでした。大会前はだれ一人として怪我や病気は当然の事ながら御法度です。同期の仲間が3人しか居なかったことは残念ですが、或る意味では、上級生と下級生との連帯感が特に強く、充実した野球部生活を送ることが出来て良かったと考えています。

僕は、中学時代、矢張り野球部に在籍し、三塁手のレギュラーでした。一方、投手の大野は、中学で野球部でしたがレギュラー選手ではありませんし、中堅手の撞井に至っては川高で初めて野球部に入部したのです。ですが、川高野球部で2人は素晴らしく成長しました。大野は夏の大会の1、2回戦を2戦とも1安打完封してしまい、撞井も安定した守備を見せ、1、2回両戦で安打を放っています。

今でも、夏の大会の3回戦で川口工業に9対零の七回コールド負けを喫した事は悔しくてなりません。出来ればもう一度鍛え直して、当時のメンバーでリターン・マッチをしたい。でも何時は、後輩達がこの悔しさを晴してくれるでしょう。

『川高野球部』万歳！

まこと充実した9名

大野 尊史

野球漬けの3年間、振り返ってみれば、とても楽しく充実した3年間でした。最近の諸君には信じられない事でしょうが、我々が1年生の秋は、1年生3名、2年生6名の川越高校野球部9名という時期がありました。9名で行うバッティング練習・ベースランニング・トリックプレーの練習どれをとっても、まこと充実したものでした。時にはOBの人数の方が多いなんて日もあったぐらいです。

練習時間を9人でタッブリ使えるわけですから、鍛えに鍛えられたわけです。

私は3年の春から投手になり、夏の大会を迎えました。大会前の学校紹介で「川高は来年のチーム」と評する新聞もあり、私達は大いに奮いたちゲームに臨みました。初戦、2回戦と完封勝ちし、3回戦でシード校川口工業と対戦しました。何としても川工を破りベストエイトに進出したかったのですが結果は0－9（7回コールド）と力の差をみせつけられ、川越高校のユニフォームを脱ぎました。

悔いがないとは言えませんが、全精力を注いだこの3年間、私達はきっと輝やいていたことでしょう。毎年夏の高校野球大会が始まると、胸を熱くして観戦していますが、後輩達をもっともっと輝やいて、いつの日か又、甲子園で川越高校の校歌が流れる日を、楽しみにしています。

『輝やけ！川高野球部員!!』

夏の大会記録

・ 7月17日 1回戦									
川越高	0	0	0	4	1	1	1		7
杉戸農	0	0	0	0	0	0	0		0
大野1安打完封。7回コールド。									
・ 7月19日 2回戦									
春日部	0	0	0	0	0	0	0	0	0
川越高	0	0	0	1	0	0	0	0	1
大野！またも1安打完封。									
・ 7月22日 3回戦									
川越高	0	0	0	0	0	0	0		0
川口工	0	0	0	2	2	5	X		9
残念無念！7回コールドで敗れる。									
〈メンバー〉 ⑤嶋田 ④粕谷									
③木島 ⑨篠原 ①大野 ②島田									
⑧撞井 ⑦古谷 ⑥船橋									

昭和48年卒業 (高25回)



後列左から 船橋博俊 萩原篤志 粕谷孝志 木島宣之
(故)島田昌芳 新井芳明 古谷真一
前列左から 岸 勝 嶋田 斎 安野先生 野口先生
宮根監督 若山 聡 堀口正巳

古谷 真一

安野部長が、確か一度だけ監督を務めた試合がありました。二年生の秋の西部地区大会の時だったと思います。対戦校は、思い出せません。その日は、宮根監督の第一子誕生予定日であり、対戦校も弱小チームということで、安野部長が監督を務める事になりました。

試合が始まり、チーム一の俊足新井君が一塁に出た時、安野部長が私に、「新井は足が速かったかなあ？」と話しかけてきたので、「ええ」と答えると、安野部長が、「あいつに盗塁のサインを出したがい」と言ったので、私が「彼はいつもノーサインで走っています。」と言うと、安野部長は、「それじゃノーサインのサインを出してくれ!!」と言ったものだからベンチ

の中は、大爆笑。ともあれ、安野部長の名采配のおかげでゲームは、我校の大勝に終わりました。

萩原 篤志

野球部時代、何といっても印象に残っているのは、練習の途中で飲んだ水のうまさです。当時水を飲むことは、禁じられていましたが、フリーバッティングやノックの途中、外野の守備位置からこっそり抜け出して便所へ行き、その手洗いの水をよく飲んだものでした。この水は、何の変哲もないただの水でしたが、ほんとうにうまいと思い、むさぼるように飲みました。今では、汗をかくこともなくなり、水をうまいと思うこともなくなりましたが、高校時代一つのことに打ち込み、努力したことは、決して無駄ではなかったと

〈戦績〉

●夏の西部地区大会

- 1回戦 川越高10-0 所沢商
- 2回戦 川越高3-0 川越工
- 準決勝 川越高2-0 川越商
- 決勝 川越高4-2 飯能高

●秋の県大会

- 1回戦 川越高10-0 狭山ヶ丘
- 2回戦 川越高12-0 越生高
- 3回戦 川越高3-0 春日部工
- 準々決勝 川越高4-0 蕨高
- 準決勝 川越高5-0 春日部高
- 決勝 川越高0-12 熊谷商

●県大会みごと準優勝。

●秋の西部地区(途中記録なし)

- 決勝 川越高3-4 狭山工

●春の県大会

- 2回戦 川越高5-6 越生高

●夏の県大会

- 1回戦 川越高2-4 川口高

と思っています。

嶋田 斎

二年の秋、二度の西部地区の大会では、優勝と準優勝、県の大会では準優勝とすべて決勝まで行きながら三年になったとたんに公式戦で勝てなかったこの落差。振り返れば、三年の夏に初戦敗退して帰るバスの中で流した悔し涙は、新人戦の決勝で流しておかなければならなかった涙なのかもしれません。キャプテンとしての力量不足を感じ、力を残したままで好きな高校野球に終止符を打ってしまった不完全燃焼のこの想いは、今も私の気持ちの中にあります。

新井 芳明

在部当時を振り返れば、野球一途に打ち込んだという思いがうか

び、今、体中が熱くなってきました。宮根監督指導のもと甲子園をめざしていた時期、苦しい事ばかりでしたが、今思うと、良い時期、時間を野球ですごしたという思いが強く感じられます。

後輩の皆さんには、良き思い出を作るよう、練習に汗して下さい。

岸 勝

在学中に思い出に残ることといえ、二年生の秋の県大会で準優勝したことです。守備と攻撃がうまくかみ合って決勝まで勝ちすすみました。その大会第一戦の前日夜半から雨もようで当日も試合がやれるかどうか不明でした。そんな時、宮根監督が大宮球場へ行く途中、家へ迎えに来てくれました。その試合は、重大なピンチの場面でヒット性のライナーを好捕しました。試合のあと、監督からピンチの時の話が出て、『迎えに行ったかいがあったよ。』と言われた。試合に間にあって、みんなの役に立ててほっとしたものだった。

船橋 博俊

高校野球の監督をしている私が、自分の高校時代を振り返ってみると、精神的な弱さばかりが思い出されます。技術的・体力的には劣る川高が他校に勝るには、頭と精神力しかありません。そのことが、高校時代には、なかなかわかりませんでした。秋には、準優勝しながら、練習時代では、勝ちながら、春と夏の大会で簡単に負けたというのは、冬のメンタルトレーニング不足にほかなりません。是非とも後輩たちには、精神的に強く、本番に強い川高を築き上げてもら

いたいものです。



S47.7.夏の大会(於熊谷球場)

若山 聡

二年生の秋の新人戦地区大会の決勝戦(初雁球場)。初めてスタメンでライト6番で出場しました。一回表は、5番古谷君で攻撃が終わり、その裏ツーアウト一塁の時、ライトフライが飛んできました。

その時私は、金縛りにでもあったように体が動かなくなり、エラーをしてしまった。即、交替させられてしまい、その時のくやしさと皆に申し訳ないという気持ちは今でも忘れられません。幸いその後の県大会では準優勝し、ひとり胸をなでおろした次第でした。

堀口 正巳

一番の思い出は、やはり県大会の準優勝です。今思えば、一試合ごとに、チームが波に乗りましたが、勝負には、この勢いが本当には大切だと思いました。また、攻守とも基本に忠実なプレーができたことも大きいと思います。

残念なことは、三年生の春夏とも初戦で敗れたことです。やはり冬を越して勝つには、精神が大切です。私自信苦しい時にもう一つ気持ちが逃げていたように思いますが、もっとがむしゃらにやれたら良かったと反省しています。

粕谷 孝志

高校生活の中で野球部の活動は、自分にとって正に青春そのものであり、当時の経験は、社会人としての自分に非常に大きなプラスとなっていると感じます。特に組織人としての行動・生き方は、野球というスポーツが、個人プレーでなくチームプレーであるという点で意義があり、自分の立場の認識にも大きく生かされている気がしてなりません。

当時、練習がつらくて何度となく退部しようと思った事がありましたが、今となつては、野球を続けていてよかったという実感だけが残っています。

木島 宣之

編集を担当した関係で、私に与えられたスペースが、すこしなので、一言だけ書かせていただきます。野球を続けてきて一番素晴らしいことは、良き友だちとめぐりあえたことです。しかし、その友の中で、一人島田昌芳君が、23才の若さで他界したことは、残念でなりません。これからも残された10人で、彼の分までも、チームワーク良くやっていくつもりです。

【川高メンバー】

守備	選手名	学年	出身中	投打
⑤	嶋田 肅	3	飯能一中	右・右
⑨	岡 和彦	2	霞ヶ関中	左・左
④	粕谷 孝志	3	城 南中	右・右
③	木島 宣之	3	初 雁中	右・右
⑧	新井 芳明	3	三ヶ島中	右・右
⑦	古谷 真一	3	狭山西中	右・右
②	島田 昌芳	3	狭川越中	右・右
⑥	鈴木 和彦	2	城 南中	右・右
①	小野 一彦	2	福 岡中	右・右
補	萩原 篤志	3	福 岡中	右・右
	船橋 博俊	3	初 雁中	右・右
	岸 勝	3	川 越中	右・右
	松岡 弘樹	2	初 雁中	右・右
	梶 直樹	2	富士見台中	右・右
	若山 聡	3	豊 岡中	右・右
	堀口 正巳	3	高 麗中	左・左
	後藤 泰治	2	川 越中	右・右

(S47年7月 埼玉新聞より)

昭和49年卒業 (高26回)



後列左から 松岡・粟生田・後藤・鈴木・小野・岡
前列左から 作山先生・野口部長・宮根監督

◇グラウンドに滲みた汗

鈴木 和彦

私の高校野球は、先輩に連れられて入学前の春休みに始まった。それから夢中で過ごした2年数ヶ月。主将としての自分を見つめ直そうと、ネット裏の小屋でロウソクの灯を前に、1人座禅を組んだことも何度かあった。試合では、ここが見せばだという時には、自分の所へボールが飛んでくるのが楽しくてしょうがなかった。

私達6人は、良き先輩後輩に恵まれ、すばらしい高校時代であった。現在、指導する立場にあるが『我が川高野球部に入部してくる選手はすべて無限の能力を持つ』と信じることが私の理念である。

今日も練習が、飯田先生の碑の前での礼に始まり礼に終わる。70年の伝統が脈々と流れている。

◇私の3年間

松岡 弘樹

入部した当時、私は、同級生の中でいちばん小さく、硬式ボールもちゃんと持てない状態で、3年間野球を続けられるか大変心配でした。しかし練習を続けていくうちに、だんだん体も慣れ、疲れながらもみんなについていける様になりました。そして夏が終わり、新チームになった西部地区新人戦で、上級生のケガもありキャッチャーとして試合に出場し、優勝することができました。

我々の新チームとなった秋は、2年1年を合わせて11人で、練習するにも大変で、遠征でも大敗することがありました。春、夏は打てないチームで5点を取ることもできず、ピッチャーに頼る守りのチームで、もう少し打てればと思いつつ夏が終わってしまいました。

【戦績】

47年秋

〔西部地区予選〕

- ・10月2日 川高2－0川越農
- ・10月5日 川高5－3慶応志木〔県大会〕一ベスト8入り
- ・10月14日 川高3－2幸手商^(12回)
- ・10月15日 川高0－7大宮工^(7回)

48年春

〔西部地区予選〕

- ・4月18日 川高0－5川越工

48年夏

〔2回戦〕

- ・7月22日 川高5－2与野農工
- 〔3回戦〕
- ・7月23日 川高1－2川口工

川越、川口工に惜敗！

善戦むなく、力尽きる

〈3回戦〉

川越	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
川口工	0	0	0	2	0	0	0	0	X	2

川越の先取点にも、川口工の逆転劇にもエラーがつきまとった。

4回表、川越は相手のエラーに乗り、萩元の2塁打でまず主導権を握った。そのウラ、川口工も、エラーで出た走者をスクイズ等により返し、決勝点をあげた。この4回の攻防が明暗を分けた。エラーはあったが、個々に見るべきプレーがあり、終盤を盛り上げた。

(埼玉新聞)

◇高校野球の想い出

後藤 泰治

私が、川高野球部に入部したのは、昭和46年4月のことです。硬式ボールにあこがれ、大きな期待を胸に高校野球に第一歩をふみ入

昭和50年卒業 (高27回)



前列左から 野口進先生 森光真幸部長 宮根七郎監督
後列左から 小沢始外野手 樫山義朗内野手 浅利彰外野手
高山信雄外野手 河野弘光外野手

48年 秋

(西部地区予選)

【Dブロック】

豊岡	27日①	29日①
狭山		
狭山丘	27日②	29日①
川越		

秋季県高校
野球選手権西
部地区予選第
三日は、27日
午前9時から
川越市営初雁
球場で1回戦

二試合、2回戦一試合を行い、川越工豊岡、川越がブロック代表決定戦進出を決めた。

川越	1 0 0 0 0 2 0 1 0	4
狭山丘	0 0 0 0 0 0 1 0 0	1

(川) 塩野一林、三浦

(狭) 松村一宮寺

▷三塁打 浅利(川)

▷二塁打 福田、関根(狭)

第二試合は、送りバント、スクイズをことごとく成功させた川越が、効果的に得点を重ねた。狭山

ヶ丘も7回、二死1、2塁から一番福田の三塁線を破るヒットで1点を返したがそれまで。塩野の要所を押さえるピッチングに決定打を奪えず伝統校の巧さに屈した。

▶Dブロック代表決定戦

豊岡	1 0 0 0 0 0 2 0 1	4
川越	1 0 0 0 0 0 0 0 0	1

(豊) 野口一川村

(川) 塩野一林、三浦

▷暴投 塩野(川)

【評】 敗れたとはいえ川越・塩野投手の好投が光った。七回、豊岡は、ようやく疲れの見え始めた塩野を攻めたて、長野の死球を足がかりに坂下の左前打、小玉の犠牲バントで一死二、三塁の好機を作り、続く8番関根が一塁線に2ランスクイズ。関根が一塁線に刺れる間に二塁走者坂下も生還して1-1の均衡を破った。塩野は、アンダーハンドからスピードを殺

した投球で打者のタイミングをはずす頭腦的なピッチングでそれまで2安打に抑えていたが、精も根も尽き果てた感じだった。

【川越】 打安点

⑥田中	3 0 0	(豊)	(川)
③安藤	4 1 0	4 振	5
④樫山	4 0 0	3 球	1
⑨小沢	4 0 0	2 犠	2
⑧浅利	4 0 0	2 盗	2
⑦河野	2 1 0	2 失	2
⑤藤沼	2 0 0	4 残	4
②林	2 0 0	1 併	1
H加藤	1 0 0		
2三浦	0 0 0		
①塩野	3 1 0		
計	29 3 0		

秋季大会は、優勝川口工、2位川越工となったが、関東大会にて初戦敗退、翌春の甲子園出場はなかった。春は報徳学園優勝。

◆想 い 出 I

高山 信雄

「おいこら、君は終始食べているか寝ているかのどちらかで極めて動物的だな。」生物の富樫先生からこう冷かされたのは一年の夏の大会前頃だったろうか。とにかく一時限目の休み時間にもう弁当を平らげ、二時限目の休みにはパンを買って食べ、5分長い三時限目の休みには、食堂でうどんかカレーライス。昼休みの練習後の五時限目は格好の仮眠タイムで六時限目が“カット”なら一も二もなく部室へ直行。練習が終ってまた食べる所は、お決りのやきそば屋。あの太いめんとソースの匂いは今になつかしい。思えば生物の先生と言われた通りの生活だったようだ。

三十路に達した今では考えられない当時のエネルギー代謝量である。

49年 春 (西部地区予選)

【Aブロック】

豊岡 川越 所沢商 狭山丘 松山

“激戦区”の呼び声高い西部地区。この日の第一試合は所沢商－川越。所沢商の豊泉、川越塩野両投手の投げ合いで試合は淡々と進んだが所沢商は7回、ワンチャンスをものにして粘る川越を振り切った。

▶ 1 回戦

所沢商	0 0 0 0 0 0 3 0 0	3
川 越	0 0 0 0 0 0 0 0 0	0

(所) 豊泉－真柄
(川) 塩野－林、三浦

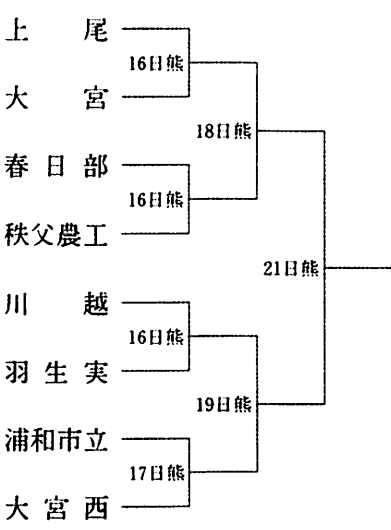
春の大会は、優勝川口工、関東大会に出場するが、優勝は、鹿沼商工となる。

想 い 出 II 樋山 義朗

私の高校時代の思い出は、みな野球に関する事ばかりで、野球部の思い出はここに書ききれないほどあるのですが、特にチームとして、強く印象に残っている試合の事を書きたいと思います。あれはたしか2年の秋の県大会地区予選で、所沢商業との試合でした。9回をむかえて、3点負けていた試合を逆転して勝ったのです。その時の最終回の攻撃をしている時、ベンチの中の熱気というか、勢いは全く試合に負ける気がしませんでした。いまでもその時の熱い気

持をなつかしく思い出します。

49年 夏 (県予選)



▶ 2 回戦

川 越	1 0 0 0 2 3 0 0 0	6
羽生実	0 0 0 0 0 0 0 1 0	1

(川) 塩野－三浦
(羽) 川島文、青木－棚沢、石野
▷三塁打 小沢(川)
▷二塁打 田中(川)、大島(羽)

【川越】 打安点

⑥田 中	4 2 2	(川) (羽)
③安 藤	4 1 0	3 振 3
⑨小 沢	4 2 1	6 球 1
⑧浅 利	5 2 1	0 犠 1
②三 浦	5 0 0	4 盗 0
④樋 山	5 1 0	3 失 3
⑦河 野	3 1 0	11 残 6
H栗 原	1 0 0	0 併 1
7高 山	0 0 0	
①塩 野	4 0 0	
⑤藤 沼	3 0 0	
計	38 9 4	

【評】1回、早くも先取点をあげた川越は、その後も試合を有利に進め、押し切った。先取点は敵失、二盗の小沢を浅利の右中間適時打でかえしたもののだが、5回に

は連続安打の田中、安藤を浅利の中前打などで、そして6回には無死満塁から田中の左翼線二塁打などでそれぞれ加点し、試合を決めた。

▶ 3 回戦

浦和市立	0 0 0 0 1 0 0 0 3	4
川 越	0 0 0 0 0 0 0 0 0	0

(浦) 植村－金田
(川) 塩野－三浦
▷三塁打 金田(浦)
▷二塁打 徳江、植村(浦)、浅利(川)

【川越】 打安点

⑥田 中	3 1 0	(浦) (川)
③安 藤	2 0 0	6 振 6
⑨小 沢	4 1 0	2 球 3
⑧浅 利	4 1 0	3 犠 3
⑦河 野	2 0 0	3 盗 0
H高 山	1 0 0	1 失 2
④樋 山	3 0 0	5 残 6
②三 浦	2 1 0	1 併 0
①塩 野	3 0 0	
⑤藤 沼	3 0 0	
計	27 4 0	

【評】試合を有利に進めた浦和市立は9回、疲れのみえた川越・塩野を打ち込み3点を奪った。勝利への不動得点だ。

浦和市立の先取点は、右前打で出た荻野が敵失とバントで三進したあと、黒木とのスクイズでホームを踏んだものだった。川越は走者を出すと必ずバントで送ったが、後続がなく、9回も左中間二塁打の浅利を返すことができなかった。

★我々の青春は、宮根監督によって、思い出となり残りました。皆、一生の宝となるでしょう。

昭和51年卒業 (高28回)



◆昭和51年卒の同期の桜

主将 田中喜政

昭和50年7月20日、全国高校野球選手権埼玉大会2回戦の対上尾高校戦2対3で敗れた試合が、我々51年卒メンバーの最後の試合でした。今、創部70周年に当たり、当時を振り返ると様々な思い出が甦ってまいります。我々の代は、当時としては珍しく（現在もそうかも知れませんが）3年生時に、10人の同期が居り、かつ2年生時からレギュラー経験者も5人おり恵まれた環境でありました。

十人十色とは良く言ったもので、10人が10人共様々な個性をもっておりました。センス抜群、隠し球の名人、相手チームのサインを見破る天才、1番ファースト安藤君、大会前にひじを壊し皆に迷惑をかけた、堅物男の私め、2番ショート田中、細い身体に秘めたパワー、

チーム唯一のオーバーフェンスのホームランを打ったチーム1の俊足男、3番サード藤沼君、チームで唯一人監督のノックバットを頭で折らせた男、最後にはやはり攻守で頼りになる男、4番キャッチャー三浦君、ひょうきんな中に真心面さをもち異彩をはなった5番レフト榊原君、監督に最も怒られなかった男、守備の模範と監督折り紙つきの名手、6番セカンド大矢君、常にマイペース、性格とは全く逆のクセ球である猛打上尾を翻弄させたチーム1のスタイリスト7番ピッチャー塩野君、唯一の右投左打ち、スイッチヒッターもやった器用な男、すねるとかわい甘いマスクの筋肉マン、8番ライト栗原君、骨を折ろうがなんのその、歯に衣を着せぬ鋭い指摘でチームを盛り上げた根性男、御存じ9番センター太田さん、そして、

【戦績】

秋 西部地区予選

川 越15-0 越 生

川 越4-1 玉川工

中央大会

川 越2-4 浦 和

春 西部地区予選

川 越3-6 狭山丘

夏 埼玉大会

川 越5-3 大宮北

川 越2-3 上 尾

三 田 大 榊 安 藤 栗 太 塩
浦 中 矢 原 藤 沼 原 田 林 野

野 口 先生
森 光 先生
宮 根 監督

最後の対上尾戦で、2点目を入れた栄光の2塁打を打った男、影の主将として常にチーム全体を叱咤激励した縁の下力もち、たまにしょぼくれたところが愛くるしかった林君。

これらの10人の同期が最後までプレーできた事は大変素晴らしい思い出として各人の胸に様々な形で残っていると思います。あの炎天下の夏合宿や冬の走り込み、サーキット・トレーニング等、決して楽とは言えない練習をやり通してこれた事は自分達の貴重な財産となっております。これも宮根監督の親身の御指導、諸先輩の御指導、後輩諸氏の御協力のおかげであります。記念すべき創部70周年にあたり今思う事は、今後も川高野球部で学んだチームプレーを生かして行きたいと思っています。

一 言

三塁手 藤沼 克巳

真夏の合宿練習が一番印象に残っています。練習の後風呂で体重を計ると毎日1キロずつ減って、とにかく辛かった。でも同期が10名と当時としては多い方だったので互いに励まし合ってなんとか乗りきれたのだと思います。うれしい思い出としてはなんといっても飯能戦で初雁球場で打った3ランホームラン。あの感触は今でも忘れません。あの頃の辛い練習を思い出すたびに、もっと頑張れと自分自身を叱咤激励しています。

中堅手 太田 和愛

高校時代の三年間というものは、当時はたいへん長く感じたように記憶している。というのも、毎日毎日、同じような練習を指導者の言われるままに、ただ夢中でやっていたように思う。時には、帰宅後も悔しくてしょうがなかった事が度々あった。しかし、今思うにあの三年間というものは、二度と経験することのない貴重な期間であったような気がする。その結果、忍耐力、精神力、体力では、人並以上のものが養われたと思う。

今思うと、三年間なんて、一生のうちでもほんのわずかな期間であるが、当時の三年間というものは、今後の人生に良い意味で、影響を与えと思う。

右翼手 栗原 雅美

野球部の3年間は、暑い夏合宿や冬のウェイトトレーニングといった練習のことが強く印象に残っています。特に、今でも当時の仲

間と会うと話題となる「15分間の昼休み」など、今考えるとよくもったと思います。卒業して10年以上たった今でも少々のがきくのも、当時の練習によって養われた体力と精神力のおかげだと思います。当時キツくてイヤだった練習ほど、今ではすばらしい思い出となっています。

捕手 三浦 正雄

ノックバットお面一本かち折れ事件について。

対上尾最終戦の前日タッチアップの練習中、レフトフライにもかかわらず何を思ったのか私は、ハーフリードしたため監督が激怒し、私の頭にノックバットの面が飛びバットが折れてしまいました。おかげで、上尾戦では一回表に、タイムリー二塁打を打つ事ができたと思っております。



外野手 林 和彦

昭和50年7月20日、炎天下の浦和市営球場が川高野球部に在籍できた自分の強烈な思い出のシーンだ。たった一度の打席は最終回一死無走者でめぐって来た。無心で振ったバットが左越2塁打を生み、大本命上尾をあと一歩のところまで追い込んだあのシーンこそ、監督に叱咤され続け、しょっちゅうエラーを繰り返し、全く流し打ちが身につかず、挙句に体の故障まで惹起した、つらいばかりの練習

の日々の総決算だったのだ。今となっては、監督さんやチームメートに感謝あるのみ。

投手 塩野 友是

最終回、2点のビハインドで1死1・3塁。現役諸君ならどうするね。多様な策のある場面だ。少なくとも初球から打つ手はないね。ところが打っちゃったんだな。しかも現役最後の試合でだ。相手は第1シードの上尾。しかし、3年間で最も自己昇華（単なる忘我かもしれないが）できた良い試合だったと思う。いづれにしても3年間この部に身を置けたことは今でも貴重な財産となっている。

最後に、当時監督であった宮根先生を私の結婚披露にお招きし、ご挨拶を頼んだ際にこうおっしゃった。「彼は、全く私のサインを見ない選手でした。」

左翼手 榊原 弘二

32分の3、この数字は我が人生のうち高校時代つまり川高野球部ですごした割合である。こうしてみると高校時代の割合はわずかであるが、思い出の中に占める割合はこの数字よりもはるかに大きいものである。汗を流したグラウンド語らった部室・そして試合の様子といまでもはっきり脳裏に浮かんでくる。思い出の1ページ1ページがしっかりと刻まれている。

そして現在、高校時代に挑戦したことのない一つの目標がある。それはフルマラソンを完走することである。もちろん健康マラソンとしてではあるが、完走できる日をめざし、昔の姿を思い出しながら走っている毎日である。

昭和52年卒業 (高29回)

(勝又)	(田中)	(古森)	(石井)
(野口先生)	(森光先生)	(宮根監督)	



あの頃は……

主将 投手 古森 茂幹

第58回全国高校野球選手権大会埼玉大会終了後、県高野連理事長長坂道男氏は、「今後はかつての古豪に替わって新興チームが台頭し、新しい戦国時代を迎えるでしょう。」と語っている。私の川越高校野球部時代の幕切である。古豪の筆頭である川越にとって更なる厳しい時代への突入であった。

高校入学時15名程度の同期野球部員が、最後の夏の大会時に4名になっていた。練習・試合共にかなりの量をこなしてきたと思うが、今考えると夢中でやってきただけの様な気もする。上級生が引退して私達のチームが始まり、最初の公式戦となった西部地区新人戦で準優勝したのが、記録としてはベストである。決勝戦の相手は翌年夏、甲子園出場を果たした所沢商業であった。この時は1対0と、敗れはしたが接戦であった。

この時点では彼我に大きな力の差はなかったのだ。一年間の使い方によっては大きな差が出るものである。

最後の夏の大会は、2回戦埼玉栄に対し、延長10回の末4対2で勝ち、3回戦川口工に対し1対7という結果であった。初戦の埼玉栄とのカードは、大方の戦前の予想は川越不利であった。結果は川越の粘り勝ち。先手先手を取る埼玉栄に対し2度までも同点に迫りつき、延長10回連続2塁打で振り切った。最後まで試合を捨てない気力が勝利を呼び込んだ。試合後埼玉栄監督は、「伝統のなさがすべてだ。」と語った。

新興チームが台頭してきて、先輩が築き上げてきた伝統はまねが出来ない大きな力であると思う。埼玉大会の結果を新聞で見ると、「古豪復活」の四文字を楽しみにしている。私の川高野球部時代を思い出してみると、少人数ながら全員が投手であり全員がタマ拾い

であるという意識で、一・二・三年が一丸となってチームワークを形成できた事が一番の思い出。これはまた、伝統の力でもあると思う。

今回70年誌の発刊に当り再度、伝統の重さを認識すると共に、今後の川越高校野球部の活躍に期待したい。

副主将 捕手 田中 照夫

多くの高校球児たちの最終目標は甲子園である。が、私たちにとっては、それは夢のまた夢でしかなかったように思う。勝つ喜びを味えずに終わってしまった。どうしてあの苦しい練習に耐えることが出来たのか、今でも不思議なくらいだ。

多くの思い出の中で、今でも思い出すことが出来るのは、秋の新人西部地区大会で準優勝したことだ。決勝戦は所沢商業が相手だった。惜しくも1対0で負けてしまったが、10人の部員で「やれば出来る。」を体で感じたものだ。

それからは一つも勝てずに翌年の最後の夏の大会を迎えた。運よく球場は、メインスタジアムの県営大宮球場だった。

2回戦からの出場、相手は一度も対戦経験のない埼玉栄高校だった。押され気味に試合は進み、9回を終わって2対2の同点。し

かも、先行を許し9回の表によりやく同点に追いつくという苦しい内容だった。延長10回でようやく4対2で勝った時は、本当に嬉しかったのを憶えている。

3回戦は対川口工業だった。このチームは凄いチームだった。卒業してからも活躍した駒崎や垢田がいたチームで、確かベスト8位まで進出したと思う。速くて重い球で押しに押されて、7対1という結果で完敗だった。自分の最後のバッターボックスは、2ストライク後2～3球粘り、結局とても良い感じで当たったレフトフライだった。フェンス手前3メートル位の所で捕られた惜しい当たりだった。

ゲームセットの声を聞いた時、夏の合宿や冬の苦しい練習が脳裏をよぎった。帰りの川越線の中では不思議に涙が出た。何故なんだろう。その時思った、この涙は犠牲にしたものの大きさに比べ得るものが無かったことへの悔しさの涙だと。高校時代の一番の青春の時に、他の同級生と同じように髪を伸ばして遊び回ることも、ガールフレンドを作って映画を見に行くことも、何もかもを犠牲にして得たものは、3回戦での敗退という結果でしかなかったのだ。少なくとも当時はそう思っていた。しかし今頃となってみて、犠牲にしたその何倍もの貴重な体験を自分はしたんだ、と気付いた。これから何年生き続けても、この3年間の思い出は私の心の中に勲章として残ることだろう。

監督さん、先輩、同期の皆、あ

りがとうございました。川高野球部万歳！

外野手 勝又 信宏

我々の年代は、入部当初10人ぐらいいたのですが、ひとりやめ、ふたりやめ、結局3年になった時には、4人になっていました。あの頃を振り返ると、練習がきつかったこと、そして親しい友人が退部した時の辛かったことなどが、思い出されます。自分ながら、よく3年間続けられたものと思います。

我々の夏の甲子園予選の初戦は、埼玉栄高校で、次が川口工業高校でした。当時、前評判では、埼玉栄高校と川口工業高校との対戦が好カードと新聞に書かれ、奮起したのを覚えています。結果は、前評判を裏切り、延長戦で初戦を飾ることができました。この日、初めて父と母が、私に内緒で大宮まで応援に来てくれたことが、今でも思い出されます。結局、次の対戦校の川口工業高校に負けてしまい、甲子園の夢は断たれました。負けた瞬間はそれ程でもなかったのですが、埼玉大会の決勝戦で代表校が決まった瞬間、自分の高校野球が終った実感が湧いてきて、悲しくなってきたことを思い出します。

高校野球が終わると、もう暫く野球をするつもりはなかったのですが、大学に入るとすぐに、また野球を始めていました。自分の気持ちの中での甲子園への憧れ、そして野球自体へのこだわりの結果にも思えます。社会人になっても、高校野球大会が始まると、何とな

くあの頃の緊張感が、甦ってくる気がします。きっと、これからも一生こだわり続けていくのだろうと思います。

一塁手 石井藤次郎

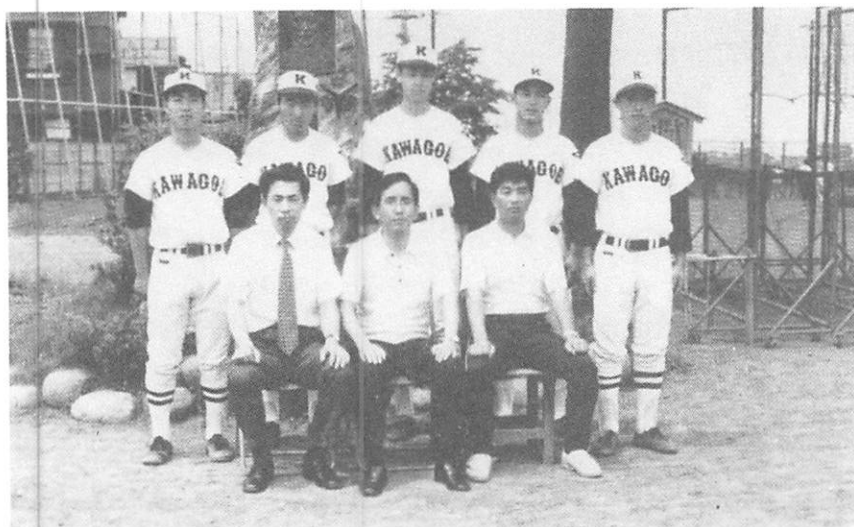
現在、私は都心のビル街で（情けない話ではあるが）毎晩比較的遅くまで仕事をしている。だから平日はまとまった運動はできず、日曜日に時間があるとスポーツクラブに行くのがせいぜいである。おそらく今の仕事を続ける限りこの生活は続くだろう。そしてこのまま年をとっていくのだろう。

こんな私にとってそういった意味で心の支えになっているのはやはり川高野球部時代である。自分は体力の限界を知るまで体を動かした。自分は先輩、後輩、同僚とあれだけ野球をやった。これらの実感がなければ今の生活が続けていても、何か大きな忘れ物をしたような焦りを感じているのではないかと思う。

かといって野球部時代がバラ色だったわけでは決してなく、むしろ地味な三年間だった。また、それほど我々のチームは強くなかったのも特にシーズン中は精神的に相当堪えた。自分自身よくやってこれたと思う。

もともと私は最初から野球部に入る気はなかった。15人程入部した同級生の中では入部は最も遅い方だった。入学後数週間迷っていたのだが、どうしても運動部に入りたかった。運動といえば野球しか知らなかったのである。

昭和53年卒業 (高30回)



後列左より 渡辺・斉藤・横田・沖田・橋本
前列左より 野口先生・森光先生・宮根監督

【秋】

県大会西部地区予選

一回戦 川高6-2 狭山工

二回戦 川高3-1 松山高

県大会

一回戦 川高2-11 秩父農工

★「新チーム結成」

斉藤 幸一

新チーム結成後、最初の大会である西部地区新人戦では、強豪立教高などを破り、決勝まで進出、あの仁村投手（現中日）の川越商と対戦し惜しくも破れたものの、秋の大会に向けて大きな自信となった。その秋の大会では、接戦ながらも、狭山工、松山高と破り、西部地区を勝ち抜き、県大会出場を果たした。

新チーム結成当時は、チームのかなり人間が、前チーム時より試合に出ていたこともあり、他チームに較べると余裕があったよう

に思われる。チームとしては、長打力はあまりなかったものの、渡辺、橋本、沖田などの俊足を活かした機動力で点を取り、守りでは走者は出しながらも、なんとか最少失点で切り抜けるというパターンであった。

さて、県大会では秩父農工との対戦となり、それまでの試合と同様に自分が先発したが、いつもと同じピッチングをしているつもりが、何が何だかわからない内に打ち込まれ、屈辱のコールド負けを喫してしまった。くやしさと情けなさでどうにもやりきれない気持ちであった。今思えば、楽しい思い出であり、何とかやり通せたことが今も自信となっている。

★「不真面目のすすめ」

橋本 一郎

私の過した高校野球を振り返る

時、いつも思うのは、四角四面、僧侶の様に真面目に取り組んで、よく最後まで頑張れたものだということ。

私は、「巨人の星」で野球を始めた世代ですので、こんなにも真面目に野球をやったのだらうと思うのですが、今、高校野球の真只中の君達は、「タッチ」の世代なのだろうから、存分に楽しく、元気良く野球をやったらいいと思います。素直で元気に、思い切りやっている野球は、それで十分に素晴らしい高校野球だと思います。辛いのにじっと耐える求道的な野球が良くて、楽しくスマートな野球は怪しからぬ、というような尺度は必要ないと思います。

それでも私は、野球が身にしみて好きだったようで、一浪の後、大学でも、選手としてプレーはできませんでしたが、マネージャーで四年間、又、野球と付き合う羽目になりました。

【春】

県大会西部地区予選

一回戦 川高6-3 狭山ヶ丘

二回戦 川高10-8 松山高

県大会

一回戦 川高0-1 熊商

★「春の県大会」

沖田 暢善

10年一昔とはよく言われますが、川高を卒業してはや10年。しかし今でも野球部時代の出来事は昨日の事のように思い出されます。

毎日厳しい練習に耐え、甲子園を目指して戦った試合の数々は、一投一打明確に覚えているし、又

それが今現在仕事をしていく中で大きな誇りとなっています。

昭和52年4月28日大宮球場。春の県大会にて川高は名門熊谷商業と対戦した。県下屈指の好投手加治を擁する強打の熊商に対し、川高斉藤投手も絶好調で息づまる投手戦の展開となった。5回まで両校0行進が続いたが、6回裏熊商は先頭打者が三塁線を抜く二塁打で初めてスコアリングポジションにランナーを進めた。熊商はこの時代打を起用。斉藤もうまくショートゴロに打ち取った…と思ったその瞬間、無情にも白球は遊撃手の前で大きくイレギュラーし、転々とレフトまで抜けてしまった。結局これが決勝点となり、1対0で敗れた。熊商6安打、川高4安打（自分は2安打）と見事な投手戦であった。この年の夏、熊商は県予選の決勝まで進んだ事から、いかにいいチームであったかが分ると思う。実はこの試合の一週間前、自分は練習中、イレギュラーバウンドをのどで受け、3針を縫う怪我をしていた。この試合にも抜糸をせずに出場する羽目に合ったのだが、今でも消えないこの傷に触れる度、あの時の緊迫した試合を思い出すのである。

★「部室」

横田 恵司

初めて野球部の部室へ入った時の印象は、暗く、臭く、狭かった。その中にいる先輩はと言えば、中学卒業後間もない我々とは、体格も顔つきも比べものにならない程大人で、恐かった。果して自分

がこれから三年間、野球部員としてやっていけるのかどうか不安でいっぱいであった。

一年生秋の新チームでは部員が10名しかいなかったが、それだけにチームワークは抜群で、皆一丸となって練習に取り組んだ。その結果としての公式戦で自分が初めて投げて勝った時の嬉しさは今だに忘れられないし、練習試合であっても自分の思う通りにできた時は日頃の練習の辛さなどふっ飛んでしまった。また練習後の帰り道、馴染みとなった店で仲間と過すひとときも楽しいものだった。

当初、不安に満ちていたあの部室が、三年間そこで着替え、道具を磨き、寝、食べ、しゃべって過して卒業した今では、懐しく楽しい思い出の場所になっている。

【夏】

県大会

二回戦 川高2－5 越ヶ谷高
★「昭和52年夏の大会」

渡辺 弘之

夏の大会でもダークホースと言われ、ベスト8は可能性有りと言気込んでいた。一回戦を突破すると対するシード校は、城西川越高、勝つ可能性は充分にあった。

しかしながら、そのおごりからか、初戦で越ヶ谷高に初回先制しながらも5対2の逆転負け。場所は思い出深い初雁球場で、母校の大応援団の前で試合後は、涙が止まらなかった。初雁球場でのグラウンドで聞く最後の校歌は今もこの耳に焼きついており、悔やしさでぶつけようのない気持ちは一生

忘れることはないでしょう。

昭和50年の夏の大会。入部したての私は、2、3年生で16人の為一年生でただ一人ベンチ入りし、バットひきをやりました。二回戦で甲子園でベスト4まで行った上尾高校に惜しくも逆転負けした試合後、球場の外で先輩方は泣いていました。私はなぜ先輩が泣くのかわからなかったのですが、皆様も御承知の通り、生涯の中で最も貴重な涙だったのだと思います。

今も思い起こせば、ケガをしたり、いろいろなことがありました。家庭の事情で、家族と離れ、一人で生活していた私にとって公私ともにお世話になった当時の宮根監督は父親のような存在でした。

夏の大会前に深谷商との練習試合で足をケガしており、最後のバッターでピッチャーゴロを一塁まで走らずにアウトになった後、監督にこう言われました。

「まだ夏がある。主将のおまえの下には部員がたくさんいるのだ。おまえがあきらめたらどうする。」自分の思い通りにチームが動かず、どうせがんばっても甲子園なんか行けるもんかと半分あきらめていた私は、監督の前で初めて涙をボロボロ出して泣きました。そして夏に向けて全力でやろうと誓いました。

自分は本当に川高野球部に入ってよかったと思うし、一生涯忘れない最も充実した時間であったと思います。

昭和54年卒業

(高31回)



大和中江遠浅大
野田川河藤川屋
直雅伸永啓
康広樹浩幸次吾

飯中森吉宮嘉池
盛村光田根悦田
真先先監直
浩之生生督勉弥

各大会の流れ

〔秋季大会〕

・1回戦

慶応志木	000000000	0
川越	01000401X	6

六回の集中打で勝負を決めた。

・2回戦

川越	000020021	5
松山	000000100	1

エース遠藤がけがのため出場不能。急造投手、飯盛がコースをつく丁寧なピッチングで好投。打線もよく盛りたて、対松高戦連勝記録を伸ばした。

・県大会1回戦（初雁球場）

川越	000011000	2
与野	00011100X	3

9安打、11残塁の拙攻がたたった。与野は5安打で3得点。しぶとい食い下がりにより1点の重みを知ったゲームだ。

〔春季大会〕

・1回戦

川越	152002	10
吉見	000000	0

打線が爆発。六回コールド。

・2回戦

豊岡	000000000	0
川越	00100000X	1

死球で出塁した中村を、続く江河がエンドランを決め、三塁まで進める。一・三塁から、得意のダブルスチールで決勝点を挙げた。

・県大会1回戦（初雁球場）

秩父農工	011001010001	5
川越	002002000000	4

1点を争うシーソーゲームは、延長戦へもつれ込んだ。好投の遠藤をよく援護し、3安打の和田をからめて六回には遂に逆転。が、秩父主砲、佐藤の同点・逆転の2本塁打の前に涙を飲んだ。

〔夏季大会〕

・1回戦

川越	101001010	4
越谷北	010000010	2

川越の機動力が光った。安打、四球数は互角ながら、5盗塁の足の良さで勝利をものにした。

・2回戦

川越	420104	11
富士見	000000	0

初回、いきなり一死三塁のピンチを併殺で逃れ、その後は卒なく加点。六回コールドの貫禄勝ち。

・県大会1回戦（大宮球場）

秩父農工	2000000000	2
川越	0000000000	0

春の雪辱果たすべく、飯盛が辛抱強く投げたが、秩父の下手投げエースを打ち崩すことができず、初回の2点に押し切られた……。

そして、夏が終わった……。



個性的な仲間

◎嘉悦 勉（主将・捕手）

くにゃエツ。くにゃ投法からは想像もできない強肩の持ち主で、守備の要。スクイズのサインを見落して、打った結果がサヨナラ安打！の離れ技を、2度も演じた。

◎和田 広（副主将・中堅）

ミーちゃん（ピンクレディー）インコースを流す技に長ける。打ち損じた時などに、思わず「あっ」と大きな声をもらした。守っては、どこを目がけているのか予想のつかない投法で、味方の恐怖の的。

◎江河 雅浩（一塁手）

はゼドン。スラッガーだが、左利きである事と、出塁率を買われて1番打者に。2番中村との連打攻勢は、得点の原動力となる。63年4月、1児の父に。まが玉の目をした子どもか？

◎中村 真之（二塁手）

おじん。しわしわ顔の癖に小児喘息持ちだった変な奴。体力のハンディを、持ち前のガッツで吹っ飛ばす。春期2回戦では唯一の得点をディレードスチールで稼いだ。

◎飯盛 浩（投手）

かめし。最終的なエース。きれいなフォームで素直な球だが、打たれ強かった。試合中のスライディングで、後で縫う程の怪我を足に受けるも続投し、監督から「秘めた情熱」のお言葉を賜る。

◎遠藤 伸之（投手）

ノーインキン。悲運のエース。強い手首を活かした投法で、内野ゴロの山を築いた。が、春、夏ともに大会前の怪我のせいで活躍できずに終る。しかし、現役中に彼女がいたのは奴だけである。

◎大野 康（左翼手）

くま。腕っ節の強い打者。片道2.5H要する、飯能は原市場から通学。夏の1回戦で、同点を許したトンネルは、敗けていたら忘れられなかったろう。「原市場に歯医者」の決心で、歯科医を目指す。

◎浅川 永次（右翼手）

ケロヨン。独得の発声法による「オエオーシ」は有名。夏の3回戦では、左打者の利を活かして、アンダースローの相手投手から、全2安打の内の1安打を放つ。

口癖は「ぼくじゃありません」。

◎池田 直弥（代打）

山男。図抜けてデカイ体で、短いバットを振り回す。当たると大きいのが、遂に試合で快音は聞かれなかった。幻の5番打者。遠征にスパイクを忘れて、皮靴でランニングをした姿は皆の脳裡に焼付く。

◎中川 直樹（代バン）

レッツ。1年生から夏の大会に右翼手として出場。単打で3塁を狙った1塁走者を、2度も刺す強肩（だった）。代打コールの時に、監督がバントのポーズをとってしまったため、「代バン」と呼ばれる。

◎大屋 啓吾（三塁手）

アイアイ。うまかった三塁手の下級生が次々と退部したため、レギュラーに。授業中、寝てるかサボってるか、と言われた課外活動の帝王。けがが多く、サロメチールの臭いがいつもしていた。

★思い出の場所

- ・みこもり煎餅（連馨寺そば）
- ・ちゃかちゃか（川高正門下）
- ・ばあさん家（川高裏門向い）

以上、大屋の記憶より。（中川）

昭和 55 年 卒 業

(高32回)

思 い 出

私の野球部時代といえば、苦しかった三年間でした。けがや身体の具合が悪く皆に迷惑をかけたことも忘れることはできませんが、反面、最後の夏の一回戦対羽生実戦で活躍できたことは、一生の思い出です。

鈴木秀幸 (投 手)

二年生のときの秋季県大会(大宮市営球場)対白岡高戦、飯田君が二塁上にいて、私がライト前タイムリーを打った事を今でも鮮明に覚えています。確か、そのことが新聞に記載されたと思います。

篠崎一英 (外野手)

部室、最初は古い木造校舎の一教室。二年生から正規の部室へ。冬の朝、寒さを堪えての着替え。貧り食べた弁当。トランプに興じたことや、隅で涙をこぼす先輩の姿。汗の臭い、涙、笑い声、そこにはグラウンドにはない別の姿があった様な気がします。

寺尾 治 (一塁手)

現役中は苦しさばかりを感じてもう野球は沢山だと思ったものですが、不思議なもので、時がたつごとに選手時代に残した悔いやいい思い出が湧きあがってきて、どうしても高校野球の魅力から離れられなくなってしまいました。現在では高校の野球部の部長として連日高校生と一緒に汗を流しています。川高時代と同じように。

赤嶺 寛 (捕 手)



坂 孝裕 (捕手) 板谷敏弘 (二塁) 藤本正人 (投手) 横田雅之 (遊撃) 鈴木秀幸 (投手) 篠崎一英 宮根監督 平林泰平 (外野) 赤嶺寛 (捕手) 吉田先生 波田野拓 (外野) 高山勇 (三塁) 寺尾治 (一塁) 飯田金吾 (外野) 楡井大 (二塁)

主将・副将の語る「私たちのチーム」

投手の鈴木、藤本をはじめ、私たちの代の選手は個性派の集まりでした。そのせいか、厳しい練習の中にも和気あいあいとした雰囲気があり、楽しく野球をすることができました。最高の成績も県大会でベスト8に食いこむことができ、宮根監督のもと全員が、一生懸命野球を追求した思い出深い三年間であり、メンバーでした。

主将 横田雅之 (遊撃手)

我々のチームは一言で言うと、「お調子者の集まり」でした。

最初の地区大会でコールド負け、練習試合も勝ったり負けたり。

こんなチームが、秋季大会で夏の準優勝投手を擁する立教を下しベスト8にまで進んだのです。

秋の優勝校川越商も、まさか次の大会にエースがKOされるとは思ってもいなかったでしょう。

副将 波田野拓 (中堅手)

戦 績

秋……県大会準々決勝

(県ベスト8)

春……西部地区代表決定戦

夏……三回戦

私たちのチームは小柄で非力な選手ばかりでしたが、日々の練習で培った粘りで、秋には立教を下して県ベスト8に進み、春にも前年秋の県優勝校川越商を延長12回まで苦しめることができました。

川越、堀(立教・夏の優勝投手) KO



(埼玉新聞昭和53年9月23日付)



(埼玉新聞昭和54年7月24日付)

記 録

▷昭和53年秋季大会西部地区予選

- ・1回戦 川越5-0富士見
- ・代表戦 川越5-2立教

▷昭和53年秋季県大会

- ・1回戦 川越6-1白岡

チーム	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
白岡	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
川越	1	0	0	4	1	0	0	0	X	6

- ・2回戦 川越6-3埼工深谷

チーム	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
川越	3	0	1	0	0	2	0	0	0	6
埼工大	0	1	1	0	0	1	0	0	0	3

- ・準々決勝 川越3-9川越商

チーム	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
川越	3	0	0	0	0	0	0	0	0	3
川越商	1	3	1	0	0	3	1	0	X	9

▷昭和54年春季大会西部地区予選

- ・1回戦 川越5-2狭山
- ・代表戦 川越4-5川越商
(延長12回)

▷昭和54年選手権埼玉大会

- ・1回戦 川越5-3羽生実

チーム	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
川越	0	0	0	1	0	0	0	1	1	2
羽生実	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0

- ・2回戦 川越7-3児玉農工

チーム	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
川越	0	0	1	0	1	1	3	0	1	7
児玉農	2	0	0	0	1	0	0	0	0	3

- ・3回戦 川越0-7立教

チーム	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
川越	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
立教	0	1	0	0	0	4	2			7

昭和56年卒業 (高33回)



後列左より 石黒 広人 細田 勝彦 赤尾 晃彦
 笹川 徹 五十嵐稔夫 大野 泰斗
 前列左より 林 岳彦 森光 先生 吉田 先生
 宮根 監督 澤口 和行 森田 喜一

思い出の一打

笹川 徹

それは予餞会の時の事です。学校の予餞会が終わった後で、野球部の予餞会があり、その時です。宮根監督が卒業する僕達1人1人に一言ずつ、贈る言葉を言ってくれたのです。林、五十嵐、赤尾…と続き僕の番になったのです。監督さんは僕に向かってこう言ってくれました。

“監督をやっていると一年間に1回ぐらいは信じられない様な事をする奴がいる。去年は横田が一時神がかり的なバッティングをしていた。”

と言いました。そして、
 “今年もやはりそれがあった。それは日大佐野高戦での笹川のバッティングがそうだった。”

と、監督さんが言ったのです。あれからもう7年経った今もあの言葉は忘れていません。高校時代を思い出す時、必ずその時の宮根監督の言葉を、あの一打を思い出すのです。

その時僕はベンチで味方の攻撃の応援をしていました。何回の攻撃の時だったかは、覚えていませんが場面は一死満塁でした。そこで急に監督さんが僕を呼んだのです。

“代打だ！3回思い切り素振りしてから行け！”

監督さんはそう言って僕を送り出しました。

日大佐野高との試合は夏の大会まであと1ヶ月という時期でした。僕は2年の秋にはセカンドで、3年の春の大会の直前まではサード

記 録

▷昭和54年秋季西部地区大会

川 高0-5 所 商

▷昭和55年春季西部地区大会

川 高8-2 川 農

川 高1-3 川 商

▷昭和55年選手権大会埼玉大会

川 高3-0 不動岡

川 高3-2 春日部

川 高5-1 草 加

川 高	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2
川口工	0	0	0	4	0	0	0	0	X	4

として試合に出ていました。ところが、足首の捻挫、気管支炎、そして力も及ばなかったのだとも思うのですが、結局レギュラーから滑り落ちてしまったのです。

日大佐野高のピッチャーの球は結構速かったかもしれません。ところがその時不思議にもバットがスーと出たのです。打球は右中間に飛び、2者がホームインしました。試合は2-4で負けたのですが、忘れられない試合になりました。

高校での3年間野球をやっていて、悔いも沢山ありました。しかしあの監督さんの一言でむくわれた様な気がします。僕は大学に入ってから野球を続け2年の春のリーグ戦では首位打者になりました。それもあの一打、監督さんのあの一言のおかげと思っています。



〔川越一春日部〕6回表、川越は二死二、三塁から7番石黒が投手強襲の安打を放ち三走・茂垣が生還、同点に追いつく。
捕手・笠原

川越の追い込み届かず

川口 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 2
川越 0 0 0 4 0 0 0 0 0 0 0 4
(越) 小山・茂垣(工) 関・田島
川越が最終回までねばったが、
中盤の失点が大きく、試合巧者の
川口王にかわされた。

序盤戦は、川越・小山投手、川口王・関投手がそれぞれ相手打線を、安打に抑える力はいった投手戦を展開。しかし、地力で、枚上手の川口王は四回、関、松本が連続安打。続く田島のパントが敵失を誘い先取点をあげ、さらに坪山、辻の右前適時打などで、この

回4点を奪った。

これで波に乗った関投手は、川越打線を四回以降八回まで一安打に抑え、一方の小山投手も必死に踏んばり川口王の追加点を許さない。

このまま決まるかと思えた最終回。川越はこの日それまで三打数二安打と好調な石黒の右前安打を足がかりに二死満塁の好機。ここで赤尾が右前適時打で石黒、五十嵐を迎え入れ4-2と迫ったが、後続がなく川口王のベスト8入りが決まった。

下級生に見本を

林 岳彦

私達にとっての高校3年間の最大の思い出は、夏の大会においてベスト16に入ったことでしょう。

一戦一戦接戦を勝ち抜き、4回戦まで4試合も戦うことができたのは、幸せな学年であったということができないのではないのでしょうか。

誰か傑出した能力を持つ者がいたわけではありませんでしたが、投手中心にメンバーの一人一人が、それぞれの持ち場で力を発揮し、まとまりのあるチームだったように思います。

実は、私達が最後の大会に臨む時、レギュラーは9人中3人だったのです。もちろん、大会の直前

にこのような状況になったのではなく、新チーム結成以前より、この結果はある程度メンバー各々がわかっていたと思います。しかしながら、新チーム結成以来一丸となり、全員で精一杯努力しました。結局最後の大会で試合に出場できなかった細田、森田、大野、また最後の一試合しか出場できなかった赤尾、笹川、沢口は代打やコーチャーとして活躍。そして何よりも、下級生レギュラーの多いなかで、上級生として選手の見本を体で示し活躍してくれたことは、下級生にとっても大いに学ぶ点があったことと思います。

もっとも、入学時にはもっと力のある者も多くいたように記憶していますが、ケガに泣いた者が多かったのは、大きな痛手になりま

した。しかし、最後の試合となった川口工業戦で、0対4で迎えた最終回満塁のチャンスに見事タイムリーを放った赤尾は、足の骨折で入院。レギュラーの座を失いながら、復活してくれた代表です。

そんなこともあり、2年生の正月には早々に練習を開始し、その初日には氷川神社で監督さんとチーム全員で山田宮司の御祓いを受け、必勝と一年間の無事とを合わせて、祈りました。その時いただいたお札は、部室内にしつらえた棚に上げておきました。五十嵐は、日々甘茶を供えていました。

今にして思えば、ベスト16という良い結果が得られた影には、第2応援歌にもうたわれた、氷川神社参りをしたおかげであったのかもしれない。

昭和57年卒業 (高34回)



第63回高校野球選手権埼玉大会開会式 (西武球場)

ブラカードは主将・茂垣潔、1列目左から、千吉良寧、小山真史、中山修、(2年生)、2列目左から、佐々木厚、山田敏明、丸田薫(2年生)、3列目左から、(2年生)、鳴河洋二、中島賢一、中坪和之、4列目左から、(2年生)、(2年生)、(2年生)、石田浩徳、5列目左から、(2年生)、斉木孝夫、高山洋司

《試合成績》

西部地区新人戦	2-4	吉見
秋季地区予選①	6-2	川越工
代表決定戦	5-1	所沢
県大会	1-3	妻沼
川越市内大会	9-1	城北埼玉
	5-7	川越南
秋季地区大会①	7-0	松山
②	5-1	越生
③	2-1	豊岡
④	6-1	所沢商
準決勝	8-9	狭山工
春季地区予選①	14-1	城北埼玉
代表決定戦	5-1	所沢北
県大会	1-4	鴻巣
選手権大会①	5-2	越谷南
	0-2	越谷

ザッ、ザッ、ザッ、ザッ、ザッ
「連続呼称〜っ いち」ザッザッ
「にいつ」ザッザッザッ「さん」
ザッザッザッ「しいつ」ザッザッ
ザッ「いち」ザッ「にいつ」ザッ
「さん」ザッ「しいつ」ザッ「い
ち・に・さん・し・いち・に・さ
ん・し」ザッ、ザッ、ザッ、ザッ
(中坪和之 3塁)

早稲田実業に21点
取られて敗れた試合
は、とにかくショッ
キングな出来事でした。

日大二高と雷雨の
中で3対3と引分け
た試合は、とにかく
最高に興奮した出来
事でした。

(中島賢一 遊撃)

3年間を振り返って

思い出すのは楽しいことより、
つらいことの方が多いです。その
中でもすぐに頭に浮かぶのは冬場
の練習後のこと。2、3人で土が
風で飛ばないようにグラウンドの水
撒き。そのしぶきがグラウンドコー
トにつき、凍ってくるのです。あ
の寒さの中、よくやったものだ
と思います。しかしよく考えてみる
と、何事にも代えがたい貴重な経
験だったのかもしれない。

(茂垣潔 主将 捕手)

あの頃、見て、聞いて、感じた
こと、自分なりに考え行動したこ
と、それ以上のことは出来たため
しはないし、今後もむずかしいと
思います。

(中山修 右翼)

ただひたすら白球を追いかけて
いた高校時代がたいへん懐しい今
日この頃です。「ただひたすら数
字を追いかけている」そんな営業
生活が今は続いています。

(高山洋司 中堅)



▲越ヶ谷は5回、村中のタイムリーで三走に
続き二走近藤がかえり2-0とする

久しぶりにグラウンドを訪ねてみると、バックネット、用具小屋、ブルペン、みんな昔のままでした。暗い照明灯の下で、地を這い、空の闇に吸い込まれそうなボールを目を凝らして追っていたあの頃がつい昨日のことのようです。

(佐々木厚 左翼)



〔川越一草加〕5回表、川越は一死満塁から中島が三遊間安打で三走・小山を迎え入れる

1番印象に残っているのは、1番成績の良かった2年の夏。1回戦、2回戦そして3回戦と勝ち進んで川口工業高と大宮球場で対戦したこと。惜敗ではあったが、最後の盛り上がりが1番の思い出。

(山田敏明 二塁)

高校野球やってて良かった・・・

・・・とつくづく思う。

(石田浩徳 左翼)

何がつまらないって野球ほどつまらないスポーツはないと思っていた。目が覚めた時から頭の中は野球ばかりだった。野球が私の心を離れない。離れないばかりか、人生の基盤になっている。やっぱり野球ってのは大したものだななどと感心してしまう。私にとっての高校野球はそんなものだと思う。

(小山真史 投手)

夏、それはただ暑いだけではない、バテバテに疲れて、練習が終われば動く気力もなくなる程の、そんな夏を高校時代は過ごしてきました。今、振り返ればただ懐しく、灼熱の太陽の下での練習が印象深く心に残っています。

(斉木孝夫 二塁)



〔川越一不動岡〕川越は8回表、一死一、三塁から高山の中前打で中山がホームイン。捕手・白石

長いようで短かった3年間に培われた気力・体力・精神力が、社会に出た今も大いに役立ち、励みになっています。当時のつらかった練習も、今ではいい思い出になっています。

(鳴河洋二 右翼)

高校野球に関する全てが素晴らしい思い出です。一年生の時に上手投げから下手投げに。もともと体の柔らかい方ではなかったため、故障の連続でしたが、あの時の頑張りは今でも自分を支えてくれます。

(丸田薫 投手)

第62回 選手権大会から

試合でファールフライのボールを見失い、必死に打球をさがしていた自分の10mくらい前に、ポトリと打球が落ちた時の恥かしさ。私の3年間の高校野球を象徴する瞬間でした。

(千吉良寧 1塁)



▲川越は二回、二死一、三塁のとき鈴木が二盗を試みた間に三走石田がホームを突くもアウト

川 越	打安点
8高山	430
4山田	310
6中島	301
9中山	300
3千吉良	320
7石吉良	201
2茂田	311
5中坪	321
1鈴木	100
1丸田	100
計	2694

越 谷 南	打安点
4栗原	210
9林	200
5佐藤	300
2瀬川	300
3古沢	200
7星野	311
1生井	200
1箱山	100
8長岡	301
6青名	300
H中島	100
計	2522

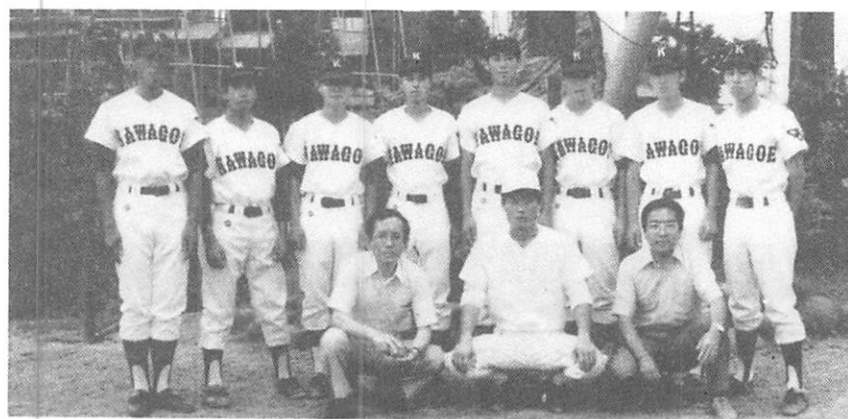
川	1	8	6	6	2	8	0
越	7	6	5	2	1	7	0

⑤浦和市営球場第一試合(7月18日)

川 越	1	1	0	0	0	1	0	2	0	5
越谷南	0	1	0	0	0	1	0	0	0	2

▽三塁打 高山・星野
▽本塁打 生井・青名
▽盗塁 生井・青名
▽犠打 大川
試合時間 2時間22分

昭和58年卒業 (高35回)



(後列) 外野手 外野手 内野手 投手 内野手 捕手 外野手 内野手
村上 田中善 斉藤 鈴木 角田 中田 田中潤 深野
(前列) 顧問・森光先生 鈴木監督 吉田部長

思 い 出

高校生活を振り返って真先に思いつくものは、汗と砂ぼこりの重なり合った部室の匂いです。当時は1年生が交替で上級生の部室を掃除することになっていたのですが、その部屋の重いドアを開けた時の何とも言えない匂いを今も鮮烈に覚えています。早く上級生になってこっちの部室に入るんだ、と思ったものです。

今は部室も新しくなり、寂しい気持ちの諸先輩も多いのではないのでしょうか。

(高校35回 主将 角田 仁)

* * *

高校野球での最後の試合となった対大宮戦、我々のチームにとっては一番悪い面が出た試合になってしまいました。

この試合、チームの大黒柱であるピッチャーの鈴木調子の調子も前の

2試合と比較して決して良くはなかったのですが、さらに野手にエラーが続出したためリズムに乗り切れなかったようです。

個人的にもキャッチャーとして、4番打者として全く仕事をせずに終ってしまった試合でした。

このように最後の試合が最悪の試合となってしまったのですが、ゲームセットの瞬間にはなぜか、“悔しい”という思いより、“やっと終わったんだ”という思いの方が大きかったことを憶えています。

(中田 茂治)

* * *

今はきれいな部室棟に建てかえられましたが、私たちが入部したときは、年代ものの映画にでてくるようなボロ校舎があり、そこを1年生の部室として使っていました。戸はないも同然で冬にすきま風は入るし、猫も入ってきてひとの弁当を食ってたり……。

戦 績

・昭和56年 秋季県大会
西部地区予選

代表決定戦 敗退

・昭和57年 春季県大会
西部地区予選

代表決定戦 敗退

・昭和57年 第64回

全国高校野球選手権埼玉大会

1回戦 川越9-0 上尾沼南

2回戦 川越4-2 大宮東

3回戦 川越4-8 大宮

その部室から始まった野球生活も最後の夏の大会で3年生みんな仲良くミスして引退するまでいろいろなことがあり、今でも同期で飲むと酒の肴になっています。

現役時代は雨だけが楽しみで野球以外的高校生活もあるんじゃないかと思っていましたが、今は高校時代に野球をやっておいて良かったと思います。3年間続けたことが自分の中で大きな財産になっている気がします。

(深野 武)

* * *

私は野球部時代、ついに努力が実を結ぶことはありませんでした。心に残っているのは悔しさ、無念さばかりです。しかし、その努力は無駄であってはならないし、また、決して無駄にはしたくありません。

野球部が70周年を迎えるこの記念すべき年に私は新しく社会人となります。野球が勝負であるのと同じように人生も勝負であり、しかもこれからの人生が本当の勝負

であると思います。この永き人生の勝負に絶対に勝つという決意を持って私はこれに臨みます。

(齊藤 義範)

* * *

川越高校野球部時代を振り返って思い出されるのは、監督さんとの交流や苦しい練習、夏の大会で負けた時の悔しさなど断片的なものばかりです。高校を卒業して、6年しか経ていないので自分自身まだ思い出の整理がついていないのです。

けれども、ただひとつはっきり言えることは、野球部を通じて出会えた部長さん、監督さん、同期の仲間、諸先輩方や後輩たちという人達を大きな財産として得られたということです。

(村上 信一)

* * *

月日経つのは早いもので卒業してからもう6年になります。自

分の現役時代を振り返ると、もっと練習しておけばと思うこともしばしばありますが、3年間続けたということは今でも誇りに思うし、また自信にもなっています。最後の夏の大会での3本のヒットは、今でもよい思い出になっています。宮根、鈴木両監督の御指導のもとでの野球部の3年間は、辛いことも多かったけれども大変有意義なものでした。

最後になりましたが母校の一層の活躍を心から祈っています。

(田中 潤一)

* * *

高校野球は、私の中で確実にひとつの時代として完結しました。

思い出は数多くあり、とてもひと口では言えませんが、それらを共有した仲間達がいるということが何よりもの財産だと思っています。そして、自分の力を引き出す方法や苦しい時を乗り越える精神

力を学んだのも野球によってです。無我夢中でやり通した高校野球時代が今の自分の基礎であり、今はまた自分の中に新たな時代を築こうと無我夢中で生きております。

(田中 善之)

* * *

川高野球部に投手として入部した私は、宮根監督に助言を受け下手投げに転向したことにより、投手としてやっていける自信を持ちました。吉田部長からは、スライダーを覚えてみろ、と言われ練習し始め、以後強力な自分の武器にすることができました。そして3年生の時に鈴木監督と出会ったことにより、大学でも野球続けていく決心をしました。

川高野球部では大した成績は残せなかったのですが、私の野球生活を大きく変えた3年間であったと感じています。

(鈴木 祐二)

全国高校野球選手権埼玉大会



・ 1 回戦

川 越	0	0	0	0	0	0	5	0	4	9
上尾沼南	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

・ 2 回戦

川 越	4	0	0	0	0	0	0	0	0	4
大宮東	0	0	0	1	0	0	0	1	0	2

《我々の夏の大会》

くじ運に恵まれ、県営大宮球場で試合をすることができ、しかもテレビ埼玉で3試合もテレビ放映され、思い出に残る大会です。

我々同期は、3年生の時には8人になってしまい、チームも下級生に頼るところが大きかったです。

そんな中で1、2回戦は学年関係なく、全員が自分の力を発揮し

・ 3 回戦

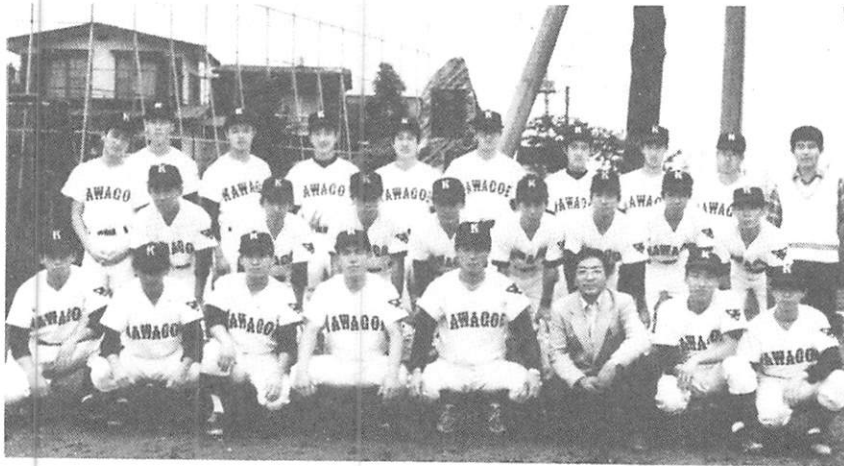
川 越	0	0	0	0	0	0	4	0	0	4
大 宮	0	3	0	1	0	0	2	2	X	8

勝利した試合でした。特に2回戦の対大宮東戦では、初回にめったにない集中打で4点をあげ、全員でそれを守り切りました。評判の高い相手だっただけに、この1勝は価値あるものでした。

ところが、我々の高校野球最後の試合となった3回戦の対大宮戦は最悪なものとなってしまいました。新チーム初戦同様、連鎖的なエラー続出がこの試合にも出てしまいました。それも我々3年生ばかり。

しかし、我々自身の手で高校野球生活に幕をおろしたことを考えるとよかったのかもしれない。

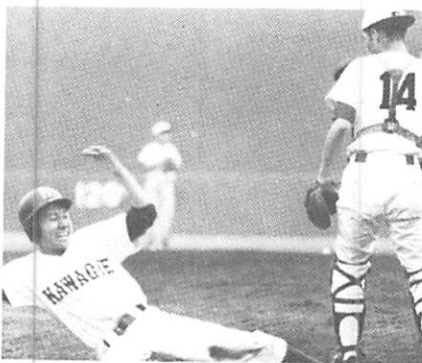
昭和59年卒業 (高36回)



上段 岡部・益子・稲垣・甲地・宮崎・金井・大塚・森・寺前・牧野顧問
 中段 関谷・河野・天野・林・小田・増村・齊藤・柴田
 下段 吉川・戸田・矢嶋・吉田・鈴木監督・吉田部長・大井川・関

延長11回 粘る西武台振り切る

チーム	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計
川越	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	4
西武台	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	3



11回表川越二死二塁、天野の右前安打で二塁走者宮崎が生還。(11回表)

川越	打安点	西武台	打安点
⑦矢嶋	3 1 0	⑦宮崎	3 0 0
⑥吉川	3 1 0	⑤杉本	4 2 0
⑧吉田	5 2 1	③森	5 0 0
③甲地	3 0 0	④田村	5 3 2
②大井川	4 1 2	⑧長坂	4 2 0
①宮崎	5 1 0	⑨白間	2 0 0
④森	4 2 0	⑥高橋	4 0 0
⑤天野	4 1 1	②伊庭	2 0 0
⑨関谷	4 2 0	H佐藤	1 0 0
計	35 11 4	2鶴巻	1 0 0
川	1 2 7 0 2 7	①島田	4 1 0
振球犠盗失残	H曾我	1 0 0	
西	14 5 4 0 0 9	計	36 8 2

①「思い出」②

吉田卓義(主将・中堅手)：今の自分の大きな自信となった。主将としての一年間に感謝!!

大井川哲也(副将・捕手)：投手

が球を投げなければ野球は始まらないことを3年間で学びました。

矢嶋浩(副将・左翼手)：西武台戦の勝利には、僕らの二年間の練習の全てが集約されています。

★58年度野球部公式戦成績

・秋季大会

1回戦 川越7-1坂戸西

2回戦 川越1-4川越西

・春季大会

1回戦 川越0-1松山

・夏季大会(埼玉県予選)

2回戦 川越4-0草加東

3回戦 川越4-3西武台

一延長11回一

4回戦 川越1-4大宮東

宮崎太介(投手)：三年間の経験を通じて、野球以外にも様々なことを学ばせてもらいました。

甲地徹(一塁手)：暑さにも寒さにも負けず過ごした充実の三年間。今の自分の大きな財産です。

林誠(投手)：野球が好きで集まった連中がイイイヤながらも全力で三年間を過ごしました。

関谷賢治(右翼手)：高校野球をしたことが、自分の人生における良い思い出、自信になりました。

柴田大(二塁手)：野球部での三年間を通じてチームワークの大切さを学びました。

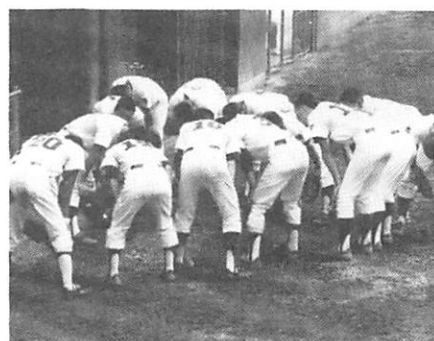
戸田隆士(外野手)：練習はつらかったが、今ではなつかしい。やはり野球が好きだったのでしょう

増村剛(一塁手)：たかが野球、されど野球。

寺門正史(右翼手)：体をこわしてチャンスを逃がしたけれど、三年間続けられて満足しています。

吉川英一(遊撃手)：己れに負け、逃げ出した自分を迎えてくれた君たちにひとこと…。ありがとう。

小田夏生(三塁手)：夏の練習のあと、水のうまかったこと…。



チーム	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
川 越	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
大宮東	0	0	0	1	0	1	2	0	X	4
川 越 打安点 大宮東 打安点										
⑦矢 嶋	3	1	0	⑧下 谷	3	1	1			
⑥吉 川	4	0	0	⑤佐藤信	2	2	0			
⑧吉 田	4	0	0	②吉 本	3	1	0			
③甲 地	4	0	0	④鶴 原	3	0	2			
②大井川	3	1	0	③池田浩	3	1	0			
①宮 崎	3	0	0	⑦本 田	3	1	0			
1 林	0	0	0	⑨土 田	4	0	0			
1 稲 垣	0	0	0	①水 沢	2	0	0			
⑤天 野	2	0	0	1 内 田	1	0	0			
④ 森	2	0	0	⑥鳥 海	3	1	0			
⑨関 谷	1	0	0	計	27	7	4			
H大 塚	1	0	0	川	8	3	1	0	1	3
9 戸 田	0	0	0	振球犠盗失残						
計	27	2	0	大	5	5	2	1	1	6

稲垣洋介（投手）：つらく厳しい三年間が自分を成長させてくれた、これからの自信になるでしょう。

関智浩（二塁手）：野球部での三年間の中で、いい仲間をたくさんつくることができました。

天野健太（三塁手）：投手から野手へ移りましたが、最後の大会でがんばれて満足しています。

金井正樹（捕手）：長いようで短かった三年間。悔いはありませんでした。

川越 シード校の壁破れず ― 散発二安打に終わる ―

森伸彦（二塁手）：三年間の野球生活で得たもの。それは良き友。大塚拓洋（三塁手）：川高で野球できたことを今でも誇りに思っています。

河野孝之（左翼手）：三年間野球を続けられて良かったです。後輩たちも頑張ってください。

益子照正（左翼手）：夏の練習での頑張りが、今の自分を支えています。

斉藤勲（二塁手）：三年間頑張つてよい思い出をつくることができました。

岡部一樹（三塁手）：野球部で頑張った三年間。良い思い出です。

【全試合成績】

56勝25敗 3 分

57年8月

○6-0 新 座
○2-0 〃
○6-4 川越南
○5-2 〃
△0-0 富士見
●0-4 〃
○7-6 鶴ヶ島
○12-5 岩槻商
●3-5 〃
○6-4 坂戸西
●4-6 〃
静岡遠征
○2-1 浜松西
●0-1 浜松北
○8-3 浜松工
●2-4 浜松西
西部地区新人戦
○4-2 飯 能
●5-7 城西川越

○12-6 坂 戸

○15-0 〃

●2-6 早稲田実

●5-6 〃

○7-2 志 木

○6-5 所沢北

○13-4 〃

9月

△3-3 玉川工

○6-2 〃

秋季大会

○7-1 坂戸西

●1-4 川越西

○9-2 松 山

10月

○2-0 武蔵丘

○4-1 〃

西部地区大会

●4-6 城西川越

○7-2 所沢中央

●3-4 〃

11月

○1-0 福 岡

●0-3 〃

川越市民体育祭

●1-4 川越南

△1-1 狭 山

●5-8 〃

○12-4 早稲田

58年3月

○7-4 熊 谷

●7-8 〃

○5-2 狭山工

●1-10 〃

4月

○8-6 前橋東

○3-2 松 山

○6-1 福島東

○19-16 所沢北

○6-2 久留米西

○17-5 所沢中央

○6-0 志 木

○2-1 福 岡

○8-1 川越南

春季大会

●0-1 松 山

○4-1 川越西

○14-1 〃

○9-6 鴻 巣

○16-0 玉川工

●4-6 早稲田実

5月

●3-7 越ヶ谷

○27-3 熊谷農

○23-1 所 沢

●0-3 目 黒

○5-0 川 口

○6-3 狭 山

○18-1 新 座

○12-0 城北埼玉

○3-1 坂 戸

○8-2 飯能南

6月

○4-0 朝霞西

○5-1 坂戸西

○8-1 上尾沼南

●0-2 富士見

●1-3 武蔵丘

○9-2 〃

○3-0 岩槻商

○5-3 藤 代

●2-3 川越工

●4-5 草 加

7月

○5-2 坂戸西

○7-0 〃

夏季埼玉大会

○4-0 草加東

○4-3 西武台

●1-4 大宮東

昭和60年卒業 (高37回)

記 録

▷昭和59年秋季県予選

川高 0-3 狭山ヶ丘

▷昭和60年春季県予選

川高 3-2 所 沢

川高 6-3 狭山工業

▷昭和60年春季県大会

川高 4-1 春日部共栄

▷昭和60年夏の県予選

2回戦 川高 7-1 草 加

3回戦 川高 1-7 春 工



左から三沢直太郎、元上文信、吉村康彦、伊藤不二夫、
矢野知男、大森邦弘。

下段、左より吉田正部長、鈴木和彦監督、牧野敦史顧問

思 い 出

私の高校生活は野球で始まり、
野球で終わった感がある。朝から
晩まで野球のことばかり考えてい
た。とにかく野球が好きで好きで
たまらなかった。だから、たとえ
先輩に大目玉をくらおうとも、練
習が厳しくとも、どんな怪我をし
ようとも、つらい時はなかった。
それも伝統の川越高校野球部で野
球をやれたということが最大の喜
びであり誉れであった。私は主将
としては大したこともできず、み
なに迷惑のかけどうしであった。
しかし、ここでも私はよき同輩、
後輩に恵まれ、なんとか川高野球
部の伝統をくずすことなく立派な
チーム作りができたと思っている。
甲子園でプレーするのが夢であっ

た私達も負けた時は、悲しかった。
が、精一杯やったという満足感で
いっぱいでした。(大森 邦弘)

1時間近く続く個人ノック。し
びれる手で竹バットを握る打ち込
み。冬期には伊佐沼往復競争…。
それらは、私の高校生活を野球漬
けにするには十分なものでした。

最後の夏の大会、私達は3回戦
で敗退してしまいました。夢だと
は言っても、誰もが一度はプレー
してみたいと思う甲子園、その道
が絶たれた時、私は泣きました。
あの涙は、一所懸命練習した者だ
けが流すことのできる涙であると、
私は今でも誇りに思っています。

(元上 文信)

現在もスポーツに取り組んでい
る自分にとって、高校時代の約二
年半の野球生活は様々な人との出
会い、先・後輩との厳しい上下関
係、また時には同年代のプレーヤ
ーにあまりの力の差を痛感するこ
とによる勝負への厳しさなどを教
えてくれた貴重な時間でした。現
役中は苦しさや相手に対する闘争
心が支えだった様な気がするが、
今は冬季のカルガリーオリンピック
を見ても野球に限らず、スポー
ツとは生きていくための知恵とい
うか、不思議な力を与えてくれる
魔物である様な気がします。

(伊藤 不二夫)

できることなら満足してグラウ
ンドを去りたかった。しかし、後
悔のみに終わった私の野球部三年
間。引退の時流した悔し涙を、今
も鮮明に覚えている。無目的な毎
日。ただ闇雲にボールを追いかける
だけの日々。人生の目的がわから
ず、心だけが無性に焦っていた

のを思い出す。やっぱり目的。これやね。これがなきゃ始まん。高校野球なら勿論あれ。ハッターでもいいから叫びたかった。

「目指せ!!甲子園。」

(三沢 直太郎)

ランニング、アップ、ペッパー、キャッチボール、ノック、ベーラン、反省、声出し、オーツ、筋トレ、イサ沼、陣とり、ジャンボール、一見銀行員風、春日部工業、早実、所商、クロマティ、朝練、スポンジ、はごろも、トス缶、ジャンボネット、部小屋、トレーニング6本、トーンが違う、タイスケ、福島東、トンネル、ホームラン、などなど三年間の思い出は語りつくせないが、今考えると、よくやったなあと。うーん、青春、青春。

(矢野 知男)

僕の川高野球部での一番の思い出は、三年生のときの夏の大会における最後の試合で、監督さんが代打として僕に出番を与えてくれたときのことです。僕はすごく緊張していましたが、それ以上に無我夢中で二球目のストレートをたたきました。打球はライナーで二塁手の頭上を越え、ライト前のクリーンヒットとなったのです。その時の喜びは、とても言葉で表しようがありません。ただ三年間やってきて本当によかったと思いました。

(吉村 康彦)



生還ならず!!川越―春日部工 5回裏
春日部工二死一、三塁、西沢の二塁打
で一塁走者の岡安、本塁へ突入するも
好返球でタッチアウト。捕手大森
|| 県営大宮球場

●川越長打で一矢

▷3回戦=第2試合

川 越	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
春日部工	1	1	0	0	2	2	1	0	X	7

①…春日部工・岡安投手が投打に活躍。2回、川越・伊藤投手のカーブを痛打し、右翼席へたたき込んだ。5回には、2死1、2塁

で、ボール球と思える高めのカーブを右前へはじき返し、3点目。試合を決めた。投げては、伸びのある速球で4回を除く毎回三振を奪い、川越打線を抑えた。

川越は6回二死から金井の左中間二塁打で1点を返したにとどまった。

●川越が投打に圧倒

▷2回戦=浦和市営球場

草 加	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
川 越	0	2	2	0	0	0	0	3	X	7

①…長短9安打で7点をたたき出した川越が、守備陣に盛り立てられて好投するエース左腕伊藤の粘り強いピッチングもあって快勝した。

川越は2回、四死球に犠打などをからめて二死満塁の先制機とし、稲葉と大野の1、2番コンビが左

前2連打して2点を先取。3回には一死2、3塁の加点機に、7番大森の右中間二塁打で走者一掃、4-0とリードした。4-1で迎えた8回は、元上、稲葉の適時二塁打で3点を加えてダメを押しした。

草加は4回、突然制球を乱した伊藤から4四死球を得て、押し出しで1点を返したが、丁寧に投球を組み立てる伊藤に散發3安打とかわされてしまった。

回 想 録

主将自ら怪我をし、必ずしもベストのチーム状態ではなかったもののエース伊藤を中心に守る野球で望んだ夏の大会。1、2年がレギュラー大半を占める若いチームだけに心配だった初戦、対草加高校。押し気味に攻めたが今一步、

心に余裕がなかった……。7対1と勝ったものの次は優勝候補の一角、春日部工業。ここはもう伊藤を中心に守って1、2点勝負にするしかない。気合を入れていった3回戦。しかし、相手の厚い壁を崩すことができず……。牛若丸は弁慶に勝てず。1対7と敗れ、私たちの高校野球は幕を閉じた。甲子園はかくも遠いものなのか。

昭和61年卒業 (高38回)

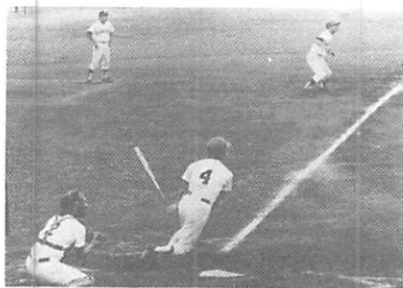


一列目 吉田 正部長・鈴木和彦監督
二列目 渡辺直貴(内野手)・角田征仁(外野手)・大野直樹(内野手)・渡辺輝一(外野手)・鷺巣 誠(内野手)
三列目 稲葉 正(内野手)・金井規真(捕手)・柴崎通安(投手)・池田 靖(外野手)・長瀬雅嗣(投手)
宮本恭志(投手)・坂下圭一(内野手)・牧野敦史先生

【夏の大会】—青春！完全燃焼！—

▷2回戦 川 高3-2 狭山工

1点を争う緊迫したゲームだった。川越は四回裏、相手のミスを誘って同点、さらに角田の左犠飛で逆転、伝統校らしいソツのない攻めをみせた。狭山工は八回、紺野の中前打で二走の高塚が本塁をついたが噴死、最終回も二死二塁と攻めたが、ここ一発が出ず惜敗した。



三回裏大野、右中間へ適時打を放つ

▷3回戦 川 高5-4 児 玉

川越は初回到打者一巡の攻撃で3点を先取、七回には一死二、三

塁で大野が2ランスクイズを決めて試合の流れを決めた。児玉は後半、川越・宮本の球をとらえ、九回には原田の左越え3ランで1点差まで追いつけたが反撃が遅く、あと一歩及ばなかった。



大野の2ランスクイズで二塁走者稲葉生還

▷4回戦

川 越	0	0	1	2	0	1	0	0	0	4
市立川口	0	0	0	1	1	1	3	0	X	6

市立川口は変則的なフォームの川越・宮本投手を打ちあぐみ、三回までわずか1安打と大苦戦。しかし4-3とリードされて迎えた七回裏、一死一、二塁から四番・

【公式戦の記録】

★戦績 9勝6敗

- ・新人戦
川 越2-3 城西川越
- ・秋季大会西部地区予選
川 越1-0 朝霞西(延長11回)
川 越3-15 朝霞(8回コールド)
- ・秋季西部地区大会
川 越12-0 所沢北
川 越8-4 所沢商業
川 越6-4 富士見
川 越6-4 聖望(準決勝)
川 越3-7 川越商業(決勝)
- ・川越市民体育祭
川 越1-3 川越商業
- ・春季大会西部地区予選
川 越5-3 飯能
川 越13-6 入間(7回コールド)
- ・春季県大会
川 越4-5 幸手商業
- ・第67回全国高校野球選手権大会埼玉大会
川 越3-2 狭山工業
川 越5-4 児玉
川 越4-6 市立川口

市村の適時打でまず同点とし、続く佐藤良の一塁を襲う強烈なゴロが内野安打となって勝ち越し点をあげ、そのまま逃げ切った。



エース宮本の力投

◆我ら、高校38代

私たち高校第38回卒業は変わりものの集りと呼べるほど個性豊かで、自己主張の強い集団でありました。そのために監督さんとの行きちがいが多くあり、その様な意味では監督さんにとって厄介な年であったと思います。しかし、勝利を目指すところには変わりはなく、それらの行きちがいによってかえって自分たちの野球を考え直すことができ、より充実したものとなったと思っています。

三年間を振り返って

稲葉 正

私の高校時代は、大好きな野球を思う存分にできたときでした。無心に白球を追っていた自分は、とても幸せであったと思います。そして、川越高校のユニホームを着てプレーできたことは私の人生における大きな誇りです。

鷲巢 誠

私の一番の思い出は、3年生のときの夏の大会の4回戦、対市立川口戦のことです。途中までリードしていながら、結局はシード校市立川口に負けてしまい、熱い涙をこぼしたことを今でもはっきりと覚えています。その日はくやしくて、くやしくて夜も眠れませんでした。

金井 規眞

「光陰矢の如」といいますが、正に高校三年間は、その通りであったように思います。公式戦では全体として、さほどの成果は残せませんでしたが、その中で秋季西部地区大会準優勝は、とても嬉しい思い出として残っています。

坂下 圭一

高校三年間野球をしてきて、多くの大切な友達ができました。この友達と問題が起ったときでも、「雨降って地固まる」の言葉通りに、すぐ仲直りをして、前よりも深く付き合うようになりました。野球を通しての友達は一生の財産となるでしょう。

宮本 恭志

川越高校野球部に3年間籍をおいて、野球だけの高校生活でした。そのことに、反発を覚えたこともありましたが、今考えてみるとこのように、70年もの伝統のある部に所属していたことを、光栄に思っています。

大野 直樹

数多くの試合や出来事がありましたが、私には秋季西部地区大会がとても忘れられないものとなっています。投打がかみあい、チームが一つにまとまった素晴らしい試合であったと思います。そういう試合をして得た準優勝は最高の思い出となっています。

池田 靖

高校3年間、野球をやっていた事は、死ぬまで私の心の片隅に残るでしょう。それはまさに、充実した3年間であったからに他ならず、自主性を重んじる風格の中にも個人の野球に対する真剣な態度が現われていて、何物にも代え難い貴重な3年間でした。川高野球部に栄えあれ！

渡辺 直貴

今振り返って見ると私の1年半の高校野球生活はあっという間の短い期間だったと思います。なぜ1年半かというとは実は私は2年からの途中入部だったからです。しかしこの1年半の高校野球は私にとってとても大切なものだと感じられます。そしてきっと私の一生の宝物になるだろうと思います。

渡辺 輝一

川越高校野球部に入部してから高校三年間、ほとんど毎日野球をやってきてとても大変な日々だったけれど、非常に充実していた日々でした。これからもずっと我が野球部を応援していきたいと思います。

柴崎 通安

希望を抱いてひたすら走る君、結果が悪くても君の努力は無駄ではない。こんな気持ちになってからの練習は今でも忘れられません。試合には出られずに終わりましたが高校時代、野球をやってよかったと思っています。

長瀬 雅嗣

灼熱の太陽の下、甲子園でプレーすることを夢見た3年間、それは、まさにケガとの闘いであり、とても厳しいものでした。しかし素晴らしい仲間達と共に勝利を目指して頑張った日々は、素敵な思い出として僕の心の中に残っています。また、両親、監督さん、部長さん、牧野先生その他OBの方々には本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

角田 征仁

春の地区予選1回戦の対飯能高校戦で逆転の二塁打を打ちました。うれしくてどうしようもなかったです。試合に勝ったのもそうですが、それよりも新聞に名前が出るからです。初めてなので、うれしくてしかたなかったです。次の日の朝刊が待ち遠しかったものです。

昭和62年卒業 (高39回)



① 思い出

副主将 捕手 岡村 亨

高三夏の大会を思い出すと今でも胸の奥に熱いものがこみあげてきます。あの試合は僕の高校生活の全てであり、僕の野球人生の集大成があの試合でした。しかし、何よりも川高で野球ができたことが僕の誇りであり、苦楽を共にした仲間が僕の財産となっています。

副主将 遊撃手 木内 友也

今でも、高校野球で選手がエラーしたのを見ていると、自分がエラーした時のことが思いだされま

す。思えば、主将には迷惑をかけ、少しもいいところのなかった私ですが、高校時代、結束の強い13人と指導力のある先輩に、めぐりあえたことを幸運だったと思います。

遊撃手 高橋 正昭

三年生の夏、やっとの思いで背番号をもらい、先輩や同輩達が入場行進してきた西武球場で、今度は自分が確かに仲間と共に進歩することができたことを、とても嬉しく感じました。それまでの苦しかったことがその一步一步に、一つ一つ思い出されてきました。

遊撃手 平林 直紀

【戦績】

秋季県大会西部地区予選

1 回戦 川越7-0 坂戸西
(7 回コールド)

代表決定戦

立教5-0 川越

春季県大会西部地区予選

1 回戦 川越15-1 川越農
(5 回コールド)

代表決定戦

川越11-1 所沢東
(6 回コールド)

春季県大会

1 回戦 花咲徳栄1X-0 川越

全国高校野球選手権埼玉大会

1 回戦 川越5-0 志木

2 回戦 川越12-0 三郷
(5 回コールド)

3 回戦 川越10-1 越谷東
(7 回コールド)

4 回戦 大宮工1X-0 川越
(延長11回)

僕は公式戦、練習試合とも思い出などはほとんどありません。中学時代は運動などほとんどしていなかったので入学当初、入部しようか迷いながら部室をのぞいた時のことを、よく覚えています。そこには、練習前の緊張感があり、とても自分の入れそうな部ではないと感じたものでした。

二塁手 渡辺 潔

高校に入学して初めてボールを握った僕の一番の思い出は、一年の夏、練習試合で初打席初安打したことです。打球はライト前に転がり、一瞬何が起ったのか分からず、呆然として走るのを忘れ、危うくアウトになるところでした。監督さんに叱られたけれど最高でした。

4 回戦 対大宮工業
朝日新聞より

[illegible]

投下 使用機	回 104	機 8
下川	11	8

岡田 大助
岡田 大助
岡田 大助 (球)
岡田 (球) 安次
岡田 大助



サヨナラ勝ち 川越一大宮工 11回裏大宮工1死二塁高橋の右前安打で生還した二塁走者武蔵②にかけ寄る大宮工ナインと
競合する間投捕手(右) 三塁西川(岩谷)

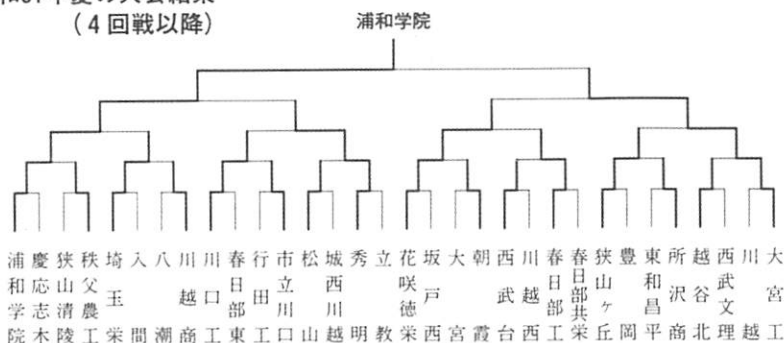
[illegible]

川越再三の逸機

延長11回、大宮工競り勝つ

下川の税を海軍に無断で
川郷・横田と大川・
迎えた十四大船は一死が
に武断に球をひき、高橋の初
を右肩にひきしきし、武蔵赤
隊に襲撃。この一戦が、敵目
を右肩にひきしきし、武蔵赤
隊に襲撃。この一戦が、敵目
を右肩にひきしきし、武蔵赤
隊に襲撃。この一戦が、敵目

昭和61年夏の大会結果
(4回戦以降)



⑤ 思い出

二墨手 小久保惣一

部屋の片隅に飾ってある黒光りしたグローブを見ると、思い出します。夏の大歓声、友の笑顔、涙顔、監督さんの悔しそうな顔、金属バットの音、夏の暑い盛りの足の裏の感じ、泥まみれのユニホーム、最後の試合、どれをとっても忘れることができません。

中堅手 柴田 潤

野球部での三年間を振り返ってみると、試合で負けた悔しさがこみあげてくるけど、勝負はともかく野球をやっていて面白いと思ったのは、やはり高校野球でした。甲子園には行けなかったけれど、最高に充実した三年間でした。

主将 投手 柴田 稔

特に目立つ選手はいませんでした。が、その分チームワークに秀れ、小技を織り交ぜた川高らしいチームでした。個々に自分の役割りを十分に理解し、協力してくれ主将として言うことはあまりありませんでした。

三墨手 中田 肇

一年の夏に肩を壊して以来、私の野球生活は肩の様子をみながらのものでした。はがゆい日々が続きました。それでも続けてこられたのは、良き仲間の励しがあったからです。幸い先輩にも恵まれ、思い出多く楽しい高校生活を送る事ができました。

二 墨 手 中 林 裕 之

高校時代を思い浮かべてみると
思い出すのは、野球のことだけで、
野球をやりながら共に汗を流した
友は、本当にいいものです。今後も

彼らとは、良い友達でいたいです。

三塁手 馬場 孝夫

一番の思い出は、最後の試合となった大宮工業との一戦です。自分の持てる力を全て出すことができたのですが、最終回に宮工の盗塁のサインを見落してしまったことを、今でも悔しく思います。最後にいつも球種を知らせてくれた木内君に感謝します。

遊擊手 松苗 毅

入部する前は「よくあんな硬い球でキャッチボールができるな。」と思っていたものです。思い出といえば、夏の大会で代打に出られたことです。まさか出られるとは思っていなかった。とても嬉しかったです。

左翼手 村上 知則

高校野球を三年間続けて、辛いと感じたりもしましたが、今では続けて良かったと思っています。喜びや悔しさをあれほど感じ、燃えることができたのは野球以外ありませんし、川越高校で良き仲間とプレーしたことを光栄に思っています。

昭和63年卒業 (高40回)



▶写真後列左より

牧 野 先 生・藤 井(外野手)
小笠原(外野手)・佐 伯(外野手)
佐々木(投 手)・根 本(投 手)
金 子(一塁手)・須 田(外野手)
川 嵩(三塁手)・高 橋(投 手)
柴 谷(外野手)・新 井(捕 手)
栗 原(二塁手)・桜 井(外野手)

▶前列左より

近 藤(二塁手)・相 沢(投 手)
二 瓶(二塁手)・鈴 木 監 督
吉 田 部 長・埜 (捕 手)

【戦 績】

① 秋 ①

西部地区予選2回戦

① 春 ①

県大会出場ベスト16

① 夏 ①

夏の大会2回戦

春季県大会出場(ベスト16)

▷地区予選1回戦

チーム	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
富士見	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
川 越	1	0	0	0	1	0	0	0	X	2

▷県大会1回戦

チーム	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
埼玉大深谷	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
川 越	0	0	2	0	0	1	0	3	X	6

▷地区予選2回戦

チーム	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
川越西	2	0	1	0	0	0	0	0	0	3
川 越	0	0	0	0	2	0	0	2	X	4

▷県大会2回戦

チーム	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
大宮南	0	3	1	1	0	0	0	1	1	7
川 越	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1

ホームランが決めた地区予選県大ベスト16に食いこむ。春の地区予選1回戦、相手は富士見高校、5回までは1対0で川高リード、ここで桜井の打球はレフトスタンドへ一直線、試合を決めた。

2回戦の相手は川越西、秋の雪辱を果そうと気負ったためだろうか、押され気味で8回までは2対3、ここでまた桜井が打った。

ランナー1人おいてツーランホームラン、これで逆転。この瞬間球場をつつんだ拍手と歓声は今も

耳の奥に残っている。県大の1回戦は高橋の好投が光り、8回までは、ヒットは許したものの、ダブルプレーで逃げきり打者24人のペース、9回1点を許したものの楽勝であった。県大2回戦、これに勝てば夏にはシード権を獲得でき

る。

相手は大宮南、1回戦で調子を出し過ぎたということもないが、好天氣に反して打線はしめりがち、完敗であった、夏の大会4回戦で再び相まみえるはずであったのだが……。

夏の大会、史上最多157校参加



①…2点差を追う大宮工は9回裏、太田、大島の二塁打などで同点とし、さらに11回裏、先頭の太田が再び二塁打で出塁、送りバントと大島の右犠飛でサヨナラ勝ちした。

中軸に長打力がある大型選手がそろい、打撃のチームに変身。投打の中心、主戦の左腕・高橋は、打撃でも4割をマーク。力で押すより打たせて取るのが身上。守備も安定。

▷夏の大会2回戦

チーム	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計
川越	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	3
大宮工	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0	1	4

川越は、主戦・高橋が大宮工を8回まで4安打1点に抑える力投のうえ、自ら先制本塁打を放つなど活躍したが、大宮工の土壇場の底力の前に、涙をのんだ。

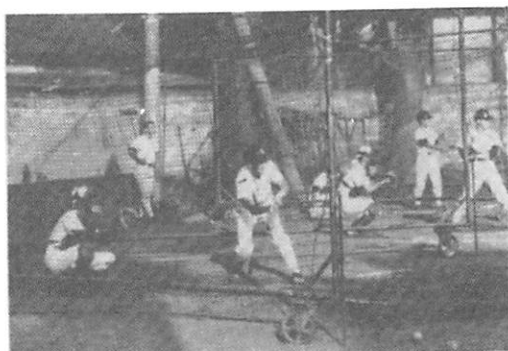
【川越】	打数	安打	打点	三振	四死
(左) 桜井	5	0	0	0	0
(三) 川嵩	5	0	0	1	0
(投) 高橋	3	2	1	0	2
(右) 佐伯	5	0	0	0	0
(中) 小笠原	5	2	0	0	0
(一) 中島亮	4	0	0	0	0
(捕) 峠	4	1	1	0	0
(遊) 長尾	5	1	1	1	0
(二) 山下	4	1	0	2	0
犠盗失残	2	0	1	8	
	40	7	3	4	2



63年3月9日卒業式の前日に藤井の家に集まった。「3年間も終わりだな」「うん、俺達にとっては川高生活＝野球部生活だったね」「何か思い出そうとしても頭に浮かんでくるのは野球のことばかりだ」「全力疾走しないでどなられたことがあったな」「夏の練習でぶっ倒れかけたこともあった」「ストライクがはいらなくて試合中正座させられたっけ」「苦しかったことも時がたつといい思い出になるだろう」「腰を痛めて途中休部しただろう。でもまた続けてよかった。自分に厳しく継続することの大切さを実感しているよ」「仲間がいたから続いたと思う。それ

に宮坂先生もほめてたけれど藤井にはいろいろと世話になったな」「それにしてもあと3つは勝ちたかった。飯能のスーパースターの力をもってしてもだめだったな」「勝敗は志半ばだったけれど、僕達には高校時代にこれをやったんだというものが残ったんだ。これは大きな自信だよ」「忍耐と継続これは俺の一生の人生訓になるよ」「一つ釜の飯を食った仲間というけれど、俺達は一つ庭の泥にまみれた仲だもん」「70年来の野球部員の汗がしみこんだ川高の校庭の泥だ」「そこに俺達の汗と涙も加

わると思うと感激だね」「川高野球部の歴史とこれからのますますの発展に乾杯しよう!!」「我々の輝やかな未来にも!!」朝から夜まで、つきぬ思いの1日、留学中の二瓶の夢の中にも届いて欲しい1日であった。



平成元年卒業 (高41回)



【夏の大会】

▷ 2回戦 (7月)

チーム	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
川越	0	1	0	0	0	1	3	1	0	6
熊谷工	0	0	0	2	1	0	2	3	X	8

1点を追う熊谷工は8回裏一死、二塁から茂木が左翼の頭上を越す逆転二塁打を放ち乱打戦にけり。川越もよく粘ったが12残塁の拙攻。 —毎日新聞—

《大会選手》

〔捕〕	◎山下	浄二③	狭山	台
〔二〕	山村	剛太③	山	山西
〔遊〕	野沢	智②	霞ヶ	関西
〔一〕	中島	亮一③	福朝	霞原
〔右〕	福岡	和哉②	朝富	土見
〔中〕	小橋	孝正③	狭上	山藤
〔左〕	長瀬	裕則③	水坂	戸谷
〔投〕	久保	田康	高③	東
補	平松	小久保	知之進③	山
ク	洪木	猛③	豊	岡
ク	平林	浩司③	勝	瀬
ク	村田	洋一②	霞ヶ	関
ク	石原	洋介②	玉ノ	岡
ク	木村	信一②	所	沢
ク	小池	学②	松	中
ク	朝倉	雅人①	寺	山
ク	八木	和弥①	寺	尾
ク	長尾	聡③	鯨	井
マネージャー				

前日の日に3回戦で当たるはずだった第6シードの城西川越が負けたと知ったときチームのムードは絶頂に至ったと思いました。

「これならば明日の熊谷工に勝って浦学まではまず負けないう。ベスト16だ！」という欲望が目の前に現れた大会当日の朝でした。夏の大会は何が起こるか分からないからとにかく一戦一戦を闘っていくことだと言われておりましたが、私達は試合が終わってしまったとき痛感しました。私達は城西が負けて上への道が開けたとき、舞い上がって目前の試合に気が回らなかったのかもしれませんが。皮肉にも私達は実力では劣る相手に負けてしまいました。「何が起こるか分からない。」これが高校野球だったんだとこの試合を惜しみました。

63年夏の対熊谷工戦を振り返って、あの試合が教えてくれた一番の事は「相手に負けない粘りでその試合を勝ち取る」ことだと思う。点を取られたらすぐ取り返す。そしてリードしても、1点ずつ1点ずつコツコツ取っていく。そのリードを守り抜く守備があれば、もう負けない。そんなチームを果てしなく目指して、日々練習を積んでいくのが、現役選手の役割だと思う。1つの区切りがついて71代目の僕達も頑張るだけだ。(大島)

〔後列〕 牧 福 平 小 山 中 長 長
野 岡 林 保 下 嶋 尾 瀬
〔前列〕 山 橋 鈴 吉 平 浩
村 爪 木 田 松 木

—入部したころ—

私達の代は入部当時13名、途中退部したのが2名でした。

まだ部に入りたてで何も勝手が分からなく先輩方によく怒られていましたが、あの頃はもう13名は仲がよくなってよく遊びました。先輩方の練習を見て、ただ感心するばかりでした。自分達もはやうまくなりたいと思いながらボール籠を囲んでボール拭きをしていた頃をなつかしく思います。夜暗くなった道を一年生全員くたくたになって帰ったことも思い出の一つになっています。

—野球の喜び—

僕は中学から野球を始めました。中1の頃、キャッチボールさえもろくにできなかったのです。何もできない自分がたまに悔しくメチャクチャに一生懸命練習しました。それでもまともに野球がで

きるようになったのは高2ぐらいからで、ようやく試合に出られ、何年もひたすら裏方をやってきた自分にとって、スコアに名前が載る事はなんとも嬉しいものがありました。結局下手で迷惑かけてばかりでしたが、ナイスピッチングをした時は、それよりチームに貢献できた事が最高の喜びでした。

〔投手 平松 高〕

【春の大会】

▷県大会1回戦

チーム	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
大宮東	1	4	0	0	0	0	1	0	2	8
川 越	3	0	1	0	0	0	0	0	0	4

予選を勝ち抜き県大会1回戦で第1シードの大宮東と当たりました。懸命に戦い1回には3点を取り中盤まで5対4といい展開でしたが主砲山口に試合を決められてしまいました。
(この大会大宮東は関東優勝)
思い出に残る好試合でした。

—— デッドボール ——

私が特に印象に残っているのは秋の入間向陽戦です。あの時は相手投手も良かったのですが自分も非常に良くボールが見えていました。延長戦に入り2死2塁で自分に回ってきました。本当にこの時はどのボールでも打てそうな気がして、もちろん初球から踏み込んでいきました。結果は肩にデッドボール。打ち損ねたならまだしもこういう調子の良い時に、しかも逆転のチャンスに1振りもできなかったということが今になって非常に残念だったと思います。

〔一塁手 中嶋亮一〕

【秋の大会】

▷2回戦

チーム	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計
川 越	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
入間向陽	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2

エース新井(直)に苦しみ4本のヒットだけで終わった試合でした。もうこんなサヨナラ負けはしたくないと夏に向けて練習開始。

—— 病気との戦い ——

野球部での3年間はB型肝炎との戦いでした。2年生の4月に発病し夏休みはすべて入院。半年間運動できず10月に部に戻ったもののポジションはありません。絶対正選手になろうと努力し3年生の春の大会後、やっとレフトの正選手になることができました。数少ない試合でしたが楽しい思い出を作ることができました。夏の大会こそ初戦敗退しましたが、病気の間励ましてくれた仲間を一生大切にしていこうと思っています。

〔左翼手 長瀬裕則〕

—— 振り返って思うこと ——

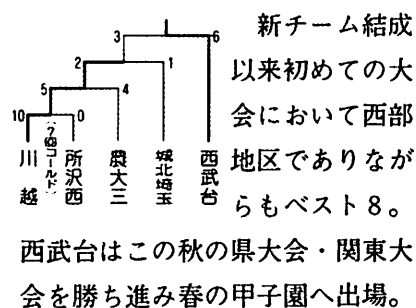
まず僕が思い出すのは、秋季大会延長の末、僕の悪送球でサヨナラ負けし、非常に悔しい思いをしたこと。そして、何よりも公式戦で勝つことが喜びでした。自分個人は、高校時代唯一の本塁打で、気持ちよくベースを回ったことが非常に印象的です。試合の思い出はまだありますが、やはり一番は、皆と一緒にだったことです。練習は楽しく、部室では冗談が飛び交い、笑い声が絶えません。そういう仲間と、野球を通して大きなことを学んだと、今、思う限りです。

〔捕手 平林浩司〕

【成績】 勝敗＝31勝38敗1分

打率＝2割6分9厘

〈夏季西部地区新人戦〉



—— 第70代川高野球部 ——

“チームのムード”これが何より力を発揮するのが高校野球。実力で勝るか否かではなくベンチの空気が勝敗を左右し、バントを決めタイムリーを打たせてきました。スタンドからでは分からない僕達選手一人一人の緊張感、そんなものはベンチのムードが良ければ消し飛んでしまうものでした。

体力がないと言われた70代チームが一戦一戦勝った理由は“ムード”これしかなかったと思います。

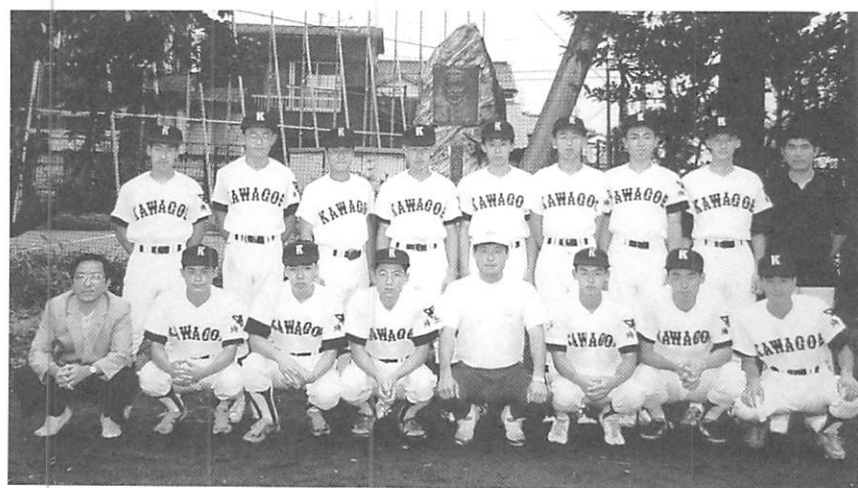
〔主将 捕手 山下浄二〕

—— 我が甲子園 ——

固かったり
柔らかかったり
砂煙がまったり
よく悩まされた
イレギュラーもあった
1・2塁間はよく水がたまった
丁寧に水撒をしたせいだろうか
東京ドームには空がない
でもそこには青空があった
我が甲子園
川高グラウンドには

——二塁手 山村剛太——

平成2年卒業 (高42回)



後列左より、村田洋一、江口眞一、木村信一、小池学、中野公夫、
清水直樹、山田隆、大島弘、牧野先生
前列左より、吉田部長、野澤智、赤楚宏幸、小胎孝宜、鈴木監督、
松澤孝司、久保田康之、石原洋介

【公式戦成績】

◆ 秋季地区大会 1 回戦

城埼玉	0	0	0	0	1	0	0	3		4
川 越	2	0	1	0	0	0	4	×		7

先発メンバーのうち、5人が1年生のチーム。その中でも、先発投手の2年久保田は先代からのエースで速球が武器の本格派。久保田の調子と打線が噛み合えば、いいところまで行ける期待感を持って、大会に臨んだ。初回、相手のエラーから1死2塁のチャンスに3番八木橋の2塁打で幸先よく先制した。その後、相手のエラーで2点目を挙げたが、1死2塁のチャンスに後続が倒れ、もうひと押し出来なかった。3回にも相手のミスから1点を追加した。久保田は、速球が走り、5回まで1安打で抑えていたが、疲れの見える6回到四球から3安打を集中され、1点を返された。7回まで毎回の

残塁で、リードしていたが嫌な雰囲気だったのを吹き飛ばしたのがようやく8回、6番小胎のタイムリー、代打斉藤の采配も成功した。さらには久保田自らの3塁打により、一挙4得点を追加し、楽勝かと思われた。ところが、9回の相手の攻撃では、3連続四球と3失策も絡み、3点を献上し、後味の悪い終わり方となり、その日の放課後の守備の猛練習へと繋がった。

◆ 秋季地区大会代表決定戦

坂 戸	1	1	0	0	1	0	7		10
川 越	0	0	2	0	0	0	0		2

当時、実力校の坂戸高校相手に、先発久保田の制球が初回から定まらず、2個の四球とWPで先制される立ち上がりとなった。2回には、先頭を安打で出塁させると、卒のない攻撃により、追加点を献上してしまい、3回より1年の尾

針に代わった。打線は相手左腕の酒井のキレのいい直球とコーナーに決まる変化球の前に2回まで淡白な攻撃となっていたが、3回到2つの四球と3番八木橋の2塁打により同点に迫っていた。しかし、この回のアウトは全て三振と好投手を捉えきれず、淡白な攻撃のまま回が進んでしまった。そんな中、尾針はランナーを出しながらも要所を抑える投球で踏ん張っていたが、上位打線から始まった7回到長短打7本のヒットを集中され万事休す。7点を追加され、その裏の攻撃も無得点に終わり、7回コールドの結果となった。同点からの次の1点が勝負と誰もが意識していた中で、尾針が頑張っていただけに、点差以上に悔やまれる試合となった。

◆ 春季地区大会 1 回戦

川 越	0	0	0	1	0	0	1	0		3
私越生	0	0	0	0	1	0	1	0		4

格上相手の試合と思われていたが、我々は燃えていた。冬の練習で各人が一回り大きくなり、秋からオーダーを一新し、練習試合でも良い感触を得ていた。投手は新2年の伊藤、左の本格派で、公式戦初先発となった。その伊藤は4回まで被安打2の無失点ピッチング。打線は4回到先頭松澤が2塁打で出塁すると、送りバントとスクイズで先制した。伊藤に疲れが見えた5回到同点に追いつかれ、さらに7回到2死から追加点を挙げられたが、すぐさま8回到相手のミスにより同点に追いつき、そのまま延長に突入した。延長10回、四球と安打で1死1、2塁の場面

で松澤のセンターオーバーで2塁ランナーがホームイン、1塁ランナーは判断が難しく、タッチアウトで1点のみ。このまま勝ちたい所だったが、伊藤もここまで熱投140球、相手の意地もあってか、その裏に3安打を集中され、逆転サヨナラ負けとなった。放課後の練習で、3塁ベースコーチの指示とランナーの動きの練習を繰り返し行ったことが思い出される。

◆ 夏選手権埼玉大会1回戦

入 間	0	0	0	1	0	2	0	0	0	3
川 越	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2

最後の夏、前評判の不高い相手にしっかりした試合をして確実に勝ち上がって行こうと全員の気持ちが一一致していた。それが逆に硬さとなったか、打線は8回まで散発2安打と全く精彩を欠いていた。相手打線はエースで4番以外の振りは鈍かったが、何故かこの日のバッテリーの流れは悪く、不運な安打やミスに見舞われた。4回はその4番が絡み先制された。6回には振り逃げとボークなどで1点を追加された。またこの回の2点目も不運だった。内野安打のうちにホームを狙った走者は誰が見てもタッチアウト、と思われた瞬間、主審のコールはホームイン、捕手松澤のタッチがミットにボールが入っていない空タッチとの判定だった。この判定を巡り10分間の中断。抗議は認められず再開し、結局はこれが決勝点となってしまった。後日の新聞社からの写真では、しっかり入っていたのだが。反撃はようやく9回、斉藤、松澤の連打で1点差まで追い詰め、2

死3塁。最後は芯で捕えた鋭い当たりだったが投手の反応が良く、万事休すでゲームセット。予想外に早い夏の終わりとなってしまった。 【全試合文責 松澤】

【最高の仲間たちから一言】

➤赤楚宏幸（2塁手）28年経っても思い出すのは練習後に部室でグラブを磨きながら他愛もない話をしていた風景です。内容は一つも覚えていませんが。

➤石原洋介（外野手）家から遠くて通学が大変だった一方で、練習後の部室から駅までの仲間との時間はいい時間でした。

➤江口眞一（遊撃手・1塁手）

3年間一緒にいた同期との日々では、練習や試合というより部活が終わった後も部室に残ってクイズをやっていたことを思い出す。その分も野球に打ち込めばもっと上手くなれたのかも。

➤大島弘（投手・マネージャー）

あの三年間で得た経験と仲間は、いつまでもずっと長く残る不滅の財産です。

➤小胎孝宜（1塁手）あれだけ野球に打ち込んだ三年間、公式戦で結果を残せなかった自分に、悔しくもあり情けなくもある。一方、野球部の仲間という生涯の友を授けてくれた川高野球部に感謝してもしきれない。

➤木村信一（2塁手）3年夏の大会直前の川越商との練習試合でサヨナラ負けした。あれが我々のベストゲームだった。

➤久保田康之（投手）夏合宿のごはんの量が多かった。体育の時間

に走っていたら気持ち悪くなった思い出が・・・

➤小池学（2塁手）野球部時代の喜怒哀楽は、その後の自分作りの礎となった。ヒットよりも、ファインプレーよりも、見逃し三振やエラーが記憶に残る。一生涯付き合える仲間との三年間だった。練習後のラグビー、あれは愉快だった。

➤清水直樹（外野手）私達の代は、同期の家で忘年会やったり、部活後でヘトヘトなはずなのに、プールで水球をしたり、部活外も皆で楽しむことが多かった。誰も退部しなかったのは、無意識に出来ていた結束力があつたのだろう。

➤中野公夫（外野手）創部100周年、おめでとうございます。その歴史の一部を担えたこと、生涯の友に出逢えたことに心から感謝申し上げます。

➤野澤智（遊撃手）最後の夏の埼玉代表は川越商だった。小学校来の友人が活躍する姿は誇らしくもあり、悔しくもあった。我々は、あまり勝利を味わえなかったが、今でも語り合える同期に出会えたことは、人生の最高の財産だと思っている。

➤村田洋一（捕手）入試のため、練習も休みの日に皆とスキーに行った。翌日の練習はつらく、水にあたったのか？体調悪くてバットが振れない。監督さんの目が怖かった。

➤山田隆（外野手）私達の在学中、監督の鈴木和彦先生のもと、スポーツ刈り導入、学帽復活がありました。

平成3年卒業 (高43回)



鈴木先生 鯉澤 平田 斎藤 江田 黒澤 伊藤
 松平 安斎 高田 八木橋 遠藤
 吉田部長 尾針 永田 鈴木監督 八木 平松 小林

新人戦	○5-0 (坂戸西) ○5-1 (聖望) ○6-3 (所沢商) ○1-0 (川越工) ●3-6 (志木)
平成元年秋	○7-0 (川越東) ○10-0 (川越南) ○4-3 (東和大昌平) ○6-2 (熊谷) ●3-4 (熊谷商)
平成2年春	●1-9 (所沢北)
平成2年夏	○6-1 (大宮西) ○8-0 (熊谷工) ●3-7 (浦和学院)

- ① 伊藤 彰洋 3 川島
- ② 永田 靖 3 狭山狭山台
- ③ 道祖土貴好 2 川島
- ④ 小林 弘幸 3 東松山松山
- ⑤ 小沢 和也 2 川越寺尾
- ⑥ 八木 和弥 3 川越寺尾
- ⑦ 斎藤 達也 3 大井東
- ⑧ 黒澤 修 3 狭山西
- ⑨ 八木橋洋典 3 朝霞四
- ⑩ 安斎 泰浩 3 川越山田
- ⑪ 杉本 友 2 所沢美原
- ⑫ 山中 知則 2 鶴ヶ島富士見
- ⑬ 平松 篤 3 坂戸泉
- ⑭ 尾針 雄介 3 嵐山玉ノ岡
- ⑮ 平田 倫哉 3 朝霞四
- ⑯ 小林 智 2 坂戸
- ⑰ 松平 哲 3 川越富士見
- ⑱ 江田 崇 3 川越芳野
- ⑲ 鯉澤慎一郎 3 川越富士見
- ⑳ 高田 広明 3 武蔵野東
- M 遠藤 光郎 3 川越大東

大宮西、先制実らず 川越 好継投 着実に加点

1-1の同点で迎えた四回、川越は一死一、二塁から永田の右中間二塁打で二走道祖土をかえし、続く小林のスライズで一挙に逆転3-1とした。終盤も安打と犠打を絡めて着実に加点、大宮西を完全に突き放した。投げても伊藤、安斎がうまく継投、10三振を奪い、2安打に抑えた。大宮西は1点を先制したものの後が続かず涙をのんだ。(7/13 埼玉新聞)

川越打線、8回に爆発 熊谷工、痛い守備の乱れ

粘り強くチャンスを持った川越の打線が八回に爆発、打者一巡で6点を挙げ一気にコールドを決めた。前半、川越は、毎回走者を出しながらも得点に結びつけられなかったが、五回敵失で2点をもぎ取り、八回には永田の2ラン、黒澤の2ランスクイズなどで見せ場をつくり、試合を決めた。熊谷工業は守備の乱れが随所に出たのが痛かった。(7/18 埼玉新聞)

川越粘り及ばず 浦和学院、継投で振り切る

浦和学院が粘る川越を振り切った。初回、2点を先制した浦和学院は、二死満塁から七番佐藤が中前打でさらに2点を加えた。しかし、川越も三、四回に1点ずつを取り六回には浦和学院の左腕エース仲村から五番斎藤が左越えの本塁打を放って2点差と粘りを見せたが、中村を六回途中からリリーフした関根に抑えられ、逆転はならなかった。(7/22 読売新聞)

(7/22 読売新聞)

安斎
 現役時代、甲子園を目指していたが叶わず。最後の夏、負けてもそれほど悔しい思いはなかったように思う。本気で甲子園を目指していたわけではなかったのかもしれない。第1シードにいい試合をして満足していたのかもしれない。そんな現役時代であったが、いつでも甲子園は夢であり、憧れの場所だった。卒業から20年余り。マスターズ甲子園に参加するようになって、2度甲子園のマウンドに立つことができた。卒業してからも、世代をこえた強い絆と熱い情熱を持って野球に取り組む仲間にも恵まれたことに心から感謝したい。川高野球部の一員であることを誇りに思う。

伊藤
 現役時代はケガも多く、肝心なところで力も発揮できずチームに迷惑をかけてばかりでした。戦力が揃っていただけに戦績に反映できなかった責任も感じていますし、力を出し切れなかった悔しさもあります。しかし、この「悔しさ」が原動力となって現在も野球を続けられているような気がします。また、現在OBチームで先輩・同期・後輩と同じグラウンドに立てて本当に幸せです。

遠藤
 学業不振により一旦は野球部をやめようと思いましたが、監督、部長そして同期の励ましにより最後まで続けることができました。卒業後は浪人とはなりましたが最後まで続けられたことで、その後は自分の目標を達成できたと思います。ただこの年になって今思えばもっと野球部のために自分が何かできたんじゃないかなと考えてしまう時があります。

平田
 現役時代に楽しいと思ったことなどなく、今振り返ってみても楽しかったなと思えることはほとんどない。なぜかやめようとは一度も思わなかったのだが、人生も半ばを過ぎ、いまだに交流があるのはこの同期のみ、という現実はこの3年間はどの時代よりも濃く、深く、熱いものだったんだろう。

江田

野球部を引退してから時がたてばたつほど、頭によぎるのは練習風景ばかり。福島や関西への遠征、早実や習志野など強豪校との練習試合、最後の夏も大切な思い出だが、朝から晩まで野球漬けの毎日はやっぱりきつかった。暗いネット裏で手分けしたボール磨きがほっとする瞬間だった。サーキットトレーニングなどで自分を追い込んだ3年間は、今でも私の中で限界値として君臨する。勉強、仕事でどんなに苦しくても、心にどこか余裕が持てている自分。間違いなく川高野球部のお陰だ。

鍛澤

野球部での三年間は、ひたすらに走っていたように思います。野球に関しては上達できていたのか疑問ですが、身体的、精神的に大きく成長できたのは間違いありません。また、甲子園という目標に向かって共に練習に励んだ得難い仲間を得ることができたことも大きな財産となっています。こうした経験が揺るぎない土台として自分の根っこにあるおかげで、今の自分があるのだと痛感しています。甲子園出場という目標は達成できませんでしたが、本当に濃密で楽しい三年間であったと思います。

斎藤

甲子園への出場を夢見て、入学前の春休みから川高野球部の練習に参加しましたが、その想いを本気で三年間貫き通せたのか。。。最後の試合では対戦した浦学の選手に、本気度の違いを思い知らされました。悔いもありますが、私にとっては、生涯の友となる仲間と大好きな野球に取り組むことのできた最高の三年間でした。

松平

夏の選手権大会3回戦、対戦相手の浦和学院には少年野球時代の同級生がいました。今、高校球児となった息子をもって改めて思う。あれ程野球に打ち込める時間は、その後の人生において他にないことを。最後の夏を野球部員で迎えられたことが、今でも人生の中で一番の支えになっています。

尾針

最後の夏の試合に負けたあと、不思議とそれほど悔しさは感じなかった。しかし何年か経ってから、ふとした時に猛烈な悔しい気持ちが湧き上がってくることがある。それは思ったほど強くなかった第1シード校に負けたことに対してではなく、自分自身に対しての悔しさ。現役当時は毎日一生懸命やっているつもりだった。でも本当に最後の一滴まで搾り出してやったのかといえば、そうではなかった。川越高校野球部の後輩たちには、最後の夏が終わった時に「やれることは全てやった」という満足感とともに高校野球生活を終わられるように、毎日の練習に取り組んでほしい。

小林

野球部の友は一生の友…我が友に感謝。44歳になった今、改めて実感する。我が友が最後の夏大。第一シードの浦学との戦い…勝てる相手だったが敗退…一生懸命に戦ったが敗退…最近、息子たちの学童野球を指導しながら改めて気づかされることは、一生懸命では足りないということ。あの夏、死に物狂いで戦えていなかったことが心残り…

永田

高校3年夏の大会の最後の試合となった浦和学院戦、格上に対した時にもっと良いやり方はなかったかなと思いつくことがある。高校時代、目標は甲子園出場となっていたが、どこかで特に甲子園常連に勝つのは難しいという雰囲気があり、一生懸命やっただけでは本気で勝ち進むための準備、イメージができていなかったと思う。その結果が最後の試合の初回大量失点につながったと思う。相手は格下に対しても情報収集を怠ってなかったようである。世間を見ても前評判をひっくり返す人たちはそれなりの準備をしているように感じる。現役の方にはしっかり目標を達成するイメージを持って準備し本番に臨んで欲しい。

黒澤

実は入部する前は進学校のひ弱な野球部をイメージしていたのだが、入部してみるとすぐにそれが間違いだと分かった。少しでも上達しようと必死にボールを追いかけた日々が自分を成長させてくれた。第1シードに敗れて最後の夏が終わったとき、もう同じメンバーで野球が出来ないことがとても寂しかった。あれから20年以上経ったが、マスターズチームの一員として幅広い世代の川高OBと一緒に、今も全力でプレー出来るのがとても幸せなことだと感じている。

高田

現在、少年野球チームの父兄コーチをしている。子供達を指導するために、本やDVDで野球を改めて勉強している。学んだことを子供に分かりやすく伝えることが難しいと気づいた。そして高校の時に、もっと練習をして、野球を勉強しておけばよかったと思うこともある。ある時、少年野球の大会で、川高野球部の先輩、後輩に遭遇した。思わぬ再会に驚くが、やはり川高野球部出身でよかったと感じた。

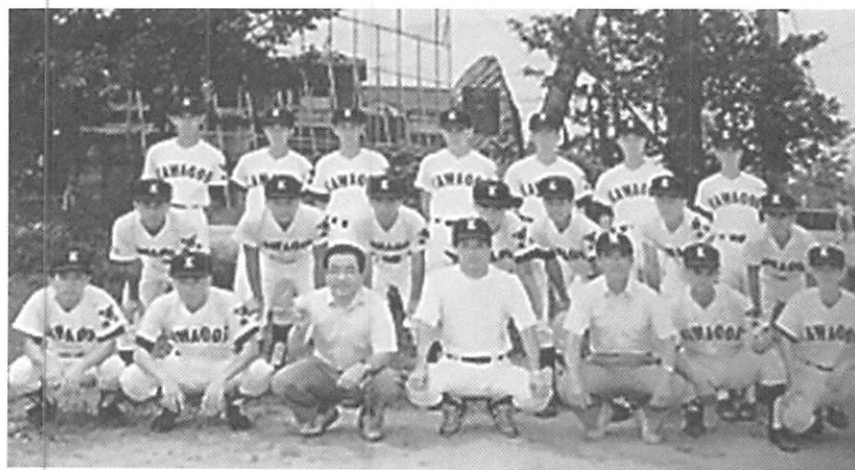
八木

中学の頃から楽しみでとにかく野球のはずでしたが、結局は中途半端で甲子園は遠い存在のまま終わりました。ただ貴重な経験と仲間を得られた事が私にとって大きいものとなっています。2016マスターズ甲子園初勝利、憧れの場所で仲間がプレーし勝利した事をうれしく思います。

八木橋

あつという間の3年間でした。硬球に戸惑いながらスタートした高校野球、夏の炎天下での練習や冬のトレーニングなど、苦しかった練習も同期メンバーに恵まれたからこそ乗り越えることができました。個人的には、最後の試合で無安打、最後のバッターになってしまったことは心残りです。監督さんをはじめ、先輩や後輩、OBの皆さん、保護者など、多くの方々に支えられながら、仲間と野球をできたことに感謝しています。

平成4年卒業 (高44回)



(後列) 左より、杉本、天池、難波、小林、古賀、山崎、田村
(中列) 左より、小澤、藤田、山中、篠原、片桐、道祖土、池田
(前列) 左より、富樫、松岡、吉田部長、鈴木監督、鈴木先生、前崎、鷹取

Memories

三塁手 小澤 和也

入部してからの高校三年間は、ほぼ野球漬けの毎日でした。たまの休みでも野球部の仲間と遊んで…と、いつでも一緒にいたことが思い出されます。甲子園という一つの目標に向かって仲間達と共に夢中になって白球を追いかけて青春の汗を流せたことは今の私のかけがえのない財産です。現役の皆さん、悔いの残らないよう頑張ってください。これからも母校野球部を応援していきます。

右翼手 藤田 貴志

創部100周年、自分が伝統ある川高野球部の一員であったことを誇らしく、嬉しく思います。高校時代を振り返ると、日々の練習がキツかったことが一番の思い出です。

特に基礎体力作りに行く「サーキットトレーニング」のハードルを使う練習が私は苦手でした…。

当時はキツかった練習ですが、今となっては、それを「仲間と」「目標を一つにして」「楽しく」やり抜いたからこそ、心身共に鍛えられたと感謝しています。

右翼手 山中 知則

私の「思い出」は、初雁球場であの大声援の中でプレーできたことです。あの大きな声援は、チームとしても持てる以上の力を発揮できたと思います。今、私は、息子の所属する少年野球チームの指導者をしております。20年以上の時を経て息子とともに初雁球場のグラウンドに立つこともあり、感慨深いものがあります。これも川高野球部での3年間があったからこそ

【公式戦の記録】

秋季県大会西部地区予選

●1回戦 川越0 - 4 新座総合

春季県大会西部地区予選

○1回戦 川越3 - 2 新座総合

●代表決定戦

川越3 - 7 狭山工業

全国高校野球選手権埼玉大会

○1回戦 川越6 - 3 杉戸

○2回戦 川越13 - 3 上尾南

○3回戦 川越10 - 0 所沢東

●4回戦 川越3 - 4×大宮工業



夏の大会 对上尾南高校

そです。これからも微力ながら川高野球部を応援していきます。

左翼手 山崎 英一

私たち野球部員にとって、高校生活の拠点となったのが野球部の部室でした。登校時、休み時間、授業の休講時等、時間があれば部室に足が向いていました。特に、苦しい練習が終わった後、グローブの手入れをしながら、芸能関係の話、監督・先輩の悪口、他校の女子マネージャー批評等、他愛もない話をしたひと時を思い出します。衛生的には決して良い空間ではなかったにも関わらず、長時間過ごしても苦にならなかったのは、若さだけではなく、同じボールを追いかけた仲間がいたからこそだったと思います。



練習後、部室前にてリラックス

中堅手 鷹取 文彦
今思うと多くのことを学ばせてもらいました。好きな野球を続けたいという単純な思いで入部しましたが、なかなか試合に出られなかったり、たまに出場すると緊張して思うようにプレーできなかったり共学校のマネージャーを羨ましく思ったり。でも、その中で自分が貢献できること、チームワークの大切さを学べたことは、今でも活きています。最後の夏の大会で勝ち進んで行けたこと、スタンドの声援、チームメイトの泣き笑いは、今でも忘れられません。

捕手 小林 智

私の思い出は、新チーム発足直後の高校2年の夏に大怪我をしてしまい、チームの皆に迷惑を掛けてしまったことです。秋の新人戦、春の大会には出場出来ずに、最後の夏の大会に出場出来たことがとても嬉しかったことを覚えています。仲間とともに同じ目標に向かって2年半過ごせたことは、私の人生においても本当に掛け替えのない時間となりました。このような体験は、伝統ある川高野球部だ

からこそ経験出来たことだと思います。これから多くの後輩にこのような体験をして欲しいと思います。

♪♪トリは、自他ともに認めるムードメーカー前崎君です。文中に登場するエピソードは、ほぼ事実であり、あだ名で登場される諸先輩の皆様には、先に非礼をお詫び申し上げます。（高44回卒 編集者より）

中堅手 前崎 裕宗

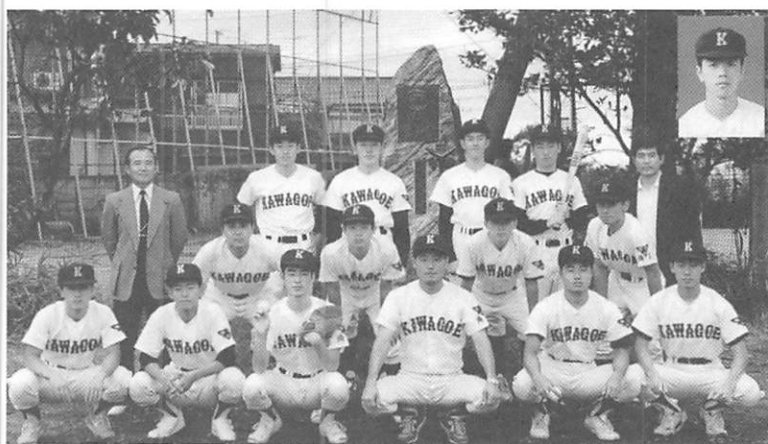
共学校に入学したいと思っていて15歳の春、やむなく男子校に入学。私服での学校生活を楽しみにしていましたが、野球部は学ランだと聞き、野球部への入部を悩んだことを思い出します。入部して最初に教わったことは、真っ直ぐに歩くこと。ひたすら足のかかとかから着いて、親指の付根から足を離すといった“真っ直ぐ歩く練習”は、自分がファッションモデルにでもなるのかと錯覚したものです。1年上の先輩方は、面白い方ばかりで、私たちは、全員にあだ名を付けていました。イトウさん、サイトウさん、エンドウちゃん、ヤ



公式戦勝利後、スタンドにて

ギリん、バヤン、オチャリ、マティ、リンヤ、エビちゃん…など。とても優しく、そして厳しい先輩方でした。夏にプールで10往復泳ぐ練習メニューの際、遊んでサボっていたところを、監督さんに見つかり「お前ら、10往復泳いだのか!」と聞かれ、全く終わっていないにも関わらず「はい、泳ぎました!」と平然と即答された先輩方には、大変助けられました…。そのような先輩方も卒業され、自分が3年生になってからも様々な思い出があります。福島遠征や関西遠征の際には、夜中まで部屋で大騒ぎしているところを監督さんに怒られたり、監督さんに相談せずに「くすのき祭」に野球部で店を出して怒られたり…と話題には事欠かない野球部生活でした。最後の夏の大会で川越女子高校の吹奏楽部に「応援に来てほしい」と直談判に行き、応援に来てもらうことが出来、4回戦まで行けたことは、本当に野球部に入って良かったと感じた瞬間でした。後輩の皆さんにも是非青春を謳歌して欲しいと思います。甲子園で校歌を歌おう!

平成5年卒業 (高45回)



夏の大会のメンバー表

番号	氏名	学年
1	出河 尚貴	2
2	糸魚川 友宏	2
3	神田 陽悟	3
4	等々力 広太	3
5	阿部 博光	3
6	石川 将治	2
7	海野 啓之	3
8	石原 利彦	3
9	河戸 映	3
10	渡辺 大	3
11	藁谷 公次	2
12	田部井 貞治	3
13	金子 修	3
14	芝山 忠司	2
15	清水 秀郎	3
16	猪塚 慶太	3
17	大沢 和弘	3
18	高橋 宣之	3
19	梶田 憲一	2
20	亀井 一浩	3

関西遠征について
日程 7月23日(木) PM10:00 出発
24日(金) 甲子園見学
25日(土) 豊田高(対 刈野高)
26日(日) 奈良大(対 奈良)
27日(月) AM7:00 帰
持参するもの
野球用具一式 テーパースーツ 保護服
水筒 薬箱 手拭(27枚) 手袋 3対
上履(1ペア) ショーツ 他 各自持ち
宿泊所
奈良県大和郡大和町 奈良県立大和高等学校
TEL 07436-2-0060
大和町役所 322
関西遠征に関して (鈴木和彦監督直筆)



夏の大会の写真

【秋季地区予選の結果】

●川越 0-4 川越東

【春季地区予選の結果】

●川越 7-9 松山

【夏の大会の結果】

<1回戦>

川 越	000003000	3
武 南	000000200	2

6回の表、阿部、等々力、河戸の3連打でノーアウト満塁とすると4番神田の犠牲フライで先制。パスボールと石原のスライズで3点をあげる。先発出河は144球の完投勝利をおさめる。

<2回戦>

小鹿野	010012100	5
川 越	01032000×	6

2回表、小鹿野4番のホームランで先制されるもその裏、海野の犠牲フライですぐさま同点に追いつき、さらに5回には河戸、神田の連打と相手のミスで2点を追加。7回途中から渡辺の好リリーフで逃げ切る。

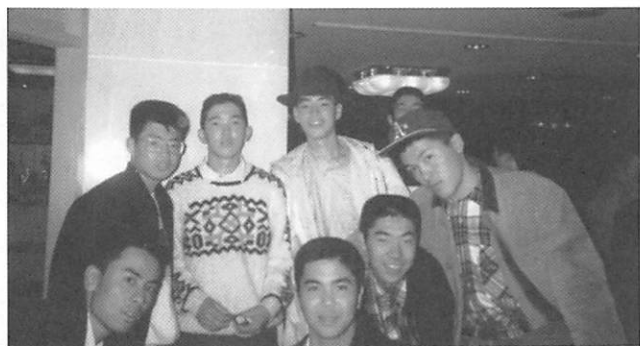
<3回戦>

川 越	010000100	2
秩父農工	30000000×	3

先発出河が初回到秩父4番にレフトポール際に運ばれて3点を失うが2回以降は危なげないピッチングで無得点に抑える。川越打線は相手のミスとスライズで8回までに2点を返し最終回もこの日石原の4つ目の盗塁で得点圏にランナーを進めるが最後の打者がピッチャーゴロに倒れ夏の大会が終わる。



卒業前、冬のグラウンドにて
(鈴木和夫部長、鈴木和彦監督と)



修学旅行にて
(グラウンド外でも一緒だった)

【メンバーより一言】

人生を強く生きていく上で大切なことを野球部で学んだと思う。また3年間、同じ目標に向けて頑張り、帰りには「みどりや」で、毎日取り留めの無いことを話す。そんな仲間と今でも付き合えていることが、幸せなことだなあ、と感じている。

(石原利彦)

厳しいサーキットトレーニング、アメリカンノック、練習帰りのみどりや、奈良や福島への遠征、そして夏の大会の初雁球場での大歓声（そしてレフトでのフライポロリ）、今でも鮮明に覚えています。あの3年間はかけがえのない思い出です。

(海野啓之)

今思えば野球のこと何にもわかってないでやってたと思う。今の知識のままもう一度あの時代に

戻りたい。そして今でも鈴木監督、当時のメンバーはちょこちょこ夢に出てくる。それだけに自分の人生の中でもとても充実した時間でありやって良かったと思う。

(河戸映)

伝統ある川高野球部で3年間高校野球をやれたこと、本当に誇りに思う。野球はチームスポーツだが、投げる、打つ、守る、走る、実はどれも一対一の真剣勝負。その一瞬に最高の結果が出せる様、日々皆で努力を積み重ねた。それが今でも自分の宝だ。

(神田陽悟)

高校3年間、今思えば後悔ややり残しが多かったように思えるが、それも含めていい思い出だと思う。20年以上たっても当時の経験が今の自分の支えになっていると感じている。みんなと会ったときの自

分の立ち位置も当時のままの気もするが…

(田部井貞治)

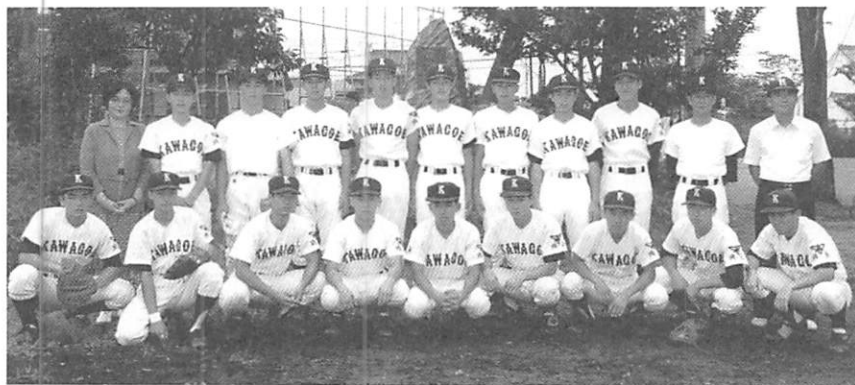
当時を思い出すと、協調性のないメンバーだったと恥ずかしくなりますが、好きなように野球をさせていただきました。夏の大会は全く活躍できませんでした。チームメイトの猪塚にノックで特訓してもらったプレーを大会でできたのが一番の思い出です。

(等々力広太)

走り込み、投げ込み、ウェイトトレーニング、とことんまで打ち込んだ。そういうものに出会えたことは、僕の人生にとってかけがえの無いものだし「あそこまで俺はやれるんだ。」という川高野球部での自信が今も僕の根っこにあります。

(渡辺大)

平成 6 年卒業 (高46回)



後列左より
青木先生、武田、金谷、小島、梶田、大塚、恩田、藁谷、貝塚、横田監督、鈴木先生

前列左より
糸魚川、村上、出河、高橋（久）、芝山、高橋（通）、高野、石川、青砥

【公式戦戦績】

(秋季地区大会)

川越● 7-10 所沢

(春季地区大会)

川越● 2-10 坂戸

(選手権大会)

1 回戦

新座総合001010001 | 3

川 越30004010× | 8

本塁打 大河原

三塁打 大河原

二塁打 村上2、糸魚川

【川越】 打安点 (新) (川)

⑦青 砥 300 4 振 3

⑥石 川 310 2 球 4

⑧村 上 322 2 犠 5

②糸魚川 520 0 盗 1

③大河原 433 2 失 4

⑤森 田 212 10 残 8

⑨梶 田 310 0 併 0

①出 河 200

H大 沢 100

1貝 塚 100

④高 野 400

計 31107

初回に大河原の2ラン等で3点先制。5回には村上の二塁打、大

河原の三塁打、森田のスクイズなどで4点追加。出河、貝塚の継投で相手打線を3点に抑えた。

2 回戦

妻 沼0000010 | 1

川 越303200× | 8

(7回コールド)

三塁打 藁谷

二塁打 糸魚川、大河原、高野2

【川越】 打安点 (妻) (川)

⑦青 砥 411 5 振 3

⑥石 川 430 3 球 2

⑧村 上 400 0 犠 0

②糸魚川 221 0 盗 2

③大河原 432 4 失 0

⑤森 田 412 6 残 7

⑨高橋久 300 0 併 2

①藁 谷 210

H大 沢 100

1貝 塚 000

④高 野 320

計 31136

初回に糸魚川、大河原の連続二塁打等で3点先制。3回は二死からの2安打で3点を、また4回にも長短4安打で2点を追加した。先発藁谷は5回まで相手打線を散

発2安打に抑える好投を見せた。

3 回戦

川 越00000000 | 0

花咲徳栄20030011× | 7

【川越】 打安点 (川) (花)

⑦青 砥 300 10 振 4

⑥石 川 300 3 球 5

⑧4村上 300 0 犠 2

②糸魚川 410 0 盗 0

③大河原 320 1 失 1

⑤森 田 300 7 残 9

⑨梶 田 300 0 併 0

①出 河 100

1貝 塚 200

④高 野 100

H大 沢 110

8武 田 000

H8高橋久100

計 2840

左膝痛を押して登板したエース出河だが初回制球に苦しみ、失策も絡み2点を失い、4回にも失点する。打線も後にプロ入りする品田兄弟の弟寛介に7回までに散発4安打で9三振を喫する。8回は二死から内野安打、左中間二塁打を打たれ無念のコールド負け。

【我ら高校46回】 東京都庁の新宿移転、雲仙普賢岳の大火砕流、横綱千代の富士の引退・・・そんな出来事で語られる平成3年の春、私達は川越高校の門をくぐり、野球部に集いました。個性的な人間ばかり、まとまりがないようで妙にウマが合い、チームワークはいいが闘争心にやや欠ける、、、そんなチームでありました。2期上と2期下に、後にプロに進んだ投手がおり、ある意味「谷間の世代」なのかもしれません。

【3年時での監督交代】 私達が3年生に進級時に、監督さんが鈴木和彦先生から横田雅之先生に代われました。3年時での監督交代に、やや戸惑いはありましたが、横田先生の監督就任により下級生の出場機会の増加やポジションの大幅な変更など、チームが活性化した一面もあったと思います。視点を変えれば、2人の監督さんから野球に対する姿勢や戦術に関する深い知見をご指導いただけたことは、有意義で恵まれていたと思います。

【社会現象】 私達が新2年生になる春の関西遠征の際、選抜甲子園の開会式と開幕試合を見る機会を得ました。その開幕カードが宮古（岩手）対星稜（石川）。のちに日本を代表する打者となる松井秀喜選手のいる星稜高校です。この試合で松井選手は右中間に2本の本塁打を放ちますが、右中間を破るツーベースかなと思われる低い弾道の打球が、そのまま右中間スタンドに突き刺さるのを目の当たりにし、「本当に同じ高校生な

のか」と言葉を失ったのを覚えています。

この年の夏の甲子園では、今でも語られる明德義塾（高知）の松井秀喜選手に対する「5連続敬遠」が起こります。この「事件」は高校スポーツの枠を大きく超えて様々なメディアで取り上げられ、高校野球における「勝利至上主義の弊害」や「教育の一環という役割」などの議論が社会現象として起こりました。新チームとして始動していた私達も随分と考えさせられ、チーム内で議論をした記憶があります。

【野球の怖さ】 私達が2年時の選手権大会は、初戦で第二シードの大井高校を逆転で下したノーシードの秀明高校が、全ての試合を逆転で勝ち抜き甲子園に出場するという大変ドラマチックな大会でした。「ミラクル秀明」の文字が新聞に何度も載っていました。

「秀明ができるなら自分たちにもできる」そんな思いで新チームは始動し、まもなく行われた坂戸高校との練習試合で9回二死走者無しから3点をひっくり返し勝利したことがありました。自分達の力を過信したのかもしれませんが、その後の秋の大会では所沢高校に対し、9回二死走者無しまで2点リードしていながら、そこから逆転されるという経験もしました。「もう大丈夫、勝てる」というわずかな心の隙が、思いもよらない土壇場の逆転につながる野球の怖さを体感しました。

【人生の宝】 高校を卒業してから20年以上が経ちますが、いまでも定期的に集まり、集まればあの頃と変わらず、とりとめのない話を、時を忘れて語り合います。その際に現役時代の痛恨事として話が上がるのが、自分たちの公式戦、練習試合のスコアブックが手元に無いことです。

現役当時、先輩達には卒業時に練習試合を含めた全試合のスコアブックを取りまとめて差し上げていた記憶があるのですが、どういう訳か自分達は手元にスコアがない・・・。どうか現役の皆さんには、自分たちのスコアブックを手元に残しておいてもらいたい。それは一人一人の青春の記憶としてでもあり、部としての貴重な記録としてでもです。

現役当時、新入生向けの野球部紹介の結びには、「では、諸君のこれからの三年間が『人生の宝』となることを祈る。」と記されていたと思います。野球に打ち込んだ時間も貴重ですが、二十数年経っても昔のままに語り合える仲間を得たことも大変貴重な財産であり、まさに川越高校野球部での三年間は「人生の宝」であったと実感します。



平成7年卒業 (高47回)



後列左より、鈴木和夫部長、横田雅之監督、湯浅崎大志、村田誠、緑川光一
前田博貴、玉居子精宏、岡崎浩貴、青木恭子先生
前列左より、和田賢治、堀口純一、大河原久和、森田哲郎、大澤雄、上辻芳徳、
高橋智也

夏の大会試合詳報

○1回戦 对所沢西

大会初戦、初回表の先頭打者堀口が果敢に初球を捉え見事にヒットで出塁。その堀口を主砲・大河原の適時打で還し先制点を奪うなど、初回から積極的な攻撃で得点を重ねる。

一方、エース北川は所沢西打線に連打を許さず無失点のまま大量リードに。6回につかまり失点するも、粘り強い投球を見せ7回コールドで快勝となった。

○2回戦 対武南

序盤は互いに点を取り合っていたが、中盤になると調子の上がない北川が武南打線につかまったのに対し、打線が得点できず4点のリードを許す苦しい展開に。

7回ようやく打線がつながり1点差に迫ってからは、北川が意地を見せ無失点で切り抜け、9回に長短打に機動力を絡めてついに逆転、反撃をかわして逃げ切り勝ち。

○3回戦 対吉川

先発玉居子は初回先頭打者に長打を浴びるなどで先制点を奪われるも、リズムは崩れず試合の主導権を吉川に渡さない。打線は初回から爆発し早々と逆転に成功した後は、ほぼ一方的にリードを広げる。6回には大澤の3ランも飛びだし、この回に5点を挙げ10点差がついた時点でコールドとなり勝利。北川を温存し春日部共栄との決戦にコマを進めた。

○4回戦 対春日部共栄

大会前から浦和学院とともに優勝候補の双壁と見られていた春日部共栄との一戦。初回堀口が春日部共栄エース土肥からヒットで出塁するも、巧みな牽制に刺され先制機を逸した。その裏、先頭打者を出したが主将・森田の好捕もあり何とか無失点で切り抜ける。ところが2回、攻撃ではまたも先頭を走塁死で失ったのに対し、守備

成績

○夏季新人戦

川越3-7埼玉

○秋季県大会 (西部地区予選)

川越9-2日高

川越11-16松山

○西部地区大会

川越0-5立教

○川越市大会 (優勝)

川越5-2川越西

川越13-10川越東

川越2-0川越商

○春季県大会 (西部地区予選)

川越11-0鳩山

川越1-4聖望学園

○全国高校野球選手権埼玉大会

1回戦 7/16 飯能市民球場

川 越	3	0	0	1	2	4	0	10
所沢西	0	0	0	0	0	2	0	2

2回戦 7/19 県営大宮球場

川 越	1	0	1	0	0	0	3	0	6	11
武 南	0	2	0	3	0	1	0	0	0	6

3回戦 7/22 川越初雁球場

吉 川	1	0	2	0	0	0	3
川 越	2	3	0	3	0	5	13

4回戦 7/24 県営大宮球場

川 越	0	0	0	0	0	0	0	0
春日部共栄	0	2	0	0	0	4	1	7

では先頭を失策で出塁させたところに三塁打を浴び先制を許し、さらに追加点を献上する。その後両チーム無得点のまま迎えた6回、二死から北川の三塁打と堀口の四球(盗塁)で同点機を作るも後続を断たれ、その裏に4点を奪われたことで試合の流れは完全に春日部共栄に。最後は7回に追加点を入れた時点でコールドゲームが成立。4回戦で姿を消した。

思い出

毎日のように練習をしていた日々が信じられないくらい、体力も体型も変わってしまった今日この頃、川越高校を卒業してからの人生の方が長くなったことに、年月の流れを実感します。

振り返ってみると、この代は森田・大河原・大澤を核とした厚みのある打線と、1代下の北川・上村バッテリーを軸とした守備を武器としたチームでした。部員は個性あふれ、それゆえ意見を異にすることも多く、時には強く衝突することもありましたが、入部した13人が1人も離脱することなく最後の大会までやり遂げたことは、大きな誇りです。

その13人が力を合わせたこととして、我々が1年生の時に迎えた夏の大会の開会式におけるパフォーマンスを挙げようと思います。1年生でベンチ入りした者はおらず、全員がスタンドから先輩方のプレーに声援を送る側でした。そこで、来る開会式において川越高校の名前が読み上げられるその時に何かをやろうということで、2年生の先輩方の助言を頼りに話し合いました。

決定した案は、各自の背中にビニールテープで文字を貼り、その上に学ランを着て隠しておき、高校の名前が読み上げられた瞬間に学ランを脱ぎ、左からウェーブを起こすと同時に学ランを上には放り投げ、最後に全員で同じポーズ（右上の写真のポーズ）を取って背中の文字を読んでもらう、というものでした。



『オトコダゼカワゴエコウウ』（日刊スポーツ 平成4年7月15日付）

案が決定してからは、野球の練習とは別に、密かに開会式に向けた練習も積み重ねて参りました。そして迎えた開会式当日、リニューアルした県営大宮球場の新しさや広さに心躍らせた勢いそのままに実行したパフォーマンスは思いのほか受け、翌日のスポーツ紙に記事として掲載されるものとなりました。これは、野球そのものとは関わりのないことかもしれませんが、それでも全員が真剣に取り組んだ証であるとして、我々にとっての語り草となっております。

日々の活動とはいいますが、13人と川越高校野球部にあって1学年の人数としては比較的少数であったこともあり、下級生の時は練習の準備・後片付けや日々の清掃当番などで1人が受け持つ役割が大きかったことと、川越市内の中学校出身者が少なく通学に時間がかかる者が多かったために、主に試合がある日に朝早くから多くの準備をするのが大変だったことを記憶しております。

当然、これらの仕事はチームにとって不可欠であり大切な作業です。今にして、決して楽しいものではなかったこの経験が、社会に出てからの大きな支えとなっていたことを痛感する次第です。

肝心の野球ですが、先の大会で県8強の埼玉栄や坂戸を相手に練習試合で勝利や引き分けたこともありましたが、他に、負けた時点で厳しい走り込みの冬練習突入となる川越市大会では、それを遅らせるべくチームが結束し、山間で30キロもの距離を駆け抜ける強歩大会（学校行事）の翌日に組まれた試合にも勝利し遂には優勝したこともありましたが、しかし、夏の大会でシード校になることも、また、シード校を撃破することも叶わなかったことは不本意の至りです。

後輩たちは間違いなく我々の時よりも技術が向上しており、頼もしさや羨ましさを感じます。強豪校にも臆することなく立ち向かい、勝利を重ねる姿を楽しみに、筆をおきたいと思います。（了）

平成8年卒業 (高48回)



後列左より、青木恭子先生、熊谷真一、辻 一博、北川智規、三草隼人、斉藤武弘、高田 誠、横田雅之監督、鈴木和夫先生
前列左より、関根早人、和田耕一、大村 拓、上村晋哉、細沼 豪、富永泰隆、河合真治

夏の大会試合詳報

○1回戦 対 富士見

川越が長短12安打で8点を奪って圧勝した。三回に落合の三塁打などで2点を先制すると四回には、敵失に乗じて好機を築き、落合の2ランスクイズ、児玉の右翼越え本塁打などで5点を挙げて試合を決めた。四回に、3連打を浴び1点を返されたが、北川・辻の継投でその後の反撃を許さなかった。

○2回戦 対 久喜北陽

終盤の好機を生かした川越が、大量点を奪って快勝した。川越は2点リードで迎えた八回、細沼、上村、河合の適時打など4連打で4点を追加し、試合を決めた。七回、連続失策で久喜北陽に2点差に詰め寄られたが、一死二、三塁の危機をしのぎ、後続を断った。

○3回戦 対 獨協埼玉

初回到先制するも、相手の適時打で一時は逆転を許したが、好機を確実にものにした川越が、主戦北川の好投も加わって、獨協埼玉に競り勝った。2-2で迎えた七回、川越は大村の内野安打と敵失で一死一、三塁とし、細沼の中犠飛で決勝点を奪った。九回には、斉藤の適時打で1点を加え、試合を決めた。

○4回戦 対 埼玉栄

先発和田が初回を0点に抑えるが、序盤にリードを許す。川越は六回、埼玉栄・氏家から6連打で4-2と逆転に成功する。2点差で迎えた九回、3連打を浴び一死満塁から失策で2点をもぎ取られ同点に。十回は一死一、二塁から4番作野に右中間に運ばれ、甲子園への夢は断たれた。

成績

☆夏季新人戦

- 川越5-1坂戸
- 川越8-0狭山工
- 川越10-0川越東
- 川越2-7川越商

☆秋季県大会 (西部地区予選)

- △川越2-2飯能 (降雨再試合)
- 川越2-6飯能

☆西部地区大会

- 川越5-9秀明

☆川越市大会

- 川越6-7川越工

☆春季県大会 (西部地区予選)

- 川越2-0滑川
- 川越4-2秀明

☆春季県大会

- 川越0-6本庄

☆全国高校野球選手権埼玉大会

○1回戦 7/16 川越初雁球場	
川 越	0 0 2 5 0 1 0 8
富士見	0 0 0 1 0 0 0 1
(7回コールド)	

○2回戦 7/19 川口市営球場

川 越	1 1 0 0 1 1 1 4 0 9
久喜北陽	0 0 1 0 1 0 1 0 0 3

○3回戦 7/22 川越初雁球場

川 越	1 1 0 0 0 0 1 0 1 4
獨協埼玉	2 0 0 0 0 0 0 0 0 2

●4回戦 7/24 朝霞市営球場

川 越	0 0 1 0 0 3 0 0 0 4
埼玉栄	0 1 1 0 0 0 0 2 1× 5
(延長10回)	



北川 智規（狭山西中）
1年の秋から背番号「1」を背負う。
大学卒業後オリックスに入団し活躍。

上村 晋哉（日高武蔵台中）
主将でキャッチャー。ピンチのときで
も、笑顔で心がける。

河合 真治（川越一中）
内に秘める熱い闘志。ここぞという場
面での勝負強いバッティングが魅力。

斉藤 武弘（上福岡二中）
落ち着いたプレースタイル。華麗なグ
ラブさばきで、守備のリズムをつくる。

高田 誠（富士見西中）
頼れるショートストップ。勝負強いバ
ッティングで勝利に貢献する。

細沼 豪（三芳中）
チーム1の努力家。4番打者・副主将
としてチームを引っ張る。

大村 拓（入間豊岡中）
俊足巧打のリードオフマン。副主将・
チームの切り込み隊長として活躍。

和田 耕一（北坂戸中）
チームの秘密兵器。テニス部出身なが
ら、投手として欠かせない存在に。

辻 一博（入間武蔵中）
左のエースとして活躍。大きく曲がる
カーブを武器に三振を奪う。

熊谷 真一（富士見勝瀬中）
光るバッティングセンスで、代打の切
り札に。チャンスを確実にものにする。

三草 隼人（川越高階西中）
チームのムードメーカー。サードコー
チャーとして、激を飛ばし続けた。

富永 泰隆（川越鯨井中）
冷静沈着、チームの精神的支柱。マス
ターズで夢を掴み、甲子園で大暴れ。

関根 早人（志木宗岡中）
内野から投手へコンバート。コントロ
ールの良さで相手打線を手玉に。

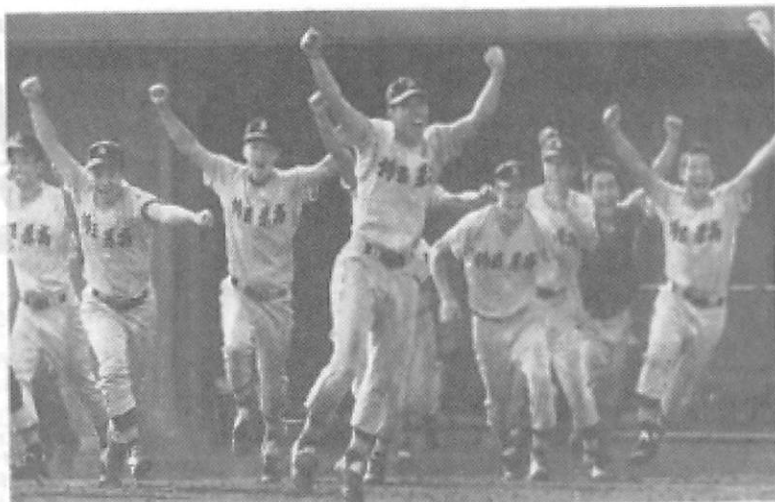


埼玉新聞 平成七年七月二五日

朝霞市営

あと二歩で「大物食い」は
成ったはずだった。第7シー

夢に消えた「大物食い」 川越 9回まで埼玉栄をリード

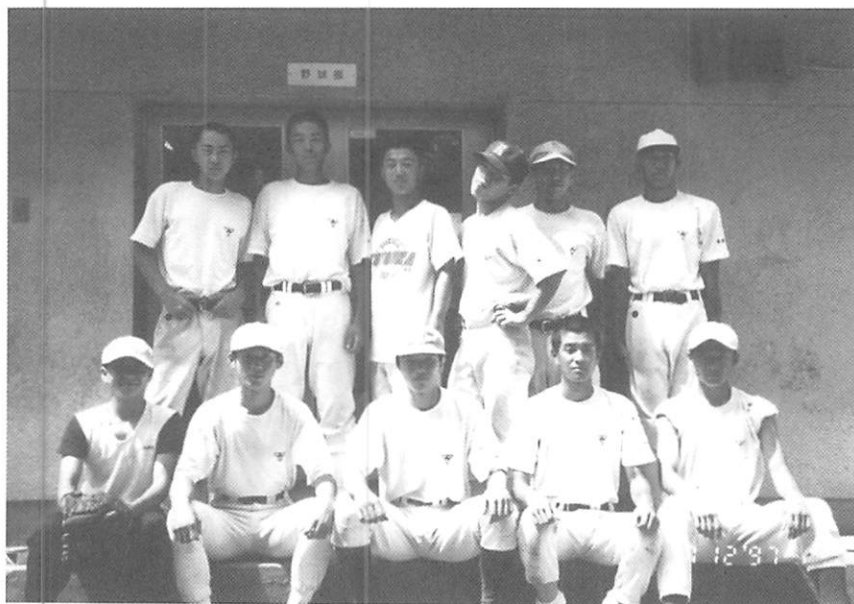


埼玉栄を九回一死まで、4
2と迫りながら同点にさ
し、延長10回にサヨナラ負け
した川越、野投手・氏家を打
ち込み、昨季を上回る5回戦

進出を手にしかけたが、土曜
朝で大敗を喫した。
シード校を相手にしても、
気後れなまなかった。ピンチ
でもチャンスでも、ベンチか
らは「楽しくやろうぜ」の声
が飛び、試合は楽しむもの
らしい。プレーするなん

川越一塁手、10回裏埼玉栄
1死一、二塁、作野の右中間
連打でサヨナラ勝ちを決
めた。ベンチを盛り出し、埼玉
玉栄ナイン、朝霞市営
▲「つまずかない」と野手の上
村、六回、8連打で逆転、3
点を奪い勝ち確とした時はもち
ろろ、九回に同点に迫いつか
れた時、ナインは明るい表
情で球を追い続けた。
だが10回、最後の最後で気
持が守勢に回った。「確々
なっていた、迫る立派の時」
はなかった。プレッシャーを
自ら背負い込んでいたと横
田監督、直球で真つ向勝負を
挑んだつもりが、流れをつか
んだ埼玉栄打線は簡単に打ち
返された。
試合後は選手全員、通路に
へたり込んで泣いた。最後まで
楽しくプレーして、悔いは
残っていないはずだった。
「でも、負けることがやっぱり悔
しい。後輩たちには、この試
合をいつまでも忘れないでも
らいたい」（上村）。この日
を最後に「楽しい野球」の伝
説をつづった三年生は引退す
る。楽しくプレーし、なおか
つ「勝つ」ためにはどうした
らよいか、二十四人の下級生
に、卒業までの課題が残った。
（山口真二）

平成9年卒業 (高49回)



(後列左から) 臼井康介、諸橋 諭、内山隆貴、森 義隆、増川 聡、菅原元気
(前列左から) 小島篤史、八木彰夫、松本太郎、原澤貴宏、安藤雅彦

成 績

- 新人戦
川越1 - 2 川越工
- 秋季大会西部地区予選
川越11 - 7 入間
川越9 - 10 西武台
- 西部地区大会
川越0 - 3 所沢西
- 川越市大会 (準優勝)
川越7 - 1 城西大川越
川越3 - 2 川越初雁
川越2 - 10 川越東
- 春季大会西部地区予選
川越7 - 1 城北埼玉
川越1 - 9 狭山ヶ丘
- 全国高校野球選手権埼玉大会
川越2 - 5 早大本庄

三年間を振り返って

安藤雅彦

川越高校野球部での三年間、結果は、決して満足できるものではありませんでした。しかし、過程で得た、経験・仲間は、後の人生においても、掛け替えの無いものとなりました。猛暑の練習で、監督さんの仰った「自分で自分の限界を決めるな」という言葉は今も困難な状況に遭遇する度に思い出されます。

臼井康介

川高野球部100年の長い歴史の中の3年間を、諸先輩方や後輩、仲間と共に過ごすことができたことを光栄に思います。楽しくも辛い3年間でしたが、それが今の自分の糧になっています。レベ、カ

エル、きつかった、スマホもSNSもない時代に、100%野球に打ち込むことができた幸せな3年間でした。

内山隆貴

今ではもう経験する事が出来ない、かけがえのない3年間でした。仲間と会えた事、先輩や後輩にいろいろ教えてもらえた事、振り返ると野球部に入って本当に良かったと思います。ありがとうございます。冬練や夏のきつい練習が思い出になっています。最後のヒットと多数のエラー、鮮やかに覚えてます。

小島篤史

3年間、厳しい練習に耐え、迎

えた最後の大会で悪送球をしてしまったことが、40歳になった今でも忘れることができません。引退後は本気で野球を嫌いになりかけましたが、今では草野球を通じて楽しく野球を続けています。川高野球部で、一生の友ができたことに本当に感謝しています。

菅原元気

今、確実に語れることは、技術面より精神面で大きく学んだ3年間であったこと、苦しい局面が多々あったが最後まで続けられたこと、そこには、支えてくれた仲間がいたこと、そして、校歌や応援歌は、今でも全て歌えることである。この3年間で学んだ経験は非常に大きく、今後も生かし、日々



夏の大会メンバー（下級生含む）

精進したい。

原澤貴宏

1年生の時、連帯責任ダッシュで走れないと止まってしまいました。監督さんに喝を入れられて再び走り始め、まだ走れたのかと先輩方にガチで切られました。また、2年の秋には先発した滑川高校との練習試合で負けたら走って帰るという条件で、見事にみんなで川高まで走りきった事は忘れられない思い出です。

増川 聡

『1年生』夏の暑さに勝てず、顔がヘルペスだらけになりました。『2年生』校内強歩大会で張り切った結果、足の甲を疲労骨折しました。『3年生』肺のトレーニング不足により、突如肺気胸になりました。川高野球部での3年間は今の自分の原点です。監督さん、仲間には感謝しかありません。

松本太郎

当時を振り返ると、「もっとできたんじゃないか」という悔しさと、「あの頃なりのベストは尽くした」という諦観に似た感情が入り乱れます。打たれて負けた屈辱も、夏の大会でタイムリーを打った快感も鮮明に残っています。そして何より、良い先輩、後輩、同期に恵まれたことに感謝。

森 義隆

白球しか視界に入らない3年間でした。ピッチャーから投げられた白球しか。目の前に転がってきた白球しか。試合展開もアウトカウントもイニングも把握する余裕がありませんでした。結果、3年間でイップスとの戦いに明け暮れました。その3年間でとても愛しています。

諸橋 諭

私の高校野球は常に怪我との闘いでした。一度は諦め、退部し、

復帰したもののまた怪我をする、そんなことの繰り返しでした。しかし、全力でプレー出来ない中で自分なりにもがいたことは確実に糧となっています。そして、そんな私と一緒に野球をしてくれた先輩や仲間には今も感謝の念に堪えません。

八木彰夫

目前の事を無我夢中でこなしていた。振り返ると、野球以外の記憶は鮮明で、野球に関する細部はほとんど憶えていない。それだけ受け身な部分が多かったのだと思います。しかし、その後の人生における自身の軸を作ったのは間違いなくこの三年間。自分とどっぴりと向き合い、思い、感じ、考えた、そんな日々でした。川高野球部、仲間、全てに感謝です。

平成10年卒業 (高50回)



後列左より、宮本達治、川上徹、小山義和、児玉剛、齋藤真一、山本泰輔、高橋克己部長、横田雅之監督
前列左より、國方一真、松本圭史、齋藤喬、落合正幸、花井正直、秦利幸、宮敦子先生(会計)

《夏の大会メンバー》

- ① 松本圭史3 川越霞ヶ関
 - ② 齋藤 喬3 川越西
 - ③ 児玉 剛3 和光二
 - ④ 宮本達治3 川越西
 - ⑤ 木島広太2 川越一
 - ⑥ 落合正幸3 狭山堀兼(※)
 - ⑦ 花井正直3 富士見東
 - ⑧ 小山義和3 川越霞ヶ関
 - ⑨ 川上 徹3 日高根
 - ⑩ 田代智也2 北坂戸
 - ⑪ 田中和樹2 東松山北
 - ⑫ 末本雅之2 所沢中央
 - ⑬ 伊藤俊哉2 東松山松山
 - ⑭ 齋藤真一3 狭山入間川
 - ⑮ 山本泰輔3 川越名細
 - ⑯ 國方一真3 所沢小手指
 - ⑰ 秦 利幸3 川越霞ヶ関
 - ⑱ 丸 隆宏2 北坂戸
 - ⑲ 宮本憲男1 鶴ヶ島富士見
 - ⑳ 川中 真1 大井東
- (※)は主将

《チーム特徴》

主戦松本は球種が豊富で打たせて取るタイプ。打線は1発のある児玉を軸に、つなぐ野球で得点を積み重ね、勝ちパターンに持っていく。

第79回全国高校野球選手権

※参加165校

1回戦＝朝霞市営球場

川 越 0 0 0 0 0 0 0 3 0 0 | 3
志 本 0 0 2 0 0 0 0 0 0 | 2

▷二塁打 河西 ▷暴投 渡部3、松本
▷試合時間 2時間32分

川 越	打安点	志 本	打安点
⑧ 小 山	5 1 0	⑧ 篠 田	5 3 0
⑥ 落 合	4 2 0	④ 中 沢	2 0 0
③ 児 玉	4 1 0	⑥ 高 梨	4 0 0
② 齋藤喬	3 2 0	③ 河 西	5 1 1
⑨ 川 上	3 0 0	⑦ 河 手	4 1 0
⑤ 木 島	5 0 0	⑨ 柴 田	3 1 1
⑦ 山 本	3 1 0	② 細 田	3 1 0
H 齋藤真	1 1 1	⑤ 江 田	4 1 0
R 7 花 井	1 0 0	① 渡 部	2 0 0
④ 宮本達	2 1 1		
① 松 本	3 0 0		
	計 349 2		
		川 4 6 3 3 1 1 3 0	
		振球犠盗失残併	
		志 6 4 4 0 1 1 1 0	

エース松本は制球が定まらないながらも打たせて取り、何とか粘り強いピッチングを続けていた。しかし打線が湿りがちで得点が入らず。終盤に差し掛かり7回に得た1アウト満塁のチャンスにバッター川上。打った打球はセカンドゴロでホームがクロスプレーに。一時はアウトのコールがあったが、キャッチャーの落球のしぐさがあり、落合の抗議により一転セーフ。その後一気にたたみかけ逆転勝利！

【対戦成績】

全77戦 38勝 34敗 5分

【公式戦の記録】 10勝 6敗

★新人戦

- 1回戦 川越7-3新座
- 2回戦 川越2-0朝霞
- 3回戦 西武台8-4川越

★秋季大会西部地区予選

- 1回戦 川越9-3豊岡
- 代表決定戦 滑川10-8川越

★西部地区大会

- 1回戦 川越7-0川越工
- 2回戦 川越8-1西武文理
- 3回戦 所沢北7-4川越

★川越市内大会

- 1回戦 川越8-2川越西
- 2回戦 川越8-0川越初雁
- 3回戦 川越商5-4川越

★春季大会西部地区予選

- 1回戦 川越13-1所沢東
- 代表決定戦 川越3-2立教

★春季県大会

- 1回戦 本庄9-4川越

★第79回全国高校野球選手権

- 1回戦 川越3-2志本
- 2回戦 春日部工5-3川越

2回戦＝朝霞市営球場

川 越 0 0 0 1 0 0 0 2 | 3
春日部工 0 0 1 1 1 0 2 0 × | 5

▷本塁打 齋藤喬、千葉▷二塁打 阿部
▷暴投松本2 ▷試合時間 2時間6分

川 越	打安点	春日部工	打安点
⑧ 小 山	4 1 0	⑧ 太 田	3 2 0
⑥ 落 合	4 0 0	③ 近 藤	3 1 0
③ 児 玉	4 0 0	⑨ 阿 部	4 2 1
② 齋藤喬	4 4 1	⑦ 柿 本	1 0 1
⑨ 川 上	4 0 0	① 伊 藤	1 0 0
⑤ 木 島	4 0 0	⑤ 関 根	4 0 0
⑦ 山 本	1 0 0	① 7 千	4 2 1
H 7 末 本	2 1 0	④ 草 薙	4 1 0
④ 宮 本	4 0 1	② 小 池	3 0 0
① 松 本	2 0 0	⑥ 佐 藤	4 0 0
H 齋藤真	0 0 0		
R 花 井	0 0 0		
1 市 川	1 0 0		
	計 346 2		
		川 5 1 1 0 3 6 1	
		振球犠盗失残併	
		春 1 4 1 1 5 7 1	

春日部工はノーシードながらシード校並みの実力があるとの前評判。2枚看板のピッチャーは予想通りの好投手で球威もあり、苦戦を強いられた。先制点を挙げられたが、4回にすぐさま齋藤喬のHRで同点に追いつくも、その後は点差が拡大。9回に粘りを見せ、2点差まで追いつけるも力負けとなった。春工はベスト4入賞。

《思い出ランキング》

※メンバーが思い出に残っている事を何でもランキングにしました。

【思い出の試合】

＜No.1＞夏の大会「志木高戦」
緊迫した接戦の状況下で、落合がホームに突入したクロスプレーを巡って、「アウト」の判定が抗議の末「セーフ」へ覆り、見事、夏大初戦勝利。

＜No.2＞夏の大会「春日部工戦」
プロ注目の2枚看板の投手を擁する相手に善戦。齋藤喬のHRで食い下がるも力及ばず。最終的に春日部工はその後にも順調に勝ち上がりベスト4に入る。

＜No.3＞練習試合「創価戦」
圧倒的な力の差を感じた一戦。三塁コーチの選手が代打で出てきてホームランに全員が驚愕！！3人のピッチャーが全て2桁失点。3対36で惨敗。

【思い出の出来事】

＜No.1＞近距離ノック
反射神経を養い、強打者の速い打球にも対応できるようトレーニング。ただし、取り損ねたときは、悶絶…。

＜No.2＞1点の重み…
練習試合で不甲斐ないプレーを連発し、滑川高校より川越高校まで走って帰る。1点の重みを痛感した約30キロの道のりだった。（高校2年生の時）

＜No.3＞福島遠征&ホームステイ
福島東高校の生徒と交流。夏休みは福島遠征、春休みは川越へお越し頂き練習試合を行った。遠征中に1泊だけ、ホーム選手のお家庭にお世話になり、お互い野球や進路、学校生活について話をしながら、熱い一晩を過ごした。

【怪我ランキング】

＜No.1＞児玉 剛
試合前のシートノック中に、送球が顔に当たり、顎の骨を折る！

＜No.2＞宮本 達治
西武台戦の試合中に、ヘッドスライディングで指が折れる！

＜No.3＞齋藤 真一
夏場の練習中に倒れ、体内の有害な物質が通常の203倍へ上昇。

【番外編】

＜No.1＞花井 正直
バッティングピッチャーの実績を買われ練習試合で初登板するも、ピッチャーライナーをくらい、即降板！？

＜No.2＞小山 義和
普通のイージーなライトフライが上がり、その後ろで、なぜかセンターの小山がダイビングのカバーリング！？

＜No.3＞松本 圭史
エース松本が投げるスクリーンは、バッターの手元で落ち、切れ味抜群…という噂はあるが、誰もその真実を知らない！？

【本塁打ランキング】

’96年8月～’97年7月

＜No.1＞ 児玉 剛13本
＜No.2＞ 齋藤 喬2本
川上 徹2本

No.1は圧倒的なパワーヒッターの児玉。1年生からファーストのレギュラーとして出場し、主砲として活躍。3年間のHR数は推定30本。

【打率ランキング】

’96年8月～’97年7月

＜No.1＞ 齋藤 喬 .392
＜No.2＞ 川上 徹 .344
＜No.3＞ 児玉 剛 .328

No.1の齋藤喬は、長打も備えた和製大砲。固め打ちを得意とする4番バッター。

《最後に》

約3年間にわたり、たくさんのご支援を頂きましたOBの方々、熱い気持ちでご指導頂きました横田監督、高橋部長、また先生方、一緒に戦ってくれた同期の応援団、田辺仁裕団長、伊藤雅一副団長、そして何より満足いくまで野球をさせて頂いた両親へ、高50回卒のメンバー全員より感謝を申し上げます。



※1997年7月16日春日部工との試合後に撮影

みんな最高の笑顔で青春時代を終えた。

学ラン姿が応援団の田辺仁裕団長(左)、伊藤雅一副団長(右)。

前列左より、高橋賢、岡崎、伊藤、田幡、末本、丸、神山、高橋隆

[illegible]

そうして攻めあぐねる中、8回裏、相手高の7番打者に打たれた本塁打の1点により、惜敗となった。

- ・秋季大会西部地区予選
川越 9 - 6 所沢商業
川越 2 - 1 西武台
- ・秋季県大会
川越 1 - 2 鷺宮

- ・川越市内大会
川越19－0川越総合（5回C）
川越4－0川越南
川越1－8川越東（7回C）
- ・春季大会西部地区予選
川越4－11所沢西（7回C）
- ・西埼玉県選手権大会
川越0－1川越工

川越高校野球部百年という伝統
の中に、自分も身を置くことがで

そんな中で、野球部の思い出を
思い返すと苦しい思い出が多く、
楽しい思い出はほんの少しだった
ように感じますが、ここでは語り
つくせないで、仲間たちと酒を

かわして語らいます。

ありがとう、川越高校野球部。

◆神山 裕司

身長163cm、体重50kg強とあまりに貧弱な体型であり、川高野球部での練習はついて行くのがやっと、高校生活は何かを食べるかひたすら寝るか、授業を受けた覚えはあまりない。

そんな私だが現在、運動を用いて入院患者の治療の助けをしている。

人生の方向性を示し、仲間に恵まれ、根拠のない自信を与えてくれた高校野球生活にとっても感謝している。

◆佐藤 弘康

川高野球部の3年間はなんだったのか。辛い練習に耐え、必死で周りにくらいついていったが、それでも公式戦出場0。

卒業後数年は思い出したくもなかった。

でも、今ようやくその意味を理解しつつある。

向き合わなければいけない。全ての答えは自分自身の中にあった。あの3年間で今の自分を形創っているのだ。

◆末本 雅之

百周年、これは歴代の諸先輩方から現役の選手が伝統を守り続けてきた結果であり、野球部が存続している重みを感じています。

高校時代は苦しみや悩みの記憶の方が圧倒的に多いですが、同期の仲間を始め、指導者や先輩、後輩や両親の支えがあったからこそ乗り越えられたと感謝しています。

感謝の気持ちを大切に、これからは野球部の発展に少しでも貢献出来ればと思います。

◆高橋 賢

結婚式の後、母親から言われたことがある。

『野球部を辞めたいと言ったとき、横田監督に止めてもらって、またみんなには暖かい目で見守ってもらってよかったね』と。

あのとき野球部を辞めなくて本当によかったと、今つくづく思う。この先もこの思いが変わることはない。

野球部のみんな、本当にありがとう。無事全員結婚したけど、今後も余興担当はお任せ下さい。

◆丸 隆宏

高校を卒業して何年が過ぎたであろうか。松坂大輔と同学年の我々は、高校卒業後も事あるごとに「松坂世代」と吹聴していたが、プロ野球から松坂世代が引退して行くと、本当に寂しさを感じる。

また同時に、時の流れの速さと自分自身の老いも痛感する瞬間である。

だからこそ、30年後にも悔しくないよう、1日1日を悔いなきように過ごして行きたい。松坂世代の一員として。

◆宮澤 智之

今日は試合に出られるのか、ヒット打てるのか、そんな悩みを抱く夢をいまだに見ます。

幸いにも大学でも楽しく真剣に硬式をやれたので野球に対する未練はなく、身体も動かないので大学卒業以来ほとんどやっていません。

ただそれでも毎月何回も高校の仲間と試合や練習に臨む夢を見るのが続くのだから…。

あの頃の緊張感や葛藤、喜びを胸に日々を送っています。

◆田中 和樹

百周年おめでとうございます。OB会ははじめご関係の皆さまのご尽力と、伝統を受け継いできた生徒達の努力の賜物と存じます。当時の厳しい環境下で培われた絆は今も固く、毎年同期で楽しい時間を過ごしております。

一生涯の友人との出会いの場を与えてくれた川高野球部に感謝いたします。いつかまた川高生が甲子園で元気にプレーする姿を楽しみにしております。

◆高橋 隆啓

川越高校野球部の3年間を振り返ると、日々の練習や宿舎、冬場のトレーニングなどを通じて“体”を鍛えられたのはもちろんですが、“心”のほうも同時に強く鍛えられました。

当時は無我夢中で気が付きませんでした。社会に出てから困難に直面した際には、高校時代に鍛えた体力と気力が役に立っています。

◆田幡 悠嗣

最後の試合負けた悔しさ、試合に出られなかった悔しさ、悔しさばかりが残る高校時代だが、共に励んだ仲間たちのおかげで自分の今があると思う。

その仲間の内、榊原啓一郎君が志半ばに他界されたことは残念ではありません。

また、卒業後に社会人野球にてご一緒させていただいた諸先輩方には、野球について多くを学ばせていただきました、感謝致します。

平成12年卒業 (高52回)



後列左より、高橋部長先生、松本、小澤、矢部、田中浩、梶田、椎名、影森、
柏木先生、横田監督
前列左より、太田、渡部、川中、森、長島、田中稔、櫻井

『血と骨』

高校52回は14名、横田監督8世代の6代目。実力・体力・精神力とも圧倒的だった諸先輩方から引き継いだ『川高野球部』というバトンは大きなプレッシャーだった。

皆でこの代を担ったあの一年、我々は確かに一生懸命だった。一生懸命にもがき、恐れ、戦った。試合の結果はどうであれ、部室の成人本とともに、その一生懸命さというバトンは下の代にも継承できたと思う。

具体的な話は同期諸君に筆を譲るが、あの当時の重く分厚い経験は、確かに私自身の血と骨になった。それは、社会人12年目の今も朽ちない武器である。

共通の血と骨を持つ同期とは、いまだに毎年一度酒を酌み交わす。当然ながら、毎回終電まで話は尽きない。

(主将、サード：森康隆)

『夏の記憶』

球児にとって特別な試合と言え

ば、「夏大」である。しかし私にはその最後の一戦の記憶がほとんどない。2年生の夏大直後、高3回谷大先輩に厳しくご指導いただいたことは鮮明に覚えているにも関わらずである…苦笑 公式戦0勝。我々は現役時代全く結果を残すことができなかった。ただそれがあったからこそ、同期14名はどの代よりも“今”を大事に結果を追い求めているに違いない。あの夏の悔しさが、我々を強くしてくれたと感謝。

(副主将、キャッチャー：川中真)

『失敗の果てに』

思えば野球部での三年間は苦難の連続であった。トンネルをして、しばらく試合に出させてもらえなかったこと。バントを失敗して、監督さんに鬼のように叱られたこと。「殺すぞ長島、バント下手」。人生ではじめて殺すと言われた。監督さんに。父さんにも言われたことなかったのに…。今私は生きていてよかったと思いながら教壇

【対戦成績】

【戦績】

22勝38敗6分

(公式戦)

秋季大会 川越2 - 4 川越初雁

春季大会 川越7 - 9 狭山清稜

選手権大会 川越4 - 8 深谷商業

(選手権大会 寸評)

1回・2回、制球や失策による7失点が最後まで重くのしかかった。4番として苦しみ続けた川中が本塁打を含めた3安打、スタメンの瀬戸際だった長島も二塁打を含む3安打の大活躍。

に立ち、小学生に生と死とバントの重要性について説いている。

(副主将、センター：長島理史)

『糧』

高校球児だった自民党の小泉進次郎氏があるイベントでいっていた。「もし高校時代に戻れるとしたらもう一度野球部に入る。今の自分の糧になっているから」と。私は現在、新聞社で政治記者をしている。政治家の理不尽な恫喝には、監督さんの「叱咤」を重ねることができし、寒風吹きすさぶ中の夜回りも、終わりの見えない蛙跳びのつらさには遠く及ばない。川高野球部で流した汗と涙がまさに糧となっているのだ。

(セカンド：小澤慶太)

『太もも60cm』

高校3年間は坂戸の実家からチャリ通したのが、俺の自転車乗りとしての原点だろう。最近地球温暖化で40℃の酷暑だが、夏練の伊佐沼ランニングで倒れて救急車で

運ばれた時を思い出したら、ロードバイクで200km走ろうが標高3000mの登坂だろうが極楽に感じてしまうのだ。カエル跳びで鍛えた大腿四頭筋とハムストリングが、今でも俺を支えている。

(レフト：影森信一郎)

『捨て目を利かせる』

川高野球部で培ったものの中で社会に出てから最も有用だったのがそれだ。先輩や監督、他部の顧問に至るまで、誰がどのような行動をし、こちらはどうか対応すれば良いか、先輩からの指導を受けながらも常に注意を払っていたように思う。私の代は、こと野球というスポーツに関しては捨て目が利かず成果を上げられなかったが、次代の後輩にもぜひ継承してもらいたい川高野球部の精神性だと考えている。

(レフト：梶田裕磨)

『克己心』

自分に打ち克つ心、「克己心」。私の名前の由来である。一方、野球部最恐練習「レベ」。当時の私は、少しでも楽をしようと、短い距離を選んだ。自分に打ち克てなかった私がいた。そんな自分を悔いた、恥ずかしかった。だが、社会人になった今、困難と分かりきっている選択肢でも、躊躇なく選択できる私がいる。あの悔いた経験が、私の根底にあるから。そして、今、あの悔しさが、私の未来を創っていく。

(セカンド：櫻井克)

『原点』

現在中学校野球部の顧問をしているが、やはり川高野球部が指導の原点となっている。進学校だか

ら練習はそこそこだろうと思っていたら大間違いであった。レベ、蛙、伊佐沼5、10。毎日が疲れや恐怖との戦いである。それでも高52回は深谷商業に敗れた。しかし、梅雨明けの蒸し暑い中、大応援の前でプレーできたのは一生の宝となった。結果が出ない悔しさと夏の嬉しさを感じたことが野球指導者を目指すきっかけとなった。

(ファースト：椎名広貴)

『ここだけの話』

共に白球を追いかけた仲間がいる。共にきつい練習を耐え抜いた仲間がいる。共に雨を願った仲間がいる。共に涙を流した仲間がいる。僕には、高校3年間共に甲子園を目指した仲間がいる。今ではなかなか集まれる機会は少なく、何か特別なことがあるわけでもないが、川高野球部で過ごした3年は僕の誇りだ。自分はこういうことを言うタイプではないので、ここだけの話。(笑)

(ショート：田中稔久)

『エンドレス』

意識が遠のく夏練、階段を降りられなくなるまで跳んだ冬練、そして不定期で訪れる理不尽、耐えた、ひたすら耐えた、時には手を抜きながら。得たものは、忍耐力。社会に出てようやくそのありがたみに気付く。しかし、仕事だけではなかった。絶え間無く訪れる嫁の理不尽。あの練習に比べれば…と思いたいが、上には上があることを改めて思い知った。

(ピッチャー：田中浩章)

『急がば正しく回れ』

かのイチロー選手が「遠回りこそ一番の近道」と何かの番組で仰

っていたが、この僕の高校時代の遠回りっぷりを見たら何と声をかけてくれるのだろうか。投手希望で入った僕(上投げ)は、いつしかアンダースローへと変貌、それから二度とマウンドに立つことは無かった。打撃(右)に至ってはいつの間にか左のバッターボックスに入っていた。「試行錯誤と迷走は紙一重」という教訓は今も僕の心にはっきりと刻まれている。

(ライト：矢部隆大)

『許せ友よ。』

事件は、夏練の最中に起きた。自分が投げたボールが桜井のグラブを弾き齒に直撃した。そして、彼の前歯は、確かに川高グラウンドに消えて行った。それから全員で辺りを探したが、見つからなかった。が、果たしてみんな、本気で探していたのだろうか。炎天下の中、このまま練習が終わればと願っていた自分がいたのは間違いない。許せ友よ。

(ピッチャー：松本幸彦)

『リフレン、リフレイン。』

レベ、カエル、1500走、伊佐沼。。。僕はいったい何部に所属していたのだろうか。エンドレスペーラン、近距離ノック。。。ああ、野球部だったか。幾多のリフレン(理不尽な練習)を乗り越え、僕は確かに逞しくなった。今は会社では中間管理職、上司と部下との板挟みで理不尽なことの連続だが、不思議とその状況を楽しんでいる自分がいることに気付く。そうだ、僕は川高野球部のおかげで不屈の闘魂を養えたんだ。

(ライト：渡部良一)

＜公式戦戦績＞

秋季大会西部地区予選

川越4-5埼玉

春季大会西部地区予選

川越 1 - 0 所沢北

(延長11回)

川越6-5狭山ヶ丘

(延長10回)

県大会 2 回戦

川越4-7春日部

全国高等学校野球選手権埼玉大会

川越 6-2 寄居

川越 3-1 開智

(延長12回)

川越 1-3 × 松山

(9回サヨナラ)

1 回戦 VS 寄居 熊谷公園球場

川越が左腕対決を制した。川越は三回、単打に犠打や盗塁を絡め、安田のスライズで先制。その後も高橋の適時打などで加点した。寄居は六回、敵失や湯山の中前打で2点を返すにとどまった。

(読売新聞)

2回戦 VS開智 大宮市営球場

川越は九回二死から死球の走者を須川が三塁打でかえして同点。十二回には無死満塁から紫村の左前打で勝ち越した。開智は北地が八回まで1安打に抑える好投を見せたが、最後に捕まった。

(読売新聞)

3回戦 VS松山 県営大宮球場

緊迫した投手戦に松山・渡辺がサヨナラ2点本塁打で決着をつけた。川越は五回、安田の適時打で先制。主戦・結城が粘り強い投球を続けたが、最後の一発に泣いた。

▽1 回戦	寄川	川越は三回一死三塁から安田のスクイズで先取点を挙げると、以後も効率よく加点。寄川は8安打を放ちながら打線がつかず、2点にとどまった。	
	居越		
00	00	打安点	① 湯浅 山本 4 4 1 0 0 0
00	01	② 越前 田中 4 4 1 0 0 0	
01	00	③ 越前 田中 4 4 1 0 0 0	
02	00	④ 越前 田中 4 4 1 0 0 0	
02	02	⑤ 越前 田中 4 4 1 0 0 0	
22	01	⑥ 越前 田中 4 4 1 0 0 0	
00	00	⑦ 越前 田中 4 4 1 0 0 0	
00	01	⑧ 越前 田中 4 4 1 0 0 0	
26	26	⑨ 越前 田中 4 4 1 0 0 0	

2000年 7月14日 埼玉新聞

[illegible]

2000年 7月16日 埼玉新聞

死。二塁打を打たれた。ベ
ンチから命令が走る。「直
球は狙われてる。カーブ
を使つていこ」

4 球目、遊歩選手は「突
投ではなかった」といふカ
ーブをすくいあげた。
「ナスビッティング」。

仲間たちが次々と声をかけ
た。結果投手の胸にしき
が込み上げてきた。突闘が
派脈に変わった。――

同点で迎えた九回裏――

追いつかれた。

満塁の二塁打、二塁打の行方を
見届けた川越の感激敬喜投

無念の終回

興器大宮球場の左翼スタ
ンドに打球が飛び込んだ。

松山、渡辺、黄、五選手のサヨ
ナララン。打球の行方を

好投エース

手がマウンドから本塁に降
りてきた。突を浮かべた
ような表情で。

「突闘。あの時は突
闘がなくて、何が何だか分か
りませんでした」

第 9 シーの六回裏を相手
に好投した。突闘を相手
打ち、8 番に二塁。たが、1
点リードの二回、二塁打で

2000年 7月21日 朝日新聞

三年間を振り返って

松高戦、9回表無死1塁の場面で恩師からのサインは「バント」でした。それを無視してのセカンドゴロゲッツー。その裏のサヨナラホームラン。今でもなぜ打ってしまったのだと思います。今でも横田先生をはじめ、仲間に対しては申し訳ないことをしています。私は川越高校や野球をなめていたのだと思います。

主将 須川 将憲

真夏のベースランニング、伊佐沼、レベ、かえる、1500m走、とんぼ振り、近距離ノック、冬のトレーニング、今でも弱気になりそうな時、仲間と過ごした川高グラウンドでの濃密な練習の記憶が、私を奮い立たせてくれています。

副主将 高橋 直弘

現在縁あり、川高野球部に帰ってきました。今でも叱咤激励できる仲間と最後まで野球をやらせてもらえた感謝と、自分のかけた多大な迷惑の分、後輩への指導でもって、川高野球部への恩返しとしようと思っています。

副主将 紫村 英敬

人生を振り返っても、指折りに濃密な時間でした。苦しみも楽しみも思い切り振り切れて極端で、だからこそ、仲間への信頼は無条件で、つまり、見事に青春でした。野球だけではなく、すべてが、自分の背骨になっています。

副主将 大河内 晋吾

土壇場の1球、明暗



2000年 7月16日 埼玉新聞

多くの後悔が残っています。あの時こうしておけば良かった、あんなことやっておけば良かった...しかし、その当時はその時できる最大の自分で当たっていました。それら全てが自分の財産です。

細谷 宗行

野球部で過ごした3年間は私にとってかけがえのない時間になりました。野球を通じ今でも心を許し合える友と出会うことができ、人生の厳しさをも学ぶことができました。川越高校野球部の一員であったことが今の自分の大きな誇りです。

齋藤 秀彦

夏の太陽、冬の北風。近距離、伊佐沼、合宿所、5分後、7エラー、人のせい、コーラ、10点、10匹、川女、セカンドサイピン、スクイズ、応援団、そして松高...キーワードと共に甦る若き日の記憶は我が人生の糧。

林田 雅人

「か」けがえのない仲間と過ごした3年間は、「わ」すれることのできない人生の財産です。「た」がいに高め合った川高野球部の精神は今も、「か」わずに胸に刻まれています。

高山 伸也

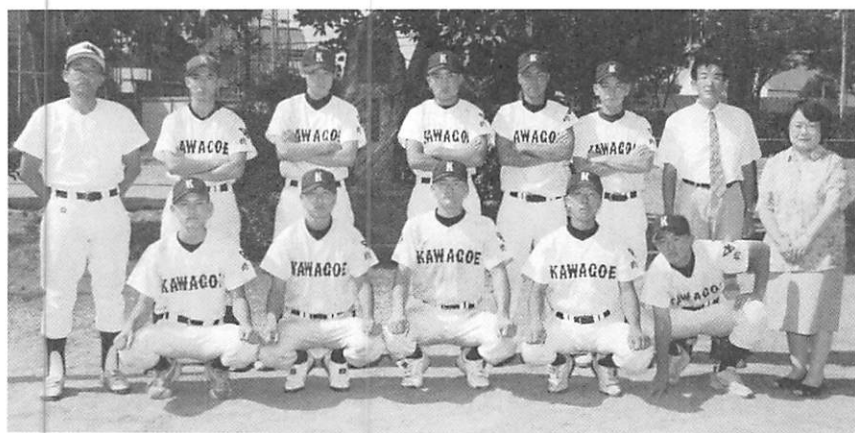
高校時代は苦しいとしか思わなかったが、高校野球をやりきったという自負が、その後の人生の辛い場面を乗り越える大きな力となっていることに後から気がついた。監督さんや部長先生、親、そして仲間感謝したい。

安田 日出海

素振りで皮が剥け大騒ぎ、ロクに練習してないのに足首捻挫を繰り返すという1年生でした。そんな私が背番号1を付けることになるとは私自身驚きです。その後の人生に多大な影響を及ぼした3年間でした。感謝です。

結城 敬晶

平成14年卒業 (高54回)



後列 船橋博俊監督・安藤有輝(投手)・戸田 将(外野手)・金子淳司(外野手)
松沢由樹(内野手)・小島秀臣(投手)・高沢 尚部長・柏木敬子先生
前列 兼子 弘(内野手)・馬場脩太郎(内野手)・遠藤 望(内野手)・森 一広(外野手)
会川慎悟(外野手)・

【第83回夏大会の戦評】

● 1 回戦

埼玉栄	1	0	1	1	3	8		14
川 越	0	0	0	0	0	0		0

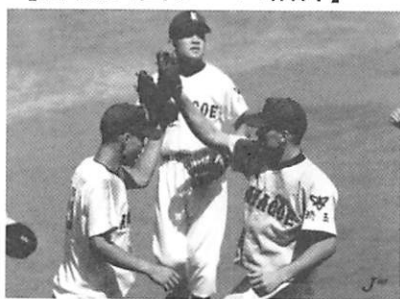


埼玉栄戦の6回、小島投手(左端)のもとに集まる三塁手松沢(中央)らナイン

その年にノーシードだった埼玉栄と1回戦で対戦。のちに立教大一三井生命で活躍する左腕の本田裕貴投手に翻弄(ほんろう)され、7番兼子がマルチを放つも単発3安打で0得点。

先発した小島投手も4回までは埼玉栄の強力打線を3点に抑えていたが、3巡目を迎えた5回に3点、6回に8点を奪われ、6回コールド負けとなった。

【高校54回チーム紹介】



埼玉栄戦でタッチをする三塁手松沢(左)と一塁手遠藤。中央奥は左翼手金子淳

中学時代に比企地区予選会を優勝し、県大会に出場した経験をもつエース・小島秀臣と、2年次から4番を務めた主将・遠藤望、ムードメーカーの副主将・馬場脩太郎を中心とした最終的には10人のメンバー。

2年次の夏大会終了後に横田雅之監督から船橋博俊監督へと体制が変わった1年目で、全体練習後に個人練習の時間を多くとる船橋監督のスタイルに移行するなど、過渡期の世代だった。新人戦では3回戦まで進む幸先の良いスター

【公式戦の記録】

★戦績 2勝6敗

●新人戦／西部大会

川越12-3狭山工(7回コールド)

川越6-0新座

川越2-11東農大三(7回コールド)

●秋季大会／西部地区

川越 1-3秀明

●秋季西部大会

川越1-9飯能(7回コールド)

●川越市内大会

川越2-9川越商(7回コールド)

●春季大会／西部地区

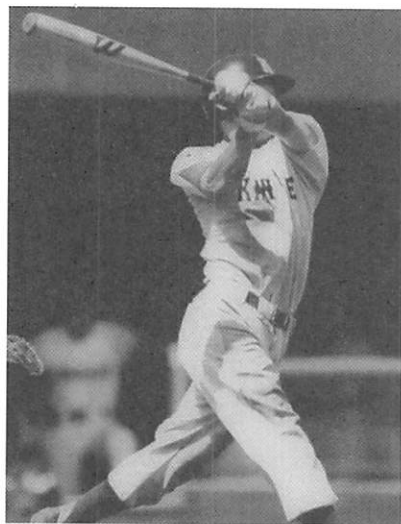
川越2-5所沢西

●第83回全国高校野球選手権

埼玉大会

川越0-14埼玉栄(6回コールド)

トを切ることができた。しかし、その後の公式戦ではすべて1回戦負け。練習試合と同じような勝負強さを発揮することができなかった。



埼玉栄戦の6回、左飛に倒れ最終打者となった遠藤。左奥は船橋監督

【3年間の振り返って】

投手 小島 秀臣

嵐山という小さな町から伝統ある川越高校野球部の一員として過ごした3年間は、厳しく辛い一方で、貴重な時間でした。大会ではピッチャーとして結果を残せず、朝から晩まで練習をしていたチームメートへの申し訳なさに責任を感じましたが、部室にあった先輩方のメッセージの一つに「努力した人が報われる訳ではないが、成功するものは努力している」という言葉に救われました。

仲間が皆努力していたことを認め合い、悔しさを共有したことで、一生の仲間ができた事に何の後悔もありませんでした。

※※※※※※※※※※※※※※※※

主将 一塁手 遠藤 望

2年次から4番で出場させて頂き、先輩方や同期に迷惑をかけながらも通算20本塁打できたことが、今でも心のよりどころです。そして3年次には主将を務め、皆と練習方法を試行錯誤した日々のすべてが自分の糧になっています。

ただ、通信社カメラマンの仕事に就き、野球の第一線取材していて実感するのは、私たちの知識の浅さです。現役当時タブー視されていた「1本足打法」は現在のスタンダードに。現役生は、常に最新の技術をウォッチしてほしいです。

※※※※※※※※※※※※※※※※

副主将 二塁手 馬場 脩太郎

2番セカンドに憧れて入部した一年の春。思い描いていた選手にはなれなかったけれど、最高の仲

間と過ごした3年間は、想像以上の財産になりました。結果がでなかったことは悔いがありますが、夢を追いかけていた日々は今までの人生で一番充実していたと思っています。

※※※※※※※※※※※※※※※※

三塁手 松沢 由樹

野球部での3年間、ほとんど勉強もせずに野球に打ち込んでいました。最後の夏の大会では、強豪校が相手とはいえ、一回戦敗退。今思えば、こうしておけばよかったと後悔することも多々ありますが、ストレス社会に打ち勝つ忍耐力を養うことができ、卒業から15年たった今でも繋がっている大切な仲間達にも出会えました。あの3年間がなければ今の私はありません。

※※※※※※※※※※※※※※※※

遊撃手 兼子 弘

川越高校野球部での3年間の振り返ったとき、結果だけをみると悔しい思い出しか残っていませんが、当時のメンバーと共に過ごした日々は非常に濃いものであったと思っています。自分の弱さと向き合い、仲間と叱咤激励を繰り返した日々は自分の糧となり「一步目!」「なりにやるな!」と言う言葉は今でも自分の中に染み付いています。

※※※※※※※※※※※※※※※※

左翼手 金子 淳司

東秩父という、今や埼玉唯一の村から片道1時間半かけて通った日々は、今でも昨日の事のように思い出します。当時はただただ辛いと思えなかった事も、振り返れば、そんな日々があったから

こそ今の自分があると思います。一生の友にも出会えたのは、野球のおかげです。

※※※※※※※※※※※※※※※※

中堅手 森 一広

日々、野球に一生懸命取り組むことのできる貴重な3年間で過ごさせて頂きました。監督さんより「無事之名馬」というご助言を頂いたにも関わらず、常に怪我に悩まされていたのが非常に心残りです。現役生の皆様には、一生の中でも特に“非日常”で特別なこの3年間、常に目的&目標を意識してエンジョイして頂けたらと思います。

※※※※※※※※※※※※※※※※

右翼手 戸村 将

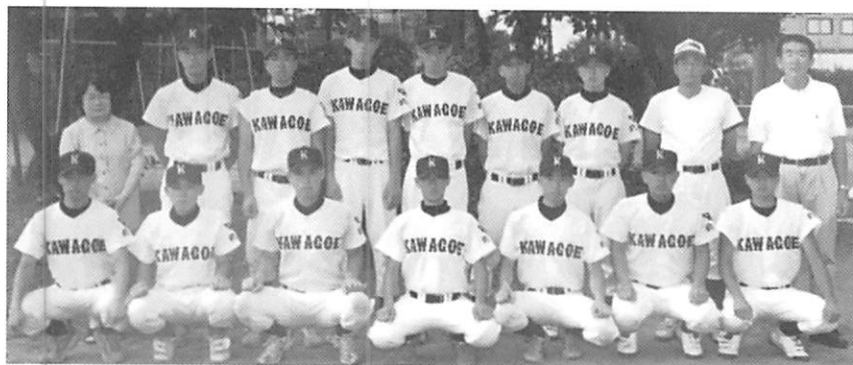
川高野球部の3年間で思い出すのは、自分の弱い姿ばかりです。同じ代の中で一番体力もなく、根性もなかった自分は、仲間にも迷惑をかけてばかりでした。でも、そんな中で少しだけ、弱い自分に勝つ心構えを学ぶことができました。その学びのおかげで、今があると思っています。当時の経験、そして時間を共にした仲間は、これからも大切にしていきたいと思っています。

※※※※※※※※※※※※※※※※

投手 安藤 有輝

当時は毎日の練習をこなすことが精一杯で、目標や目的から本当に大切なこと・必要なことを逆算して考えることができていませんでした。今こうして振り返る機会をいただいたことを、活かしていきたいです。ありがとうございます。

平成15年卒業 (高55回)



上段左から 柏木先生、鹿島、西山、飯島、松尾、増田、浅野、船橋先生、高沢先生

下段左から 平、宇津木、豊田、伊野、岡崎、森田、金子

【主な戦績】

◆新人戦 西部地区予選

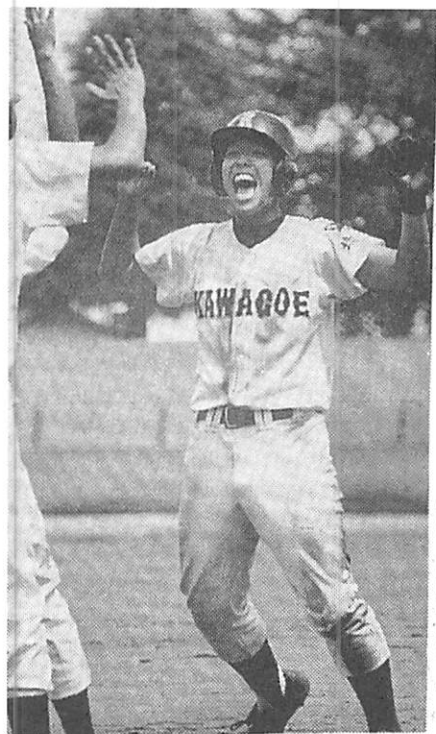
- 1 回戦 川越 9×- 8 立教新座
- 2 回戦 川越 1 - 5 武蔵越生

◆秋季大会 西部地区予選

- 1 回戦 川越 0 - 1 東京農大三

◆春季大会 西部地区予選

- 1 回戦 川越 7 - 1 埼玉平成
- 2 回戦 川越 1 - 3 川越西



14日の記録

不動岡―川越 6回裏川越1死二塁、森田が2打席連続本塁打で同点とし喜びの生還。川越初雁

***** 対不動岡3番森田の同点本塁打 *****
出典：埼玉新聞（2002年7月16日）8面

◆全国高校野球選手権 埼玉大会

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
不動岡	2	0	0	5	0	2	0	0	0	9
川 越	3	1	0	3	0	2	0	0	1	10

◇2回戦：不動岡の先頭打者本塁打で幕開け。両軍合わせて26安打の乱打戦となった。常にリードを許す苦しい展開も、主砲・森田の2打席連続本塁打7打点の活躍で接戦に持ち込む。最後は主将・伊野のサヨナラ安打で決着。初雁球場で迎えた初戦を大応援団の後押しを受け劇的な勝利で飾った。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
熊谷商	0	2	0	0	1	0	0	0	0	3
川 越	0	0	3	1	0	0	2	0	0	6

◇3回戦：この日も先制を許すも3回に先頭・岡崎の三塁打を皮切りに一挙逆転。その後も小刻みに得点を追加し終わってみれば2試合連続2ケタ安打となる11安打6得点で古豪・熊谷商を退けた。8奪三振2試合連続完投の主戦投手・飯島の快投が光った。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
浦和学	1	3	0	8	0					12
川 越	0	0	0	0	0					0

◇4回戦：シード校浦和学院に無安打無得点の完敗。この年浦学は県予選を失点1で制覇。甲子園でも選抜優勝の報徳学園を破る。主戦の須永は2巡目指名で日ハム入り。

【3年間の思い出】 ※50音順

◆浅野健児

川高野球部で過ごした3年間は、その時は、本当に辛い思いもした練習の毎日でしたが、暑い日の水の美味しさ、ごはんの美味しさ、試合で結果を出せた時の嬉しさ、夏の大会で勝った時の嬉しさなど、今でもとても良い思い出として記憶に残っています。

◆飯島崇敬

今思えば野球の事ばかり考えていた三年間。真夏の炎天下の中、初雁球場のアルプススタンドを埋め尽くす大歓声、そして仲間と共に勝利を掴んだあの光景は今でも鮮明に思い出されます。あの時の校歌と応援歌は今でも時に私を鼓舞してくれています。

◆伊野庸介（主将）

青春の全てを費やした川高野球部生活で得られた精神力、礼節、仲間達と過ごした全ての時間が今の自分を支える基礎であり、生涯の宝となっています。野球を通して努力する事の大切さ、仲間を信じる事の素晴らしさを学ばせて頂きました。

◆岡崎丈弘

高校時代は野球一色でした。苦しい練習や勝てなかった試合の悔しさや怪我をした時の後悔などつらい経験も多かったですが、初雁球場で大応援団と共に夏の大会で勝利したことでそれら全てが報われました。我らが川高野球部の益々の発展を祈念いたします。

◆鹿島雄介

私の高校生活の中心にはいつも野球がありました。川高野球部での辛く厳しい練習をやりきった経験は、その後の壁を乗り越えるための大きな自信となり、今でも私の人生の糧となっています。

◆金子浩明

高校3年間部活に没頭し、そこでの経験が人生の糧になっています。きっと全ての代の全ての部員それぞれが同じような想いだと思いますし、それが100年にわたり連綿と続いてきたことは本当に偉大で、自分がその中の一人であることを誇りに思います。川高野球部よ永遠に！

◆平定浩

高校の三年間は部活一色でした。今に繋がる経験をたくさん出来た場所です。何より一つのことに没頭する経験を出来たことは大きなことだったと思います。人間関係を築くことの難しさ大切さも学ばせて頂きました。

◆西山賢

今の自分があるのは、川越高校野球部のお陰と言っても過言ではありません。集中力、忍耐力、団結力、人生に必要な全てが詰まった三年間でした。百年もの伝統の一端を担えたことを嬉しく思います。

◆増田拓真

汗にまみれ、仲間と苦楽を共にした三年間。多感な高校時代に感じたこと、卒業後に時が経つにつれ見えてきたこと、その全てが私の人生の礎になっています。川高野球部の百周年という節目とそこに関わってきた全ての方々に、心からの敬意と感謝の意を表します。

◆森田俊郎

野球部で過ごした三年間は、今の自分の基礎を作ってくれました。何よりも、努力することや継続することの大切さ・難しさ・楽しさを学びました。今でも夏の暑い季節になると、あの頃の記憶が甦り、胸が熱くなります。

平成16年卒業 (高56回)



左から、伊藤、澤野、細田、市川、田中、岩渕、竹内、近松主、奈良、近松悠、飯田、長岡、天沼 (前列学ラン姿は応援部)

【高校56回】 (13名)

近松 悠紀	主将	捕手
近松 主基		投手
飯田 将茂		投手
竹内 一真		一塁手
岩渕 康樹		二塁手
田中 洋希		二塁手
長岡 和宏		三塁手
細田 和尊		三塁手
澤野 琢朗		遊撃手
天沼 海彦		外野手
市川 博久		外野手
伊藤 真悟		外野手
奈良 匡平		外野手

【主な戦績】

◎秋◎

県大会 2 回戦

◎春◎

県大会 2 回戦

◎夏◎

県大会 2 回戦

【詳細戦績】 (公式戦のみ)

◎秋◎

地区予選 1 回戦

○ 7 - 3 川越西

地区予選代表決定戦

○ 7 - 0 所沢

県大会 2 回戦

● 1 - 12 鷲宮

◎春◎

地区予選 1 回戦

○ 2 - 1 西武文理

地区予選代表決定戦

○ 5 - 0 川越初雁

県大会 1 回戦

○ 6 - 2 越谷南

県大会 2 回戦

● 0 - 4 松山

◎夏◎

県大会 1 回戦

○ 6 - 3 杉戸農業

県大会 2 回戦

● 0 - 4 本庄

#####

【入学／出会い】

#####

我々高校56回はごくごく平凡なチームだった。飛び抜けた選手はいなかった。全国的にも一つ下のダルビッシュ世代と比べて、スーパースターがいるわけではない。のちに「ダルビッシュの1個上世代」と呼ばれることになる我々の出会いは、平成13年の春だった。

県大会出場経験のある双子バッテリーの近松兄弟を中心に、それぞれの中学でエースを務めた竹内・飯田、4番を務めた伊藤・細田など、主力級の選手が集まった。

その中でもひと際異彩を放っていたのが、“アジャ”の異名を持つ細田だった。見た目はその名の通り有名女子プロレスラーを彷彿とさせる風貌だが、我々がそんな細田が見た目と対照的に繊細な心の持ち主であったことに気がつくのはもう少しあとになる

#####

【雨／筋トレ】

#####

川越高校野球部に入って最初のカルチャーショックは、雨の日の筋トレだった。体の出来上がった先輩方がまだヒョロヒョロの1年生を徹底的に追い込む伝統行事。あの頃は本当に雨の日が嫌だった。そんな折、細田がしごきに耐えきれず、過呼吸になる。過呼吸というものを生まれて初めて見た。人間は極限まで追い込まれると生体に異常をきたすということを教えてくれた。

#####

【夏の大会】

#####

初めての夏の大会。夏の大宮県営。相手は、当時埼玉のドクターKと呼ばれていた左腕本田を擁する埼玉栄。高校野球の残酷さを知る。

同じ日、川越市民会館では映画『ウォーターボーイズ』の川高生限定の試写会が催されていた。試写会には当然参加できなかったが、帰り道に平山綾と遭遇したことだけはよく覚えている。

【新チーム／夏の猛練習】

新チームになり、少しずつ試合に出られるようになった。初めての真夏の酷暑が我々を襲った。飯田が投内連携の練習中に倒れた。脱水症状で痙攣している人間を生まれて初めて見た。人間は極限まで追い込まれると生体に異常をきたすということを思い出させてくれた。

【後輩】

春になり、後輩ができた。元気のいい挨拶ができる素晴らしい後輩達だ。我々が先輩方に教えていただいたことをこの後輩たちにも教えてあげなくては。

【浦和学院】

2回目の夏。初戦は劇的なサヨナラ勝ち。次戦は熊谷商業との古豪対決を制し、勝つことの喜びを知る。しかし、次の相手はこの年の優勝校となる浦和学院。のちにプロへ進む須永を擁して、当時全国でも無類の強さを誇っていた。試合は5回参考のノーヒットノーランで敗北。次元の違いを見せつ

けられた。

【新チーム／改革】

最上級生になった。今でこそ当たり前となったが、練習試合用のユニフォームをオリジナルで作るなど、我々は、様々な改革を推し進めた。いいと思ったものは積極的に取り入れ、よくないと思ったものは我々の代で終わらせていった。我々の中で合理的な考えが醸成されていったのは、この頃かも知れない。

【秋の大会／初の県大会】

秋になり、意気込みとは裏腹にチーム状況は良くなかった。投手の頭数こそ豊富なものの、地区予選直前まで核となるエースが決まらなかった。そんな中、近松主基がチームを救う。大会前に肩肘を痛めていたため急造フォームでの投球を強いられたが、これが相手打者のタイミングを狂わせ、面白いようにアウトの山を築いていった。代表決定戦では所沢高校を完封し、高校56回としては入学以降初めての県大会へと導いた。だが残念ながら、県大会はほとんど記憶が無い。土砂降りの雨の中、シード校の鷺宮相手に気づいたら試合が終わっていた。

【川越市内大会】

川越市内大会では、奈良が投手として覚醒する。元々球速はあったが、この頃は夏の福島遠征で、習得した新しいフォームが形になりコントロールが安定した。準決

勝までチームを導いたが、その後肩を壊してしまい、奈良がマウンドに戻ってくることはなかった。

【春の大会】

春は飯田が覚醒する。自転車通学と冬の走り込みが功を奏して下半身がドッシリとした。練習試合では強豪・國學院栃木から金星を挙げるなど、チームの状態としてはかなり上向きだった。地区予選の初戦を痺れる展開でものにする和一気に県大会へと駆け上り、昭和56年以来の秋春連続出場を果たした。迎えた県大会の初戦でも投打が噛み合い、2回戦へと駒を進めた。好敵手・松山高校との対戦は、春にも関わらず全校応援で初雁球場が満員となる盛り上がりを見せたが、試合には惜しくも敗れた。

【夏の大会／引退】

夏は、守備陣が崩壊する。春先から理科棟の建て替えのため、校庭内に臨時のプレハブ校舎が建てられ、野球部の練習スペースは、内野と左翼の一部だけになってしまった。その影響もあったかどうかは分からないが、守備陣が崩壊し、あと一つ勝てばこの夏優勝することになる聖望学園との対戦だったが、それも叶わず我々の代は終焉を迎えた。

毎年、夏になると高校野球最後の試合を思い出す。当時は目の前に精一杯だったが、OBとなった今、川越高校で野球ができたことを幸せに思う。

平成17年卒業 (高57回)



写真左上から、鈴、松尾、増田、笠原、澤田
写真左下から、後藤、西尾、細野、小林

#####

【高校57回】

#####

◆野球部 (計9名)

西尾 祐人 主将 二塁手
増田 育真 捕手
松尾 智基 三塁手
小林 意広 投手
澤田 遼 一塁手
後藤 健太郎 遊撃手
笠原 慎也 中堅手
鈴 亮祐 右翼手
細野 真一 一塁手

◆応援部

団 長： 松本 健
副団長：大芝 健太郎
旗手長：秦 康之

#####

【主な戦績】

#####

◎秋◎

県大会1回戦

◎春◎

県大会1回戦

◎夏◎

県大会ベスト32

#####

【大会メンバー】

#####

12 川 越 ……川越市

〈校長〉菊 池 建 太
〈部長〉船 橋 博 俊
〈監督〉角 田 英 雄

1	投	小 林 意 広	3	東 松 山	177/70
2	捕	増 田 育 真	3	所 沢 中 央	175/70
3	一	澤 田 遼	3	所 沢 小 手 指	182/68
④	二	西 尾 祐 人	3	滑 川	171/60
5	三	松 尾 智 基	3	所 沢 安 松	175/62
6	遊	後 藤 健 太 郎	3	川 越 山 田	172/63
7	左	沢 田 悠 紀	2	川 越 福 原	180/80
8	中	笠 原 慎 也	3	東 松 山 南	175/65
9	右	鈴 亮 祐	3	所 沢 狭 山 ヶ 丘	174/60
10	補	細 野 真 一	3	川 越 福 原	170/65
11	〃	須 藤 誠 人	2	所 沢 上 山 口	172/60
12	〃	川 島 綾 子	2	東 松 山 白 山	176/65
13	〃	大 野 之 至	2	川 島	180/70
14	〃	落 合 拓 史	2	日 高 高 麗	163/57
15	〃	川 口 主 太	2	鶴 ヶ 島 藤	167/56
16	〃	小 野 寺 太 郎	2	所 沢 富 岡	170/67
17	〃	田 中 直 人	2	入 間 向 原	170/58
18	〃	押 田 淳	2	所 沢 三 ヶ 島	175/62
19	〃	村 田 馨	2	毛 呂 山	170/70
20	〃	関 根 将 信	1	所 沢 小 手 指	172/60

〈記録員〉山 田 賢 英

(出典:第86回全国高校野球選手権「真夏の球宴」)

◆高57回は小林・増田を中心とした守り主体のチーム。9人しか3年生がおらず、小柄で怪我等にも泣かされることが多かった代だったが、クジ運等もあり、秋・春の県大会出場と、夏のベスト32進出を果たすことができた。監督・先生はじめ、諸先輩方や後輩、同窓生や多くの仲間を支えてもらいながら、努力することの大切さや、生きるための強さを学んだ。

グラウンドから見える風景、土埃、

白球の感触、金属バットの音、部室、冬の空気の冷たさ、夏の日差し、つらいときを共に越えてきた、あの仲間の声。断片的だが確かな感触をもって思い出すあの時代こそが、我らの川高での輝かしい3年間である。

#####

【詳細戦績】

#####

8/3 対 春日部工業 ●1-9, ●2-13
8/8 対 福島西 ○19-0
8/9 対 安達 ○7-6
8/10 対 保原 ●2-9
8/18 (新人大会) 対 城西大川越 ○10-3
8/20 (新人大会) 対 坂戸 ○7-0
8/21 (新人大会) 対 市立川越 ●4-8
8/29 対 市立浦和 ●5-7, ●3-6
8/31 対 鴻巣 ○9-6, ●6-9
9/13 (秋季大会) 対 所沢 ○4-0
9/17 (秋季大会) 対 入間向陽 ○5-4
9/23 対 志木 ○4-3, ●6-8
9/28 (秋季県大会) 対 所沢商業 ●1-2×
10/11 (川越市大会) 対 川越南 ○11-5
11/1 (川越市大会) 対 川越総合 ○8-1
11/3 (市内大会) 対 川越東 ●2-4
11/19 対 安達 ○16-3, ○16-4
3/21 対 保原 ○9-6
3/21 対 川越初雁 ○6-1
3/27 対 福島西 ○9-1
3/28 対 新津工 ○6-2
3/29 対 福島 ●15-16
3/29 対 燕 ●10-11×
3/30 対 新潟西 ○6-5, ○10-2
4/2 対 福島東 ●10-11
4/11 (春季大会) 対 入間向陽 ○4-3
4/17 (春季大会) 対 川越南 ○15-2
4/27 (春季県大会) 対 浦和北 ●3-12
5/1 対 志木 ○14-4, ○7-6
5/8 対 習志野 ●4-14, ●0-3
5/9 対 島田 ●2-8
5/9 対 児玉 ○15-2
5/30 対 深谷商業 ●4-5×, ○6-1
6/6 対 坂戸西 4-4
6/6 対 安田学園 ●8-12
6/12 対 川越初雁 ○14-0
6/12 対 狭山清陵 ●2-5
6/19 対 所沢北 ●6-18, ●7-15
6/20 対 いずみ ○14-1, ○27-4
6/27 対 浦和西 ○4-1, ○13-1
7/4 対 川越初雁 ●4-6, ○28-4
7/12 (埼玉県大会) 対 越生 ○8-1
7/17 (埼玉県大会) 対 熊谷西 ○4-3
7/19 (埼玉県大会) 対 正智深谷 ●2-7

平成18年卒業 (高58回)



三列目左より 須藤・大野・澤田・川島
二列目左より 小野寺・田中・佐藤・押田・梶原
一列目左より 落合・山田・村田・川口・肥後

《成績》

新人戦

1 回戦 川越 6 - 2 市立川越
2 回戦 川越 2 - 12 所沢商

秋季地区予選

1 回戦 川越 11 - 13 所沢

春季地区予選

1 回戦 川越 8 - 4 狭山ヶ丘
2 回戦 川越 3 - 2 所沢商

春季県大会

2 回戦 川越 0 - 2 東農大三

夏季県大会

2 回戦 川越 4 - 3 慶應志木
3 回戦 川越 3 - 7 春日部

通算：33勝21敗

チーム打率：0.325

チーム防御率：3.70

秋季地区予選 1 回戦											
チーム	1	2	3	4	5	6	7	8	9		計
川 越	2	3	0	0	1	3	2	0	0		11
所 沢	1	0	0	1	4	0	4	3	×		13

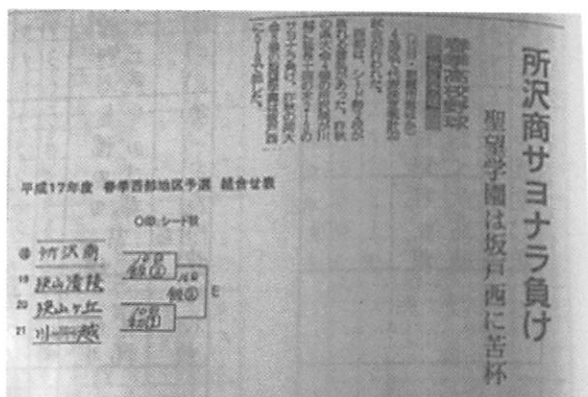
春季地区予選 2 回戦											
チーム	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計
所 沢 商	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	2
川 越	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	3

春季県大会 2 回戦											
チーム	1	2	3	4	5	6	7	8	9		計
東農大三	0	0	1	0	0	1	0	0	0		2
川 越	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0

夏季県大会 2 回戦											
チーム	1	2	3	4	5	6	7	8	9		計
川 越	0	0	1	0	0	0	3	0	0		4
慶應志木	0	0	0	1	0	1	0	1	0		3

夏季県大会 3 回戦											
チーム	1	2	3	4	5	6	7	8	9		計
春 日 部	0	1	0	0	0	0	6	0	0		7
川 越	0	1	0	1	0	0	1	0	0		3

春季地区予選 1 回戦											
チーム	1	2	3	4	5	6	7	8	9		計
狭山ヶ丘	0	0	1	0	0	3	0	0	0		4
川 越	0	2	0	0	4	1	0	1	×		8



(出典)平成17年4月17日 埼玉新聞

<夏季県大会戦評>

夏季県大会初戦の慶應志木高校戦は終盤までもつれる接戦となった。3回に先制するも4回に同点、6回に逆転される。7回にランナー2・3塁の場面に、村田のライト前ヒットで逆転。更に1点を追加し、4-3で接戦をものにした。2年生エース糸部が9回被安打7、3失点と好投した。

続く3回戦の相手は、Dシード春日部高校。6回まで2-1とリードするが、7回に好投を続けていた糸部がつかまり、3年生投手川島にスイッチするも、勢いを止める事ができず、この回6失点。大野、小野寺の2塁打を含む計12安打を放つが、残塁12の拙攻が悔やまれる敗戦となった。



外野手 落合拓史

高校野球3年間は、今思い返せばあっという間だったが、当時は毎日が戦いだったように記憶している。

1年の時はグラウンド整備やら球拾いやらで、肩が弱かったので、冬は重点的に鍛えた。2年の時に肩を脱臼してから全てが狂ってしまったが、そのおかげで大学以降は野球に未練を残すことなく、野球以外のことに打ち込むことが出来ている。今思えばこれも人生における最良の出来事かと思える。

外野手 押田淳

卒業してから十余年。今も草野球で汗を流す週末を過ごしているが、野球人生の中で一番の思い出は高校野球。文武両道といいつつ野球中心の生活で毎日遅くまで練習してたっけ。そんなチームメイトとの繋がり、生涯の宝物。

副主将 捕手 大野之至

入部時は大激戦区だったセカンド、(習志野で負傷退場しショートを経て)新チームではキャッチャーとなり、目の前に転がったゴロをセンターへ送球した飯能球場、心が荒んだサーキット&コの字、所沢商業を破った春のサヨナラサードゴロ、5の4でも帳消しできないほどの初回Pゴロゲッツで夏終戦。弁当じゃんけんは本当にごめんよ、村田。今も高校野球に携わっているのは、高校野球の魅力か、あの夏の後悔か。

外野手 川口主

川高野球部の特徴は、練習の厳格さにあると思う。これは代々OBから受け継がれた川高野球部の伝統だ。怠慢プレー、少しのミスでもあれば、容赦ない叱咤が四方八方から飛ぶ。この張り詰めた緊張感は強豪校でも中々味わえないと自負する。あまりの厳しさの為、雷雨により通常練習が中止になった時には嬉し泣きした事もあった。川高野球部において培った精神的な強さは今では私の最大の武器となっている。

内野手 澤田悠希

あれから十数年経つが、今でも野球部の日々を夢に見る。すぐに仮病がでる男、常に股関節が痛い男、打撃練習にのみ全力の男(俺だけ)など個性的な仲間と過ごした濃密な時間は忘れられるものではない。青春時代の大部分を過ごただけあって、今でも大切な仲間達だと思っている。現役部員達には、何よりも仲間を大事にしてほしいと伝えたい。野球部で過ごした日々は自分にとって大きな財産となった。みんな、どうもありがとう。

内野手 田中直人

川高野球部。それは私の人生にとって大きな影響を与えた3年間でした。厳しい上下関係、でもそれは社会に出た時に必要な事でした。また共に厳しい練習をした仲間達。一生の仲間となりました。今でもあの時の日々を思い出し、よく頑張ったなと話に花が咲きます。川高野球部に感謝。本当にありがとう。



投手・外野手 肥後盛輔

高校野球生活の中で強く印象に残っていることの1つに、監督先生が療養の為、自分達で練習を考えて行ったことがあります。今振り返ると「もっとこうできたな」というのは多々ありますが、当時は当時なりに試合に勝つため、上手くなるためにあししたかどうか、こうしたらどうか全力で考え、話し合ったことは貴重な体験でした。チームメンバーが言っていた、「意識だけでも全国レベル」は今でも大切にしています。

主将 外野手 村田啓

私達の代は、毎年監督が変わるという大変珍しい代だった。そのような、組織として安定しない環境の中で、自分達を律しながら高校野球生活を送ることが出来たことは、貴重な経験であり、人間として大きく成長する事ができた要因だったと思う。また、同期は正に十人十色。それぞれ強い個性を持った男達の集団であった。私は主将ではあったが、強いキャプテンシーがあるわけでもなく、プレーヤーとして飛び抜けた能力があるわけでもなかった為、そんな仲間にいじられ、励まされ、支えられた主将だったと思う。時に非協力的で、イラッとさせられる事もある同期だが、常に刺激を与えあいながら、これからも切磋琢磨していきたい。

平成19年卒業 (高59回)



3列目：左より
椿慎司、藤井祐輔、橋本秀哉、
糸部直毅、木村誠人、竹田勇太

2列目：左より
島田光史、後藤嵩人、大澤一樹、
高井英之、村松崇広、加藤貴志、
津久井広大

1列目：左より
石田直輝、斎藤拓、西尾卓馬、
関根将信、今井惇平、橋本拓也
19名

[秋季大会1回戦]

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
川 越	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2
市立川越	1	0	2	0	0	0	3	2	×	8

[春季大会1回戦]

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
所 沢 北	0	0	0	0	1	0	1	0	0	2
川 越	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

[7/8練習試合]

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
川 越	1	0	1	0	1	0	0	0	0	3
川越工業	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1

[全国高校野球選手権大会埼玉大会2回戦]

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
川 越	3	1	1	3	3					11
東 野	0	0	0	0	0					0

[全国高校野球選手権大会埼玉大会3回戦]

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
狭山経済	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
川 越	1	0	0	0	1	0	3	2	×	7

[全国高校野球選手権大会埼玉大会4回戦]

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
浦 和 実	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
川 越	2	0	0	0	0	0	0	1	×	3

[全国高校野球選手権大会埼玉大会5回戦]

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
東農大三	1	2	0	1	0	0	0	0	1	5
川 越	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

○川越高校野球部の謎

久しぶりに球場へ母校の野球応援に行った。そこで見かけた赤い大きいメガホン。通称ジャンメガ。あの紙の無駄…もとい、大量に使用する伝統工芸はまだ行われているのだとうれしく懐かしく思いながら、一体川越高校野球部の歴史の中でいつからやっているのだろうと疑問に思った。そんな中での百年史の執筆である。この謎が諸先輩方の記事内で解決することを願っている。

この中では主に夏の大会の話をする。

○最後の夏への入り方

この代では夏になるまで公式戦で一回も勝利できなかった。単純に悔しかったのを覚えている。

残った夏の大会では何としても勝ちたいという思いが強かった。

7月8日にベンチ入りできなかった同期の最終試合が行われ、勝利で終わったと同時に3年間の全

てを託された。高校生活を野球に捧げたことが報われる試合がしたい。7月16日、その想いを胸にした私たちの最後の夏が始まった。

○初勝利と雨

初戦、対東野戦で念願の公式戦初勝利をおさめた。この勢いで次戦にと思ったところで雨が降った。順延により、次戦に勝てば翌日試合という日程になったが、あの時は全員が連戦などは気にしないほどの精神状態でいられたと思う。続く対狭山経済戦、この夏の大会で初めてエース糸部が登板した。先発した関根も4回1失点と好投で、糸部もその後は無失点、終わってみれば7対1の快勝であった。この翌日、Dシード羽生第一高校に勝った浦和実業高校とのベスト16をかけた試合をむかえる。

○埼玉県ベスト16

7月23日対浦和実業戦で勝利し、川越高校野球部26年ぶりの夏の大会ベスト16入りを果たした。

始まりは1回の3番島田の先制タイムリー。初得点のホームを踏んだのは1番関根であり初回2点を取った。先制2点は大きかったが加えてこの試合、好守備が光った。ヒットなどでの先頭打者の出塁が多かったものの、バント処理を含めた好守備が多くその後の進塁、得点を許さなかった。8回に1点をヒットにより入れられるも後続をおさえ、続く9回も打者3人で、最後は三振により完璧におさえて勝利した。

26年ぶりの夏の大会ベスト16と

いう瞬間はとても素晴らしいものだった。甲子園出場ではないし、夏まで公式戦で勝つことはできなかった。しかし、この成績は人生の誇りであり今でも大切にしているものとなった。

○夏の終わり

最後はあっけなかった。

どこかで聞いた言葉を借りるなら、嘘のようなぼろ負けだった。終わって悲しかったが、やりきった気持ちの方が大きくどこか清々しかった。全員が同じ気持ちだったか分からない。しかし負けた翌日、翌々日には皆予備校探しを行っていたからきっとそうであったと思っている。こうして私たちの高校野球は終わった。

○第59代川越高校野球部

野球部の3年間は人生の糧・自信になっている。あの時間を共に過ごした第59代の皆にはこの歳になっても本当に感謝している。

今では同期全員で集まることはない。時間を合わせるのも難しい上に、高校野球部時代、苦しかったり、辛かったりしたから皆それぞれ考えることがあるだろう。しかし、この記事を懐かしんで、これを機にまた一度全員で集まれたらと考えてくれればうれしい。川越高校の試合がある時にでも良い。全員であの謎の赤い大きいメガホンでも見に行こう。



平成20年卒業 (高60回)



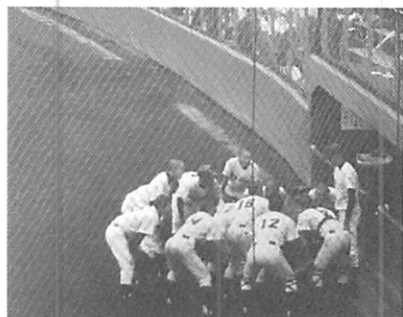
後列左より、大澤悟、伊藤慧、大村健祐、森谷友一、田中靖人、長谷川徹、
藤田遼、高瀬幸作、清水一英、嶋田俊也、森井明弘、吉野善行（監督）
前列左より、山本研二、萩原賢、森田将裕、出口雄大、吉武亮、長久保貴哉

【夏の大会】

▷ 1回戦 川越2－5大宮北

初回、大宮北の攻撃。1番小林をレフトフライに抑えた出口は2番川村にセンター前ヒットを許す。3番小林を2ストライク1ボールと追い込んで3球目、ランナースタート。空振り三振と同時に捕手森井は2塁に送球し、タッチアウト。初回のピンチを見事に抑えた。

1回裏、川越の攻撃。1番高石はセカンドゴロに倒れるものの、2番吉武が四球で出塁。そして3番森井のバントが更なるミスを誘い、走者は1、2塁となった。打席には四番大澤。4球目、大澤の打球は鋭くショートに飛んで行ったが、ショートはそれをキャッチ、そのままボールは二塁へ送球され、吉武が戻りきれずにダブルプレーとなる。



そして迎えた二回表。大宮北の攻撃。ここで試合が大きく動いた。4番打者から始まったこの回、渡辺の打球がエラーとなり、先頭打者の出塁を許してしまうと、5番佐藤のバントがヒットとなり、7番橋本のレフト前ヒットで走者満塁。絶体絶命のピンチを迎える。そして8番小森の初球、相手が選んだのは、なんとスクイズだった。目の前に転がった打球を、すかさず出口は森井へ。判定は、アウト。2アウトとなった。打者は9番関山。2ボールで迎えた3球目。関山の打った打球は無情にも左スタンドへ吸い込まれていった。

続く2回、3回と相手の二度のボークもありながら、1点ずつ、地道に点差を追い上げ、2点差まで詰め寄ったが、そこからの1点が遠かった。



【練習試合・公式戦の記録】

★戦績 97戦40勝46敗11分

A戦33勝24敗7分

・新人戦

川越10－0 鶴ヶ島

川越0－6 豊岡

・秋季大会

川越1－4 川越工

・市民大会

川越6－0 川越西

川越14－0 秀明

川越6－4 川越工

川越1－6 市立川越

・春季大会

川越2－1 川越南

川越5－9 大井

・夏の大会

川越2－5 大宮北

2－4のまま迎えた最終回、大宮北の攻撃。この日ホームランを放っている9番関山のヒットなどで追加の1点を許してしまう。1アウト満塁として、残りの打者を出口は2者連続三振で抑え、最小限の失点で表を終えた。

2－5として迎えた9回裏。この回最初の打席は大村。カウント1ストライク3ボールで5球目、大村の打った打球は右中間を切り裂いていった。長谷川の二ゴロの間に3塁に進塁した大村。続く高石が中フライに倒れ、2アウトで打者吉武。この試合無安打の吉武は内角攻めに苦しんでいた。内角のストレートだけに的を絞り、1ボールで迎えた2球目。内角ストレートを全力で振りぬいた打球は鋭く飛んでいった。しかし、その打球はセカンドの正面だった。この瞬間、川越高校の夏が終わった。



【高校3年間を振り返って】

なぜ野球をしているのだろう。

なぜ、打てないのだろうと自問し続けた野球人生。もう二度と戻りたくないと思う苦しい3年間であったが、いま社会人となり高校野球に感謝をしている。高校野球は、間違いなく人を育てるのだとあらためて実感させられるが、野球はプレーせずにビールを片手に観戦するのが一番いいのだ。

(大澤悟)

現役時代の古傷が痛む度に川高野球部で過ごした日々は今でもありありと思い出されます。とにかく野球漬けの毎日で授業中の居眠りでも見る夢は野球の事でした。伝統ある川高野球部の一員であったことは「自分」の誇りです。

(長久保貴哉)

夏の大会は、初戦で敗れたため、あまりにも早い引退を迎えました。引退してから今年で丁度10年が経ちましたが、夏を迎える度に、あの時の試合を思い出します。現役には、これまでのOBの想いも背負って、念願の甲子園出場を果たしてもらいたいです。

(大村健祐)

三年間で何回怒られたでしょうか。監督に名前を呼ばれたときはよく怒られていた気がします(笑)それでも、二年秋の大会後、監督から「よく打った」と一言もらえたときはとても嬉しかったです。苦い思い出もありましたが、今では大切な宝物となっています。

(長谷川徹)

川高野球部にいた3年間は夢でも常に野球だったので、夢の中の声出しの声が、声にならない寝言になって現れていたようです(母談)。伊佐沼、鉄トン、PJ、コーケンなど、同期たちと当時の話をすると本当に話が尽きません。

(田中靖人)

当時は毎日が大変な日々でした

が、同期をはじめ、吉野先生、船橋先生、先輩方、後輩とたくさんの方々の支えがあったから乗り越えられたのだと思います。仲間の大切さ、チームプレーの大切さを学ぶことができた3年間の経験は、私の一生の財産です。

(萩原賢)

高校時代の思い出=野球部での思い出、である私にとって、野球部に入っていなかったらどんな高校時代だったのか想像が付きません。それぐらいがむしろに仲間と共に一つのことに打ち込めた三年間は、今の私の人生における最も大きな財産です。

(藤田遼)

現在28歳。一見短いように思えるが、今振り返っても濃密な3年間だったように思う。毎日朝から晩まで野球の練習しかしていなかった。そこまでやる必要はほんとはあったのか?と思うこともしばしばである。それでも後悔など全くない。進んだ場所は違えど、仲間の活躍は励みになる。そして会えばすぐ昔の関係に戻る。すべてが良い思い出なのだ。僕達が目指した2007年大会から今年で10年。私立全盛の甲子園には、進学校もいくつか出場している。川高野球部もいつかあの舞台へ進んでほしい。いちOBとして応援している。(高瀬幸作)

野球部での3年間が私の糧になっています。何か壁にぶつかると当時の練習や試合を思い出し、前向きな気持ちにしてくれます。練習は厳しかったですが、だからこそ大切な同期とのつながりもでき、野球をしていて良かったと思います。(清水一英)

引退から10年、あの悔しさは今でも鮮明に覚えています。最後の夏に9回5失点と結果を残せなかったこと。ただ、あの経験があったからこそ今があると思います。しんどい時には、「野球部の練習

の方がキツかったら、頑張れ」「もう悔しい思いをしたくないだろ」と、自分に発破を掛けることができます。高校3年間は自分を強くしてくれました。

(出口雄大)

いろんなことを犠牲にしながらひたすら野球に打ち込んだ2年半。心が折れかけたこともありましたが、それも含めて今となってはいい思い出と言えるのは最後までやり抜き完全燃焼したからこそ。本当に充実した時間でした。

(森谷友一)

先代はベスト16、我々は初戦敗退、敗退を信じられぬまま勉強するしかなかった半年が思い出されます。今振り返るとその過程が今を形成していると感謝です。が、現役にはとにかく甲子園を目指し奮闘して欲しいです!

(森井明弘)

苦しい時に「あと一歩」と踏み出す。「負けてたまるか」と踏みとどまる。私の礎は、あの3年間の熱風さぶグランドで築かれました。今でも会えば、たちまち「あの日の部室」に戻る一生の仲間との出会いに感謝します。

(伊藤慧)

白球を追いかけ続けた3年間。地獄の雨中100本ダッシュなどつらいことも多々ありましたが、振り返ると人生で最も充実した日々でした。仲間達と本気で駆け抜けた青春時代は、大切でかけがえのない一生の思い出です。

(山本研二)

いつ思い出しても夏の初戦敗退は悔しいです。戻れるなら戻ってやり直したい、決して綺麗な思い出ではありません。もっとできることがあったのではないか。しかし、そんなに悔しい思いをできたのは、後にも先にも高校野球です。

(吉武亮)

平成21年卒業 (高61回)



後列左より 手塚、利根川、高石、宗川、吉原、島田、鈴木、羽田
前列左より 斎藤、坂口、牛坂、石川、稲井、諸井、三上

我々第61期は船橋部長、吉野監督、そして主将石川、副将高石・宗川をはじめとした個性豊かな15人のメンバーによって構成される。1年次には何十年ぶりという県大会ベスト16を経験し、その先輩方の背中を追いつつ日々練習に明け暮れた。最終的には3回戦敗退という悔しい結果に終わったが、波乱万丈の素晴らしい経験を共にできたかけがえのない3年間であった。

落ちこぼれの世代

「お前らが1コ下の後輩じゃなくてよかったって3年に言われてるぞ」と反省で叱られたのが印象的である。3年間で振り返れば、内輪の関係を優先するあまり、その場しのぎの優しさや「馴れ合い」、甘えが蔓延っていたようにも思わ

れる。お互いの為に嫌なことも指摘し合う、そんな自分達に対する厳しさが足りなかったと、悔やまれるかぎりである。

吉野先生とトレーニング

何を隠そう、吉野監督は就任1年目でチームを県大会ベスト16に導いた名将である。就任中には次々と新しいトレーニングを導入し、私たちを鍛えてくれた。

①ダッシュ 我々の代になった直後の夏休み、毎朝直前の試合の失点の数だけ50メートルのダッシュをさせることで勝利へのインセンティブを与えてくれた。気づけばいい試合をしてもなぜかダッシュの本数が減らなくなっていたのはいうまでもない。

②食事と筋肉トレーニング 食事

と筋肉トレーニングの重要性を教えてくださいましたのも吉野監督である。怪しげな栄養指導の会社と契約し、毎月「栄養強化食」なるサプリメントを購入、同時に筋肉トレーニングのトレーナーを招聘し体系的なトレーニング計画を作成することで強豪校に負けない体づくりを目指した。ベンチプレス〇〇kg以上上がらないとフリーバッティングに参加できないというハードルを設けるなどその姿勢には吉野監督の本気度がうかがえる。

一日米〇〇g(確か600g) 食べ、飲んでいいものは100%ジュース、牛乳、お茶、水のみ。朝は納豆など大豆たんぱくをどれだけ、野菜をどれだけ、動物性たんぱくをどれだけ、体重は身長-100kgを目指せ。。。その内容は非常に厳しいものであった。しかしこのころの部室には、暇ならおにぎりを食べ、野菜ジュースを持参し、必死に食らいつこうとしている仲間たちがいた。実はひそかに持ち込んでいた任天堂64のゲーム機も「これではいけない」と思った我々は反省し、撤去をした。1年次に見た「真剣でない自分達」はすこしずつ変わり、最後の夏に向け本気で野球に取り組み始めるきっかけともなったのである。春には、確かにガタイも大きく飛距離も見違えた我々がいた。

③**動体視力トレーニング** 一風変わった吉野監督のトレーニングが、この「動体視力トレ」である。冬場の練習中に代わる代わる抜け、合宿棟にあるPCで動体視力を鍛えるソフトを使用したトレーニングを行った。

効果があったのか正直なところ不明だが、伝統にとらわれず効果的でスマートな練習方法を試し、新たな風を吹き込むという吉野監督の姿勢がみてとれるトレーニングであった。

新人戦

○第一回戦

対城北埼玉：2 - 1

【概要】

第一回戦は、吉原のタイムリーなどで2点を取り、9回を島田が完投し、投手戦を制した。

○第二回戦

対狭山清陵：5 - 2

【概要】

第二回戦は、打線は稲井、坂口の猛打賞、羽田の三塁打等、チーム計14安打となり、島田、牛坂、小輪瀬の投手リレーで勝利した。

×第三回戦

対狭山ヶ丘：3 - 9

【概要】

第三回戦は、相手に先制され、差をつめられずに敗北した。

秋季大会

×第一回戦

対入間向陽：4 - 10

【概要】

打線は石川の二塁打、高石の三塁打があったが、相手の打線がこちらを上回り、敗北した。

春季大会

×第一回戦

対城北埼玉：1 - 2

【概要】

直前の練習試合では、2試合で2得点と不安が残る中で臨んだ試合。3回に先制点を挙げるも、終わってみれば4安打と城北埼玉の加藤投手を打ち崩せなかった。一方、川越の島田も9回を2失点に抑える好投。しかし、要所で踏ん張ることができず、惜しくも敗戦となった。

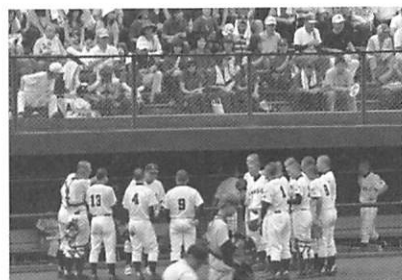
夏季大会

○第二回戦（7月11日）

対狭山工業：2 - 1

【概要】

川越初雁球場に全校応援が駆けつけた一戦。川越、狭山工業両エースの好投により、9回を終えて1 - 1。試合は延長戦となり迎えた12回表、三上のライト前ヒットで二塁にいた高石が一気にホームにかえり、川越が1点を勝ち越す。12回裏を守りきり、延長にもつれ込んだ死闘を川越が制した。2年生エースの石井は12回1失点、10奪三振の力投だった。試合後は選手、応援団一体で校歌を合唱する一幕も。



吉野監督を中心に円陣を組む

×第三回戦（7月16日）

対所沢：1 - 4

【概要】

初回、ミスも絡み所沢に2点を先制されてしまう。直後の攻撃で1点を返したが、試合は膠着状態に。そして迎えた6回表、所沢の先頭打者に出塁を許すと、細かなミスやエラーが重なり再び2点を追加されてしまう。川越は7、8、9回と毎回ランナーを出すのが、所沢の継投と守りに封じられ、1 - 4で試合終了を迎える。



伝令として場を和ませる手塚（背番号19）

結果として先輩方をを超えることはできなかった。しかし、毎日苦勞を共にした15人の絆と川高で過ごした3年間はかけがえのない宝物である。今でも校歌を空で歌えることに、誇りを感じずにはられない。（牛坂）

平成22年卒業 (高62回)



三列目左から 船橋先生、岡田先生、伊勢田陶朱、古谷野哲司、横田祐樹、平沼幹雄、橋本溪、新海理、吉野先生
二列目左から 小輪瀬泰、後藤啓人、矢部八千穂、上山晃平、小山祥佑、原賢二、山口友輔、市石航
一列目左から 鹿山博之、上田直樹、金田有希人、石井瑞樹、村松英高、垣見亮太、浜口博樹

石井主将の語る「私たちのチーム」

自分たちが川越高校野球部に入部した当時は、O澤さんというとても恐ろしい人が主将として君臨していた（他の先輩も相当に怖かったが）。入部初日にO澤さんより「5厘刈り」を命じられ、入部2日目にして3人が辞めた。練習はキツイし、先輩は怖いので、いつ辞めるかタイミングを探る毎日だった（自分だけかも）。とにかく、入部してはじめての3ヶ月はO澤さんが怖かったことと、伊佐ランが辛かったことくらいしか記憶にない。そんな中でも同期の上田が夏大会にスタメンで出場し、金田や新海がベンチ入りしているのをスタンドから見ながら、どこか悔しい思いで応援していたのを微かに覚えている。

3年生が夏大会で負け、代が変わると、2年生の先輩方は比較的フランクになったが、今度は顧問の吉野善行先生（通称：ヨシヨシ）が鬼のように怖くなった。もともと、ほとんど笑顔を見せる先生ではなかったが、代替わり直後は色付きの眼鏡を着用し、

とても話しかけられるような雰囲気ではなかった。当時の記憶として、夏休みの最後に松山高校との練習試合があり、前夜に試合で活躍する夢を見たが、翌朝それが夢だったことに絶望したのを今でも覚えている（もちろん、試合では敗戦投手となりヨシヨシには怒鳴られた）。結局、秋大会でも結果を残せず、冬を越え春になり、自分たちも2年生となった。1年生が入部してきてからは、市石と山口が彼らを厳しく指導してくれていたのを覚えている。春大会では島田さんの好投むなしく県大会出場を逃してしまった。夏大会では初戦にもかかわらず初雁球場で全校応援が行われ、延長12回の熱戦を制したが、2回戦で所沢高校に敗れてしまった。

そして、いよいよ自分たち高校62期が最高学年となった。いざ自分たちが最高学年になってみても、やはり夏休みの吉野先生は怖く、（上田や中里などのエリートを除き）ほぼ全員が少しのミスで怒鳴られまくった。そして、夏休みの最後に滑川総合高校

との練習試合があり、そこで四球を連発した自分に
対し「一生走ってろ！」と怒鳴られたことを覚えて
いる。

夏休みが終わり、新しい主将を決める時には事件
が起きた。1年生の時からずっと学年のリーダーを
務めていた橋本がそのまま主将になると全員思っ
ていたし、2年生の間での投票でも橋本が当確だっ
た（自分も橋本に投票した）。しかし、吉野先生が主
将に指名したのは自分だった。なにか考えがあつて
の判断だったと思うし、自己顕示欲の強い自分から
したら満更でもなかったが、同期の間で不満を漏ら
す声があったのも事実だった。

そんな不穏な空気の中でスタートした我が62期
だったが、副主将を務めてくれた橋本、金田、村松
の3人がチームをよくまとめてくれていたと思うし、
役職のない部員もさすがに川高生というだけあって、
責任感のある行動でチームに貢献してくれていたと
思う。ただ、今になって思うのは、自分も含め4人
とも、他人に優しすぎたのではないかということ。
主将や副主将であれば、本人のため、チームのため
を思って少し厳しく指摘すべきだったのではないか
と今では反省している。その点、O澤さんは嫌われ
ることを覚悟で、周りに対して厳しく指摘していた
ので、主将としては自分よりも適任だったように思
う（当時は滅茶苦茶怖かったが）。

練習面においても、練習量はかなり多かったが、
練習内容が「練習のための練習」になってしまっ
て手段が目的になってしまっていたように感じる。も
ちろん、そうでなかった部員もいると思うが、チー
ム全体として毎日の練習を惰性でこなしてしまい、
向上心が足りていなかった分、練習量の割に結果に
なかなか繋がらなかったのではないかと思います。結果
として、高校最後の夏は、1回戦こそ投手3人によ
るノーヒットノーランリレーで勝ったものの、2回
戦では三郷北高校に敗れてしまった。

ただ、敗戦後に多くの部員が涙を流していたのが
とても印象に残っている。方向性は少しズレていた
かもしれないが、みんな一生懸命に練習に励んでい
た証拠だったのだと思う。

(主将 石井瑞樹)

【公式戦の戦績】

平成20年	秋	地区大会	○9 - 6	城西川越
		県2回戦	●0 - 4	川口青陵
平成21年	春	地区大会	●1 - 4	川越東
平成21年	夏	県1回戦	○13 - 0	飯能
		県2回戦	●2 - 5	三郷北

1回戦=所沢球場 (7月11日)

川越		飯能		打安点		⑧		⑨		⑩		⑪		⑫		⑬		⑭		⑮		⑯		⑰		⑱		⑲		⑳		㉑		㉒		㉓		㉔		㉕		㉖		㉗		㉘		㉙		㉚		㉛		㉜		㉝		㉞		㉟		㊱		㊲		㊳		㊴		㊵		㊶		㊷		㊸		㊹		㊺		㊻		㊼		㊽		㊾		㊿		㋀		㋁		㋂		㋃		㋄		㋅		㋆		㋇		㋈		㋉		㋊		㋋		㋌		㋍		㋎		㋏		㋐		㋑		㋒		㋓		㋔		㋕		㋖		㋗		㋘		㋙		㋚		㋛		㋜		㋝		㋞		㋟		㋠		㋡		㋢		㋣		㋤		㋥		㋦		㋧		㋨		㋩		㋪		㋫		㋬		㋭		㋮		㋯		㋰		㋱		㋲		㋳		㋴		㋵		㋶		㋷		㋸		㋹		㋺		㋻		㋼		㋽		㋾		㋿		㌀		㌁		㌂		㌃		㌄		㌅		㌆		㌇		㌈		㌉		㌊		㌋		㌌		㌍		㌎		㌏		㌐		㌑		㌒		㌓		㌔		㌕		㌖		㌗		㌘		㌙		㌚		㌛		㌜		㌝		㌞		㌟		㌠		㌡		㌢		㌣		㌤		㌥		㌦		㌧		㌨		㌩		㌪		㌫		㌬		㌭		㌮		㌯		㌰		㌱		㌲		㌳		㌴		㌵		㌶		㌷		㌸		㌹		㌺		㌻		㌼		㌽		㌾		㌿		㍀		㍁		㍂		㍃		㍄		㍅		㍆		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎		㍇		㍈		㍉		㍊		㍋		㍌		㍍		㍎			
----	--	----	--	-----	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	--	--

平成23年卒業 (高63回)



▶写真後列左より
吉野先生・岡田先生
村田・饗場・菊地
石田・中里・早津
木場・帯津・下川
吉山・山本・松尾

▶写真前列左より
松村・町田・羽入
椎名・田口・本橋
佐藤

公式戦の記録

- ◇秋季県大会西部地区予選
一回戦：川越 4 - 5 埼玉平成
(延長12回)
- ◇春季県大会西部地区予選
一回戦：川越 2 - 3 坂戸西
(延長11回)
- ◇全国高校野球選手権県予選
一回戦：川越 1 - 2 本庄第一
(延長13回)

夏の大会

延長13回表1対1の同点で迎えた本庄第一の攻撃、二死満塁。初回から熱投を続けていた早津の投じたボールの行方に、熊谷球場が一瞬静まりかえった。

マスクを被る木場が送ったサイ

ンはスライダー。グラウンド・ベンチ・スタンドの全ての仲間の想いを乗せた一球は、無情にも相手打者の身体を襲い、同時に勝負の明暗を分けた。

攻撃では1番下川が期待に応えチャンスを作った。6回裏二死三塁、4番木場の打球は相手三塁手を強襲しスタンドを沸かせた。しかしその後のチャンスを活かすことが出来ず、早津を援護する事は出来なかった。本庄第一は川高戦の後も勝ち続け、甲子園への切符を手にした。

一年間を通じて「あと一步」の壁を突破できなかったのは非常に悔しい。しかし、だからこそ引退後も皆が自身の道に没頭できているのではないか。あの時足りなかったピースを埋めるのは、これからだ。

(中里真：内野手)



▲写真：エース番号を背負い、登板する準備をし続けた饗場(投手)。チームワークを買いた。

川高時代を振り返って

○木場大輔：捕手

高校時代は野球部の思い出しかありません。社会人になった今でも野球部で集まると当時の練習や試合の話で盛り上がります。指導していただいた先生方にも本当に感謝しています。夏大勝てなかったけど後悔はない高校野球でした!

○帯津貴洋：外野手

自分の思い出は3年の時の夏大。それが公式戦デビュー。守備を買われレフトへ。9回守って打球ゼ

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	R
本 庄 一	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	2
川 越	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1

口。その後交代した羽入にはすぐ打球。なんでやねん(笑)

○椎名瑞樹：投手
野球に打ち込んだ3年間だったと思います。苦しい練習も多くありましたが、今となっては良い思い出です。卒業後も同期とは交流があり、良い仲間に出会えることができたと思います。

○松村一秀：投手
川高野球部で得たものは3つ。
1.汚い部室でも気にしない精神力。
2.社会人になっても元気でいられるほどの体力。
3.今、笑いながら草野球ができる仲間。川高野球部永遠なれ！

○石田靖：内野手
数年振りに、球譜と学年通信の吉野先生の言葉を読み返し胸が熱くなった。充実していたが後悔も残る高校野球生活だった。その全てを忘れず、社会人として立派になって先生や同期と祝杯をあげたいものです。

○下川舟：外野手
当時は、毎日とても辛い思いをして練習していた記憶がありますが、今思い出してみると、楽しいことばかりで、野球部で過ごした3年間はとても大切な思い出です。

○町田有矢：外野手
高校野球3年間で得たものは沢山ありますが、1番の財産は仲間です。今でも酒を飲みながら野球部当時の話をします。共に真剣に

取り組み、戦っていたからだと思っています。これからもよろしく。

○本橋航：外野手
今になって振り返ると、大事な時期に限って肩や肘やら痛めて離脱する事が多かったので、人生一度しか無い機会に非常に勿体無いことをしたなと思います。

○早津寛史：投手
夏大は最後の死球を当てる瞬間を鮮明に覚えています。あの一球が人生のターニングポイントに間違いありません。同期にはわがままな投球や夏大会直前のケガなどで大変迷惑をかけました。が、私が大学まで野球をやれたのもあの3年間があったからです。ありがとうございました。これからもよろしく！

○菊地凜太郎：内野手
夏大は今でも夢に見るほどです。がむしゃらに練習し、臨んだ試合。人生で最高の時間でした。負けた時は悔しくてたまらない思い出でした。しかし、あの悔しさが糧となり、今の自分があると思います。

○饗場大：投手
なぜもっと頑張れなかったのか、過去の自分を責めたい。そんな想いもあり、長らく仲間の呼びかけに応えられなかった。だが、今あの部室を、あの校庭を思い出した。皆の顔が見たくなった。

○佐藤大樹：内野手
当時は辛い練習でしたが、それ

を乗り越えた経験が自分の力となっています。あのとき乗り越えられたのはいい仲間がいたからだと思っています。ありがとう。

○羽入拓真：外野手
野球部では、人生で最も充実した時間を過ごしました。周りの方々に支えられて野球に打ち込み、成長することが出来ました。仲間たちと酒を飲みながら尽きることのない思い出話を、これからも続けていきたいです。

○村田基樹：外野手
夏が来る度、とてつもなく遠かったあの1点を思い出します。チームの成果を最優先に考えることの大切さを学びました。組織の状況を見極め、送りバントもできればホームランも打てる。そんな選手を目指して社会人生活を送っていきたいと思います。

○田口裕：外野手
上手くはなかったのですが、仲間と白球を追いかけた日々は最高の思い出です。今後は中学校教員として、野球の楽しさを伝えていきたいです。川越高校野球部で最高の仲間と出会えたことに感謝しています。ありがとう。

○吉山裕利：捕手
仲間に恵まれた高校時代。苦しいことや辛いこと、仲間がいたから乗り越えられました。今となっては全てが楽しい思い出です。今後もし一生の友として笑い合いたいです。

平成24年卒業 (高64回)



3列目左より 岡田監督、宮本、富田、山下、柴崎、杉山、松木、福田
2列目左より 中内、上田、山田、中谷、大野、横田、佐久間、加島
1列目左より 大澤(兄弟)、手塚、市川、塚本、安済

公式戦の記録

- ①秋季県大会西部地区予選
一回戦：川越3 - 7 所沢商業
- ②春季県大会西部地区予選
一回戦：川越0 - 7 飯能南
- ③全国高校野球選手権県予選
一回戦：川越8 - 9 不動岡

夏の思い出

一回戦

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	計
不動岡	0	0	2	2	0	0	0	3	1	0	0	0	0	1	9
川越	4	0	0	0	3	0	0	1	0	0	0	0	0	0	8

2011年7月13日、絶好の野球日和。チームのモットーは『全力プレー』。攻守交代のダッシュから、一つ一つのプレーまで全力で行うこと、見ている人に感動を与えようという目標を立てて試合に臨んだゲームは、点を取っては、取られの接戦となった。

試合はこちらがリードしていたものの、粘り強い相手に我々は焦

っていた。8 - 7で勝利が目前に近づいた9回、タイムリーヒットで同点に追いつかれて延長戦へ。試合は停滞し、投手戦となった。福田と大澤の継投に胸を打たれた人は少なくないのではないだろうか。延長14回、1アウト、ランナー2・3塁で迎えた2番バッターに大澤のストレートは捉えられた。打球は高く上がり、レフトへの犠牲フライとなった。

この一点が決勝点となり、私達の夏は幕を閉じた。あと“一步”のところで悔しい思いをした。しかし、この思いは今、皆が自身の道を力強く歩んで行く大きな糧になっている。岡田先生には最後まで、勝利をプレゼントできなかったが、先生が練習中によく口にしていたように、最高の仲間とただひたすらに野球に打ち込んだ日々は紛れもなく、私たちの『一生の財産』となっている。

(山田憲史郎一内野手)



▲写真：追加点を入れた直後の湧き上がるベンチ。

皆の三年間

☆中谷和希一投手

三年間の高校野球生活で野球の技術面だけではなく、精神的な部分等様々な面で成長出来ました。

今でも同期と会った際には当時の話で盛り上がります。自分の大切な思い出です。

☆宮本将大一投手

思い返すと、川高野球部での日々は楽しいことばかりではありませんでした。しかし、それは人生の縮図であったかのように思えます。これからは辛く、苦しい時もあるかと思いますが、野球部での経験を思い出し邁進していこうと思います。

☆塚本康太一内野手

野球部のおかげで卒業後の辛いことも乗り越えられました。野球部でみんなと励ましあいながら辛い練習などをした経験は一生の宝となりました。

☆中内達也一内野手

仲間たちと野球に打ち込んだ3年間は、辛く、苦しいこともありましたが、それ以上に楽しいこともあり、かけがえのない思い出です。野球部で学んだこと、培ったものをこれからも大切にしていきたいと思っています。

☆加島慎也―捕手

高校時代は野球漬けの生活でした。あの頃のことはそれからの人生の大きな糧になっています。悔いが全くないと言うと嘘になりますが、それ以上にかげがえのない経験と仲間を得ました。

☆大野誠之―外野手

いかに辛くともあと一步、スピードはそのままに踏み出せる強さは、あの高校時代に得た私の大きな武器です。悔しい思い出だらけですが、同級生各位、この借りは長い人生の中で必ず返そうぜ。

☆柴崎正行―外野手

川高での3年間は野球、野球、野球そしてほんの少しだけ勉強でした。そこで得られた経験、友人達は財産だと思っています。苦(楽)を共にした友人達には感謝の気持ちでいっぱいです。

☆富田啓太郎―内野手

最も野球に打ち込んだ3年間でした。さまざまな思い出の中で、大会に負けたことは今でも覚えています。悔しいことの方が多かったですが、仲間や先生方には感謝の気持ちしかありません。川高時代に戻れるならホームランをもっと打ちたかったです。

☆松木拓弥―外野手

自分の14年間の野球人生の中で、一番濃くて思い出に残っているのが川高での野球です。野球だけではなく、その後の人生に生きること、最高の仲間たちなど、一生の宝物をたくさん得ました。この3年間で誇りにこれからも頑張っていきたいと思っています。

☆福田勇人―投手

高校野球を見る度に、自分の過去と重ねてしまいます。それだけ濃く、鮮明な思い出です。勝ちなかった…でもあのひとときをこの仲間で過ごせて本当によかった。泣き、笑い、ふざけあえる素敵な仲間に出会えたことに今、とても感謝しています。

☆手塚利幸―捕手

人生で一番野球に打ち込んだ3年間。自分の人間性はあの時に大きく成長したと思います。心を許せて、尊敬できる仲間。支えてくれた先生や親族の方々。色々な人と出会い、充実した時間を過ごしました。最後の試合では悔しい思いが残っていますが、あの経験も含めて私の宝物になっています。

☆佐久間龍之助―内野手

高校野球を通じて、最高の仲間ができました。今でも、皆で集まると当時の話で盛り上がります。高校野球において、後悔することもなくさんありますが、その思いを糧にこれからの人生を歩んでいきたいと思っています。

☆横田一樹―内野手

父と同じ高校で野球ができたこと、やらせて頂いたことにとても感謝しています。野球は一人ではできません。当時の仲間、愛のあるご指導をしてくださったOBの方々、両親への感謝を忘れず、高校野球の生活を今後の人生に活かしていきたいです。

☆山下翔―内野手

最高の仲間と野球に打ち込んだ3年間はいい思い出です。苦しい練習も多くありましたが、周りの仲間の支えがあったので乗り越え

ることができたと思います。ありがとう。

☆大澤健生―投手

今を振り返ると、野球のプレーや試合の思い出というよりも部室での出来事や練習後グラウンドで話していたこと等の仲間との思い出が大半を占めています。このメンバーで野球をやれたことはとても幸せなことだったのだと今さらながらに感じています。

☆市川智弘―内野手

川高野球部の2年半は苦しいことが多々ありましたが、顧問の先生、先輩後輩、同期に恵まれ過ごすことができました。今の自分の支えとなっています。

☆杉山慧―外野手

高校3年間の思い出と言ったらほぼ野球の事しかないぐらい野球漬けの日々でした。辛い事ばかりでしたが、素晴らしい仲間達のおかげでとても充実した3年間になりました。野球と仲間に感謝。ありがとう。

☆安済耕平―内野手

高校野球は、楽しかったこと、つらかったこといろいろありましたが、今思えばどれもいい思い出です。もっと多く試合に出たかったと後悔しているのが本音です…しかし仲間にも恵まれ、川高野球部で良かったと声を大にして言えます。

☆上田大貴―外野手

野球部での活動を通して、内面的な部分で大きく成長できたと思います。辛い練習にも諦めずに続けるタフな精神力・継続力・体力。野球を通して身につけたことは、大学で学業や研究に励む支えになっています。

平成25年卒業 (高65回)



3列目左より、柳沢先生・岡田先生・亀岡・永井・玉越・西村・後藤
2列目左より、松崎・三嶋・太田・金田・ショルツ・小川・斎藤・丸山先生
1列目左より、深津・半沢・大木・村松・西川・渡辺・荒田

主な試合結果

・秋季大会→初戦敗退

vs山村学園 2-4 ●

・春季大会→県大会初戦敗退
一回戦

vs 坂戸西 5-3 ○

逆転され迎えた8回裏、後藤の同点ホームランがとても印象的。

二回戦 vs 武蔵越生 4-3 ○

0-3で迎えた7回、微妙な判定（ほぼ誤審？）での失点によりめったに怒らない後藤の怒りの場外へ飛び込むホームランを皮切りに逆転。ちなみに後藤のホームラン時、玉越金田コンビ号泣。

・春季県大会

vs 春日部共栄 0-12 ●

初回到に8連打を浴び一方的な試合展開に。完敗。

・第94回選手権大会→初戦敗退

vs 独協埼玉 6-13 ●

（8回コールド）

春に続く後藤のレフトへの逆方向による2ランで勝ったかと思いきや、相手チームの強力打線により、あえなく8回コールド。涙流すものは少なかった。

部員コメント↓

・斎藤「授業中に雨が降ってきた時の胸の高鳴りが忘れられない。その日の練習メニューがメールで送られてきて、見るときのドキドキが忘れられない。そのころの夢を見ると、怒られている夢なので、多分たくさん怒られたのだと思うが、もう忘れてしまった。」

・深津（投手）「高校から下投げに変えていろいろ試したりして最終的にそこそこ投げられるようになったのはいい思い出かな。それにこのチームで県大会出られたのも嬉しかったね。今振り返ると笑

えるけど当時はミスが多くて悩んでたな。忘れものとか遅刻とか。何回か試合で白ソックスの上に履くやつ忘れて紺のカラーソックス切って履いて試合出たことがあるような。。。」

・三嶋「自分は3年間野球部で練習やトレーニングをし続けたことが印象に残っています。グラウンド整備から練習のあとにインターバル走や筋力トレーニングなどを行い、その後に自主練でバットを振る一日の流れはとてもきつかったのですが、その3年間の経験が今の自分の原点であり、努力する糧になっています。」

・玉越「まさか夏大コールド負けするとは思いませんでした。2回くらい勝ちたかった。でもなんやかんやあって3年生みんなベンチは入れて一緒にできたのでいい思い出になりました。ありがとうございます。」

・西川「自分たちの代で一番印象に残ってるのは夜のタイヤ押しかな。最初、村松がレギュラーだけで始めてイラッとして意地になってやってた。でももう二度とやらないんだろうなと思うといい思い出です！」

・西村「振り返ると人間力という

言葉を思い出す。ゴミ拾いや野球ノートを書いたことを覚えている。社会人になった今、人間力は気づきの力だと考えるようになった。お世話になった人たちに感謝したい。」

・後藤「練習が伝わったのを覚えています。特に全体練が終わって夜遅くにタイヤ押しをしたのが辛かった。あと大会前の追い込みも辛かった。いい思い出としては最後の試合でホームランを打ったことです。」

・小川「得られたものは大きいかなと。心技体の考え方は野球以外の面でもだなと感じています。何よりも大きいのは頼もしい同期に巡り合えたことです。大人になってもいい付き合いができるといいですね。」

・松崎「京都遠征試合から春県大会まで連勝の波に乗り、野球に楽しんで取り組むことができていました。捕手であった自分が野球を楽しむことが、ナイン全体に波及している実感さえありました。県大会初戦の春日部共栄戦では、諦めたら試合終了は野球には通用しないことを痛感しました。」

・渡辺「練習で一番好きだったのは、プレートを使ったトレーニングで、嫌いだったのは300×10本のトレーニングだ。野球のセンスはなかった。ああ、ボディビル部

入ればよかったな。」

・永井「俺のせいで負けたあと、冷たい視線の中千本ノック。おなしあす！おなしやああす！・・・おなじやああああああす！・・・

立て！！しょうたちゃあん！！←（S先生）おなしやああす！！

・・・・・・もうむりでええず、、。

この状況でよくもう無理です言えたな俺。ある意味メンタル強いんじゃないか。」

・金田「外野ノック。おねがいしまああつすっ！ カキーーーーン！！ ヒューー タッタッタッタッタッ ズサアアア！！（手首ポキッ） ウウ……。 金田あああ、どけえー！！邪魔だあ！

金田そういうのいらねえぞ！！
・・・・・・
これ以降嘘をつくのをやめました。」

・シヨルツ「思い出といえばボール回しですね。それ以外はないようなもんです。5周を30秒切るまでボール回してこれがまー切れない。長時間全力投球→怪我人増→一人当たりの負担…略。という魔のサイクルにより大半が怪我人っていう誰得企画でした。アホみたいにボールを回す部員たちに感情移入して、多少遅くてもクリアにしていたことは今では時効ですかね。」

・荒田「学園祭。野球部は練習していた。近くではウォーターボー

イズ。その列に並ぶ女子高生たち。僕らは目立ちたかった。ここにいるぞ！見てくれ！目の前を大きく響く声で集団走したのはいい思い出です。」

・太田「初めての関西遠征もあり、連戦連勝でチームとしても、個人としても冬のきついトレーニングの成果を実感していて、春での公式戦初勝利の瞬間をグラウンドの上で体感できなくて残念でした。」

・亀岡「秋、公式戦では永井のピンチの時でも使ってもらえず歯がゆい思いをしました。冬になって自分を救ってくださったのはOBの野口さんと、先生方でした。春はたくさんの支えを実感できた大会でした。」

・半沢「2人えっち、部活後のサッカー、お土産勝手に食べて絶交伝えられたこと。楽しかった。ありがとう。今僕は朝4時に会社に行って夜9時に帰る生活をしています。絶交を伝えられることがこんなにも幸せなことなのかと今になって思います。もう一度絶交宣言をください。」

・村松「菓子食ってケンカ、先生の話の句読点数えるなどもっと野球に集中するべきでした。」

平成26年卒業 (高66回)



後列左より
船橋先生、倉繁先生、
岡田先生、山本、大谷木、
丸山先生

前列左より
石井、熊谷、瀬尾、
大野(哲)、大野(勇)

【各大会の流れ】

○平成24年度西部地区新人戦

- ・ 1 回戦
vs日高 17-0 ○
(5 回コールド)
初回からの大量得点により圧勝。
- ・ 2 回戦
vs狭山ヶ丘 0-10 ●
強豪相手に奮戦叶わず敗退。

○平成24年度秋季西部地区予選

- ・ 1 回戦
vs秀明 9-2 ○
(7 回コールド)
3 回を除き継続的に得点し圧勝した。
- ・ 地区代表決定戦
vs川越工 3-4 × ●
(延長11回)
終盤1点差でリードするも9回に同点にされてしまい、延長11回にサヨナラ負けを喫した。

○平成25年度春季西部地区予選

- ・ 1 回戦

vs川越総合 8-1 ○

(7 回コールド)

試合序盤に得点を挙げられず、逆に4回表相手に1点を先制される。ここで打線が奮起。5回裏に一挙7点で逆転し、試合を決めた。

・ 地区代表決定戦

vs狭山ヶ丘 9-10 ●

1 回に8点先制され、昨年の新人戦での同校との試合が脳裏をよぎる。しかし、その後反撃を開始し、あと1点まで強豪を追い詰めるも及ばず敗退。秋、春共に1点に泣き、あと1歩のところで県大会出場を逃す結果となってしまった。

○第95回全国高等学校野球選手権埼玉大会

- ・ 2 回戦 vs朝霞西 5×-4 ○
初雁球場にて全校応援で迎えた初戦。序盤3回表に相手の本塁打で3点先制を許す。しかしその直後の3回裏、先頭の9番金子、1番瀬尾の連続2塁打で1点を返し、

さらに打線がつながりこの回3点。試合を振り出しに戻す。その後は中小路の好投や大谷木の好守備などで相手の攻撃をかわし、両者譲らぬ展開で迎えた9回表。1死3塁から相手の中前適時打で勝ち越しを許してしまう。後がない川高、9番金子の出塁から敵失も重なり、1死2、3塁のチャンスを作る。迎えた4番大谷木の走者一掃の中前適時打により川高が逆転サヨナラ勝ちを取めた。

・ 3 回戦

vs埼玉平成 3-6 ●

序盤に相手に先制されるも、3回に4番大谷木の左前適時打で同点に追いつく。その後1死1、3塁でスクイズを仕掛けるが失敗。その後、相手の好投手相手に追加点を挙げられない川高打線。6回には無死1塁で大谷木の遊直で併殺など不運が続いた。結局、最後まで試合の主導権を握れぬまま試合終了。3回戦敗退が決定した。

(丹羽良平)

●川越 3 4 の九回
裏を捕る。長谷木太夫
が野手の間を捕る。中
とことない。川越は球
が中前にあつた。2 着が
還ると、ベツチからナ
イが飛び出した。川越
が年季の初め、
「驚動らういふ」だつ
たと岡田監督は祈願し
た。三回に 3 点を取り合つ
たは、三回に 3 点。川越は
五、六、八回、本塁に
走者を置いた。後、球が
手へ倒れ、野手が、八回は
回つて、三塁と本塁を
はる。エースの成績を好
し、一瞬間に「関係なし」
ナインの執念、ひたむき
つかりと球を捕る。
つとめと。
その癖には理由があ
る。西部隊は過去で昨
川越工に九回、同点で
延長八、四回。一、春
は一回に 8 点を許し、球
が丘に、10 点で敗戦。
1 点に泣いた。2 度の敗
戦から一球、一打、初回
に、一と符あつた。
選手間の重要事項とし

「埼玉新聞」
平成25年7月13日

・瀬尾 祐志 (主将 内野手)

何が言いたいかというと、自ら必要性をもって主体的にやることの大切さ。PDCAの考え方の基礎を高校時代に学び活かすことができた。

・熊谷 敬太 (副将 外野手)

自分がダルビッシュに勝とうと
思ったら人間力しかないと、岡田

・石井 康平 (副将 内野手)

・大谷木 達也 (内野手)

かけることもありましたが、私はこの仲間野球をすることができて本当に良かったです。またみんなで野球したいな。

・大野 哲之 (外野手)

野球部時代はとにかく自らの無力さに嘆く日々だった。キャッチボールなど基礎的な技術から改善する必要がある、他の人よりも随分遠回りをしてきたと思う。それでも、岡田先生や丸山先生が熱心に指導してくださったおかげで最後の夏に代打として出場するチャンスを得ることができた。結局最後の夏に結果を残すことはできなかったけれど、必死になって努力したことは正しかったんだと心の底から思えた。大学ではラクロスという違う競技をしているが、根底にあるものは川高野球部の時とは変わらない。「できるようになるために自分から情報を集め、組み立てて実践していく。」考えることの重要性を学んだ3年間だった。

・大野 勇次（内野手）

高校生の自分へ
とりあえずスラムダンクを読んで
おけ。そうすれば少しはミーテ
ィングが楽しくなるぞ。野球ノー
トは1週間分まとめて書くより毎
日書いた方がたぶん楽だぞ。体重
は5kgくらい盛ってるけどばれな
いから心配すんな。

・山本 公輝 (外野手)

途中野球と向き合わない時期もあったが、チームの仲間の存在もあり、最終的には川高野球部で過ごせたことを誇りに思っている。

(文責 大野哲之)

平成27年卒業 (高67回)



後列左より 吉田圭介・二村 海・田中裕貴・松山哲之・中小路渉・井田拓成
矢嶋 巧・藤掛貴博・岡安晃陽・志保颯一郎・塩澤拓斗
前列左より 標祥太郎・中泉裕貴・小倉秀亮・大野拓真・金子 太・本橋樹生
加藤拓史

【最後の夏】

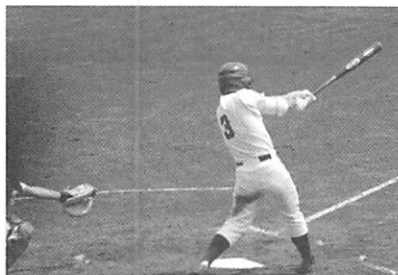
初回、塩澤のヒットを
きっかけに石田、大野、
矢嶋と後続が続き、一挙に5得点。投げては中小路
が初回にピンチを招くも0点に抑え、その後は完璧
なピッチング。

打線も2回、4
回に得点を重ね、
10対0、5回コー
ルドで勝利した。



1回、打線爆発のきっかけを作る塩澤
の一打

2回戦、打線が爆発し、
先発全員安打に20得点、相
手にヒットも許さなかった。我らが主将、大野は
この夏の埼玉大
会2人しか成し
遂げていない満
塁ホームランを
放った。



4回、大野の満塁打

【公式戦の記録】

- ・新人戦
川越2-3 聖望学園 (延長11回)
- ・秋季大会
川越2-1 ふじみ野 (延長11回)
川越2-4 西武文理
- ・川越市内大会
川越1-6 川越東
- ・春季大会
川越1-7 山村学園
- ・夏季大会
川越10-0 進修館
川越20-0 日高
川越2-8 蕨

3回戦、初回、
相手の機動力に
より本盗を2回決められて2失点。4回にも連打を
浴び、更に4失点。打線は大野と矢嶋の連打を放つ
も、後続が続か
ず、2-8で敗
北した。

蕨	200401001	8
川 越	000020000	2



エース 中小路の力投

川 越

①中小路 渉	3	熊 谷 荒	川 田	▽部長 監督
②矢嶋 巧	3	川 越 野	見 田	▽部長 岡田
③大野 拓真	3	1 越 富	二 能	▽部長 明
④塩澤 拓斗	3	和 光	成 実	▽部長 治
⑤田中 裕貴	3	1 越 富	成 実	▽部長 年
⑥清水 翔平	2	富 士 見	成 実	▽部長 成
⑦石田 大樹	2	所 沢 小	成 実	▽部長 成
⑧金子 太	3	上 尾 上	成 実	▽部長 成
⑨中泉 裕貴	3	毛 呂 山	成 実	▽部長 成
⑩河本 優佑	2	所 沢 野	成 実	▽部長 成
⑪井上 陽介	2	入 間 野	成 実	▽部長 成
⑫佐々木 啓人	2	所 沢 東	成 実	▽部長 成
⑬藤原 諒	2	所 沢 東	成 実	▽部長 成
⑭小倉 秀亮	3	富 士 見	成 実	▽部長 成
⑮柳沢 大輔	1	和 光 大	成 実	▽部長 成
⑯藤掛 貴博	3	富 士 見	成 実	▽部長 成
⑰市石 宙	2	と き け つ	成 実	▽部長 成
⑱木越 健太	2	ざ い た ま	成 実	▽部長 成
⑲岡安 晃陽	3	所 沢 山	成 実	▽部長 成
⑳標 祥太郎	3	和 光	成 実	▽部長 成

埼玉新聞社 高校野球グラフ2014より

3年間を振り返って

私自身、小学校から野球をやってきましたが、主将としてチームを引っ張っていく立場にたつのは初めてで、最初は戸惑いや不安、大変なこともありました。今考えるとその経験が今の自分へと大きく成長させてくれた糧になったと思います。私たちの代は明らかに先輩や後輩と比べると力が弱かったと思います。しかし「練習量ではなかなか他の強豪には勝てないから、頭を使った野球、足を使った野球で勝つ。」ということを経験を自分たちで目標に掲げ、一人ひとりが真剣に取り組み、時にはぶつかりました。その取り組み方は他の代、チームよりも勝っていると思われ、自信をもって思います。結果としてはあまりいい成績は残せませんでしたが、この3年間とともに戦った仲間は自分にとってかけがえのないものです。

主将 一塁手 大野 拓真

夜遅くまでひたすら全力で練習していたことを今でもよく思い出します。当時は何も感じなかったのですが、今思うと素晴らしい時間でした。1つの目標にみんなで向かっていくというのは大人になったら味わえないことだと思います。仲間とともに支えあい、過ごした日々はかけがえのないものとなりました。

副主将 中堅手 金子 太

川高野球部での3年間を振り返ってみると、とても濃くて充実し

た毎日だったと思います。そしてその日々は常に仲間たちとありました。練習後、部室で過ごす何気ない日常が最初に思い出されます。2年時の夏大で全校応援の中、サヨナラ勝ちした経験は、大学で私がスポーツをやる原動力となっています。川高野球部で得た仲間、そして貴重な経験は私という人間の大部分を作りました。

投手 中小路 渉

伝統のある川越高校の野球部で過ごした日々は今日も私のかけがえのない宝物となっています。そして、これからの人生でも大きな財産として心に残るでしょう。私が所属していた時の監督であった岡田先生をはじめ、意識も志も高い仲間には本当に感謝しています。これからの野球部の発展、そして活躍を心から願っています。

副主将 小倉 秀亮

わたしはチームに捕手がいないため1年の秋から試合に出させてもらっていましたが、当時のわたしは野球の知識がなく試合をして怒られていた記憶があります。そのことでチームの足を引っ張り一時は野球をやるのが嫌になっていたときがありました。しかし多くの人からアドバイスをいただき、きっかけをつかんで変わることができました。最後の1年間は野球を楽しんでプレーできたのはサポートしてくださった周りの方々のおかげだと思います。感謝の気持ちでいっぱいです。

捕手 矢嶋 巧

高校3年間を振り返ると、第一に思い浮かぶのが野球部です。むしろ、ほとんどの高校生活が野球部だと思います。日々厳しい練習の中で嫌だなぁと思うときもありましたが、それを乗り越えられたのはともに頑張る仲間がいたからだだと思います。最高の思い出を作れた最高の仲間たちに出会えてよかったです。

二塁手 塩澤 拓斗

3年間高校野球をやってきて、苦しい事のほうが多かった気がします。それでも、この仲間たちと最後まで野球ができ、同じ時間を過ごし、たくさんの思い出を共有できたことが何よりもうれしいです。もっと長くみんなと野球がしたかったです。

三塁手 田中 裕貴

サイン解説や三塁コーチとしてひたすら「頭を使う野球」を追求した野球部生活でした。自分の役割に自信が持てず、実際にどれだけの力になったかわかりませんでした。しかし、仲間から「この代には標が必要だ」と言われたとき、自分のやってきたことが仲間の一助になれるんだ、と心が震えたことを今でも明瞭に思い出せます。素晴らしい仲間と出会えた川高野球部での日々は人生の宝です。

標 祥太郎

平成28年卒業 (高68回)



3列目 船橋先生、岡田監督、志村、河本、堀、石田、石森、祝儀園、清水、秋元、紫村先生、岡村先生

2列目 吉田、速水、木村、佐藤、竹川、大石、篠原

1列目 本島、木越、佐々木、市石、森田、近藤、井上

【公式戦の記録】

戦績

●西部地区新人大会

川越10 - 1 川越初雁 (1回戦)

川越5 - 4 所沢西 (2回戦)

川越1 - 2 所沢北 (準々決勝)

●秋季大会西部地区予選

川越9 - 1 飯能 (1回戦)

川越0 - 1 所沢商業 (決定戦)

●春季西部地区大会

川越11 - 3 狭山経済 (1回戦)

川越1 - 0 豊岡 (決定戦)

●春季県大会

川越8 - 9 久喜北陽 (1回戦)

●夏季選手権大会

川越0 - 14 川越東

(五回コールド)

私たちの最後の夏季大会は二回戦で強豪校である川越東高校に敗北し、終わりを告げた。抽選会でキャプテンの市石が川越東の隣を引いた時、会場が少しどよめいたのを覚えている。それほどにこの代の川越東は力を持っていたが、関東でも上位の強豪校と試合ができるいい機会であり、自分たちの力がどこまで通用するかを確かめることができると楽しみでもあった。試合は川越初雁球場で行われたため、当日は全校応援という形になった。自校の生徒の応援に背中を押され、これなら勝利するこ

ともできると気持ちを高めて試合に臨んだが、現実は甘くなかった。やはり川越東は全体的に能力が高く、初回から一方的に押されるゲームになってしまった。最後の大会であるという緊張と相手が強豪校であるという気負いもあったのだろう、本当の実力差以上に差がついたゲームになってしまった。初回から終わらない相手の攻撃、あっという間に終わってしまうこちらの攻撃。気付けば試合は終了していた。敗北が決まってからもすぐには悔しさがこみ上げてこないほどだった。こんなにもあっけなく私たちの三年間の最後は終わってしまったのかと誰もが思ったことだろう。しかし、高校野球は最後の大会が全てではない。それよりもむしろその過程でどれだけ多くのことを学ぶことができたかが大切である。同じ目標、それに対する努力を共有したかけがえない仲間、苦しいことにも耐えていく忍耐力、一つの物事に熱意を注ぐ集中力、他にも数え切れないほど多くのことを学ぶことができた。これこそが高校野球であろう。高校野球に高校生活を全て捧げた22人全員が、野球部で良かったと思っているに違いない。少なくとも私はあの三年間を人生で一番濃く、成長できた三年間だと思っている。22人全員の思いを載せたいところだが、ページの都合上人数を絞って数人のコメントを載せたいと思う。

今でも最後の夏の悔しさは忘れることはできません。しかし最高の仲間に出会え、川高野球部で三年間やりつづけたことは一生の財産です。川高野球部永遠なれ！
主将 市石

野球人生で得たものは数え切れないほどあるけれど、僕が川越高校の野球部で得たものは一生付き合える仲間たちです。頼もしい人ばかりなので大学、そして社会に出てからも助け合って（主に助けてもらう）いきたいです。
副主将 清水

私の高校生活は野球部を中心に回っていた。毎日の練習は仲間たちと共にやっていたからこそ楽しく、中身のあるものだったと思う。そこで大切な仲間と忍耐力、集中力を得られたことは、この先自分が生きていく上で必ず良い方向に働くだろう。高校生活を野球部に捧げて良かったと思っている。
捕手 石田

あの3年間の中で心に残ったというか体に刻み込まれたのはあのデッドボールだろう。肩甲骨を折ったのは初めてだし、今でもたまに痛むことがある。
右翼手 祝儀園

あの3年間を振り返ると、春に久喜北陽に逆転で負けたのが1番悔しい。当時は必死だったつもりだったが、今になるとなんであの時もっと…と後悔が多い。だからこそ今を後悔ないように生きよう、出会えた仲間を大切にしよう、そう思っている。
一塁手 篠原

川高らしい頭を使った野球を学んで、野球の見方が広がり、より野球を好きになったように感じます。最後の夏大でメンバーに入れなかったことは、当時は悔しいことでしたが、将来川高野球部で集まったときの酒の肴になるといいです。
二塁手 堀

高校生活をほぼ捧げたと言っていい野球部であったが、捧げるだけの価値は十二分にあった。あの3年間を無くして、今の忍耐力、根気、継続力を持ち合わせることはなかったであろう。
三塁手 佐々木

平成29年卒業 (高69回)



三列目左より石森 奥村 中静 田作
二列目左より尾中 佐藤 岡村 渡邊 花香 山内 小野寺 新井 宮武 臼井
一列目左より柳澤 永作 高松 三浦 坪内 上田 沢田 上月

自分たちが川越高校野球部に入部してから一年半。新チーム最初のミーティングで甲子園出場を目標に「全力疾走、全力発声」をチーム理念として掲げてスタートを切りました。スタートしてから柳澤がキャプテンに決まるまでは時間がかかったけど全員野球で一日一日、一球一球全力で練習をしました。

しかし新人戦、秋季大会と結果を残せず全員が気持ちを改め、冬を乗り越えました。

春になって夏の遠征で一勝も出来なかった福島東相手に一勝一分と、成長を見せることができました。

甲子園に出場するためには最後の夏の大会しかなくなり、そのためにも重要となった春季大会。一回

戦で九回裏に逆転サヨナラで勝利し、勢いそのままにシード校相手に一点差で勝利して県大会出場を決めました。県大会一回戦では小野寺が相手を一点に抑えるも一点もとれずに敗れ一点の重さというのを全員が再度認識し、高校野球最後の大会を迎えました。

全国高校野球選手権

埼玉大会（第98回） 2回戦

浦和東 0 1 1 0 1 1 2 0 0 0 0 1 | 7

川 越 0 1 0 3 0 0 0 0 2 0 0 0 | 6

(延長12回)

粘り強く戦うも…

1点ビハインドで迎えた延長12回裏、2死満塁、打席には4番上月。ネクストバッターサークルには9回裏に土壇場で同点タイムリーを放った佐藤。後

がない状況にもかかわらず負けを想像したものはおそらくいなかったでしょう。上月が最後の打者として打ち取られた後、柳澤主将の「整列しよう。最後までしっかりやろう」の声がかかるまで個人的に時間が止まったように感じていたのを思い出します。自分たちが目指していた「粘り強く戦う野球」は体現できたもののスコア6-7、あと1点及びませんでした。

最後に、川越高校野球部での三年間で「人間力」の大切さを指導者の方々に教えていただきました。野球を通して学んだことを一人一人がこれからの人生で活かしていきたいと思います。



朝日新聞7月14日朝刊

平成30年卒業 (高70回)



2列 原田 深谷 高野 秦 郷右近 富澤 梶田 吉田 畠山 今井
1列 岡嶋 大山 福田 高橋 野口 弘重 高木 緒方 黒山 藤巻

全国高校野球選手権

埼玉大会 (第99回) 4回戦



エース今井(左)、捕手福田(右)

最大5点のリードを奪ったが、延長で星野に屈し、11年ぶりの5回戦進出とはならなかった。岡田実監督は「うちにとって良い流れだったが、相手の力が上だった」と敗戦を受け入れた。7-2の6回途中、先発の郷右近から今井にスイッチ。過去2戦と同様の継投策に出たが、今井が相手打線につかまった。「納得の球を投げられていたのに…」勝利の方程式は崩れた。

それでも、春の県大会で川越東相手に好投し、選手間投票などで夏も背番号1を託された右腕を責める者は誰もいない。

試合の流れは川越に傾いていた。

9回の表の守備、1死2塁で中堅に抜けそうなライナーを遊撃手の弘重が好捕。そのまま2塁ベースに飛び込み併殺とした。直後の攻撃、1死で左前打の福田が2盗に成功し、一打サヨナラの場面を築いたが、2者連続三振を喫した。

1点を追う4回には、富澤の適時打などで4-2とし、なお2死満塁で打席には4番野口。「主将としての思いを込めた」とフルカウントから高めの直球を振り抜いた打球は左中間を破り、3者が生還。紫色に染まった一塁側応援席を揺らした。今期は、「粘り強さ」と「勝負強さ」をスローガンに練習に一球一打を重んじてきた。主将の野口は「結果には満足してないが、自分たちの野球はできた」と、チームの成長を実感していた。

<公式戦の記録>

戦績4勝4敗

新人戦

川越 1対8 武蔵越生

秋季大会西部地区予選

川越 3対6 市立川越

春季大会西部地区予選

川越 10対2 狭山工業

川越 5対3 所沢

一県大会—

川越 0対3 川越東

全国高校野球選手権

埼玉大会(99回)

川越 5対2 桶川

川越 5対1 鴻巣

川越 8対14 星野

~~~~~

### ▽4回戦

星野 0011050106 14

川越 0106010000 8

(延長10)

川越 打安点

⑧ 秦 6 1 1

⑥ 弘重 3 0 0

② 福田 4 2 1

③5 野口 5 1 3

⑦ 高橋 5 2 0

①3 郷右近 3 0 0

⑨ 高野 4 1 0

⑤ 深谷 1 0 1

1 今井 1 0 0

1 畠山 0 0 0

H 大山 1 1 0

R 原田 0 0 0

④ 富沢 5 2 1

計 3810 7

▽三塁打 野口

▽二塁打 秦

試合時間 2時間52分

出典 丹羽良平 (2017年7月19日)

高校野球ワイド 『埼玉新聞』、朝刊

### 3年間を振り返って

今井 健

1度しか経験できない高校野球を最高のメンバーとプレーすることが出来て本当によかったし一生の思い出になると思います。

大山 壮哉

この野球部で過ごした時間は、とても充実していて最高でした。この仲間と野球ができて、よかったと思います。

岡嶋 紀人

2年半の高校野球生活は、あっという間でした。その中で1番感じたことは色々な人が応援してくれているということです。そんな環境でプレーでき、とても幸せだったと感じています。

緒方 優介

この高校3年間は、大きな財産になりました。野球の技術だけでなく、仲間と共通の目的に向かっていくなど、多くのことを学べました。

黒山 浩希

野球部で、自分は仲間の大切さを学びました。どんな時も仲間の言葉が自分の励みになり、楽しい2年半を送れました。一生の思い出です。

郷右近 亮

グラウンドで切磋琢磨し日々、部室で笑いあった日々、最高の仲間たちと戦うことができて本当に良い宝物ができました。

梶田 龍介

私が川越高校野球部で最も良かったことは、投手として後ろを守ってくれる素晴らしい仲間恵まれたことです。

高木 大誠

この川越高校の野球部でプレー

した2年半。心技体の成長に加え、かけがえのない仲間と出会うことが出来ました。一生の宝物です。

高野 裕久

桶川戦でチームの勝利に貢献出来て良かったです。あの経験を忘れずにこれからの自信にしていきたいと思います。

高橋 優大

最後の夏の大会をたくさんの応援のなかで楽しくプレーすることができて、幸せでした。怪我をした時、支えてくれて、いろいろな言葉やアドバイスをくれたスタンドにいる3年生のことを思うと自然と涙があふれました。

富澤 佑樹

『今やるべきことに全力で取り組む』このチーム理念から、自分に足りない部分を明確にして、力をつけるためには何をしたらいいのか考え、それを自主的に取り組むことの大切さを学びました。

野口 恵汰

このチームは力がないと言われていましたが、最後の夏の大会では、1年間新チームから成長したことを出せたので良かったです。

秦 毅実彦

怪我が多くつらいこともあったけれど、野球をやっていて良かったと思っています。楽しかったこともつらかったことも一生の思い出です。

畠山 太志

この大切な仲間たちと過ごしてきた時間が、自分にとっての一番の思い出です。様々な面で成長させてくれたことに、とても感謝しています。

原田 友弘

一番の思い出は、夏の大会です。

最後の最後でグラウンドに立ち、声援を背にプレー出来たのは、非常に大きな財産となりました。この仲間と最後まで野球が出来て良かったです。

弘重 裕貴

どんなときでもグラウンドにでて練習に励んだ日々は自分を大きく成長させてくれた。負けることで強くなり、勝つことで仲間と喜びを共有できた。最高の仲間と共に川越高校で野球をしたことは、一生の誇りである。

深谷 隆裕

夏の大会では自分たちの野球ができ、4回戦まで勝ち進むことが出来ました。色々あったけど人間的にも成長できた最高の2年半でした。

福田 直紀

自分の高校野球の3年間を振り返ってみると、短いようでとても長いものでした。その中で怪我から野球を嫌いになり、やめようと思うことも何度もありました。しかし、チームの仲間がいたから最後までやり抜く事が出来ました。衝突することも何度かありましたが、それも踏まえていい仲間だったと思っています。この仲間と野球ができて幸せでした。

藤巻 海飛

出会うことができて本当によかった、そう思える仲間達と野球をすることが出来たのは、私の誇りです。

吉田 龍矢

公式戦に出たりはしなかったけど、仲間と力を合わせて頑張った日々はきっと、一生の宝になるでしょう。

## 平成31年卒業 (高71回)



2列 原田 深谷 高野 泰 郷右近 富澤 梶田 吉田 畠山 今井  
1列 岡嶋 大山 福田 高橋 野口 弘重 高木 緒方 黒山 藤巻

### 西部地区新人大会

#### 1回戦

豊岡 030000000 3  
川越 00100104× 5

#### 2回戦

所沢北 0000000 0  
川越 202500× 9  
(7回コールド)

#### 3回戦

西武文理 011001110 5  
川越 002001000 3

### 秋季大会

#### 1回戦

日高 0000010 1  
川越 0300014 8  
(7回コールド)

#### 代表決定戦

山村学園 0400114 11  
川越 0100000 1  
(7回コールド)

### 春季大会

#### 1回戦

所沢中央 010410102 9  
川越 003000000 3

### 夏季南埼玉大会

全158チーム、162校が出場した。今大会は第100回の記念大会であった。そのため、全国でも出場校の多い埼玉県予選は、北埼玉大会(74チーム)と南埼玉大会(84チーム)に分かれて行われた。その中で2枠の甲子園出場権をかけて熱戦が埼玉県各地で繰り広げられた。川越高校は南埼玉大会に出場した。

#### 1回戦

川越 2022035 14  
岩槻 0001000 1  
(7回コールド)

(川)東村、斎藤広-萩生田

(評) 2年生の5番渡部が3安打5打点と存在感を示した。チームを7回コールド勝ちに導く活躍にも「先輩が声掛けしてくれたおかげ」と至って謙虚だった。

岩槻・深沢投手「直球が狙われた。川越の声援が耳に入って集中できなかった。」 (埼玉新聞)

#### 2回戦

川越 011022010 7  
大宮光陵 000110100 3

(川)斎藤広、金井、東村-萩生田

(評) 川越は、勝利はしたもの、もどかしさが残る試合展開となった。19安打を打ちながらも11残塁。紫村監督は「これだけ点が入らなかったのは、自分の責任。選手は責められない。」とかばった。主将の三辻は「この試合をプラスに考えて、次は無駄な失点をなくしていきたい」と前を向いていた。

(埼玉新聞)

#### 3回戦

川越 0000000 0  
狭山ヶ丘 040410× 9  
(7回コールド)

(川)村上、篠田、東村-萩生田

(評) 川越、小技決まらず好機に無得点

「1回のチャンスに点が欲しかった」と紫村監督。先取点を奪って、勢いをつけたかったが相手にはね返された。1回から4回まで先頭打者が出塁しチャンスをつくるも無得点。3回1死3塁で2番

鈴木がスクイズ失敗。鈴木は「自分の武器である得意なバントが決められなかった。1点を取って流れを変えたかった」と悔やんだ。

主将の三辻は「打つ力がないので、小技を絡めて得点に結び付けなかった。相手の実力が上だった」と完敗を認めた。 (埼玉新聞)

## 野球部を引退して

主将 三辻 翔

自分が川越高校野球部で2年半を過ごして周りの人の支えのありがたみを実感しました。キャプテンをやりましたが、チーム全体の士気を高めることの難しさや勝てない時など辛いこともありました。相談に乗ってくれて、自分がやろうと言ったことに前向きに協力してくれる人が多く、まとめることができました。夏の大会では大声援の中、野球ができて、試合に出られなくてもサポートしてくれた選手には本当に感謝しています。本当にあっという間の2年半でした。川高野球部で過ごした高校野球生活は一生の財産です。

副将 佐藤 峻

野球部では辛く苦しい時の方が多かった。特に夏休みの毎日の練習や、冬の300mシャトルランなど。しかし、高校野球で学んだことや得られたことは多く2年半続けることができてよかったと感じている。もちろん部活の中で悔しい思いや、「あの時こうしておけば」という思いはたくさんした。しかし、この失敗を今できてよかったのではないかと思う。今後はこの失敗と学んだことを生かし、川高野球部OBという名に恥じないように生きていきたい。

副将 篠田 亜門

自分は高校野球をやってきて、正直に言うと練習は長くてきついし試合では努力しても結果が出ないときもあるし、上手くいかないことばかりだった。しかし、逆にこの経験を社会に出る前にできて良かったと思う。これで人間力と逆境を生き抜く力はついたと思うのでブラック企業に入っても働いていける。また何をするにも誰かの支えがないとダメなんだということも分かった。支えてくれた方々には本当に感謝している。2年半の高校野球人生に悔いはない。

副将 石田 伊吹

自分がこの2年半で特に実感したのは、人のつながりの強さだ。練習では仲間の存在が励みになった。また公式戦では、選手の家族や川高生、何十年前に卒業されたOBなど大勢の方々が応援しに来てくれた。3年の夏、1塁側スタンドが紫色に染まった景色、気迫のこもった応援は鮮明に覚えている。目標は達成できなかったが、チーム全体が勝利を目指したことに価値があると思う。

高校野球での2年半をわすれることは絶対にない。



<訂正>

## 平成31年卒業（高71回）



後列左より、篠田、岩崎、西室、村上、東村、小玉、金井、斎藤  
前列左より、佐藤、東、山下、三辻、石田、萩野、萩生田